續國譯漢文大成

文學部 五十八

309
65

帙入

始

續國譯漢文大成

文學部 第五十八册（第十五帙の二）

蘇東坡詩集 三の二

吉岡徳郎氏 寄贈本

昭和十六年 三月

309
65

蘇東坡詩集　卷十九

古今體詩　五十首。

雲上訪道人不遇

雲上に道人を訪うて遇はず

花光紅滿欄。草色綠無岸。　花光紅にして欄に滿ち、草色綠にして岸無し、

不逢青眼人。長歌白石爛。　青眼の人に逢はず、長歌す白石爛たりと、

【字解】(一)滿欄　欄は花園の欄を謂ふ、(二)青眼人　晉の阮籍は俗士を見れば、白眼にて之を迎へ、高士を見れば、青眼を以て之を迎ふ、(三)白石爛　青成適ゝ齊、擊ゝ牛角ゝ歌曰、南山矸、白石爛、生不ゝ逢ゝ堯與ゝ舜禪、短布單衣適至ゝ骭、從ゝ昏飯ゝ牛薄ゝ夜半、長夜漫漫何時旦と、

【題義】雲水の上に道人を訪うて遇はず、よつて此詩を作りしものである、

【詩意】花の光は紅色が庭欄に滿ちて居る、而して草色は綠色が岸の無きまで齊しく生じて居る、不幸にして青眼の人に逢ふことが出來ず、唯空しく長歌する白石爛たりと、

【餘論】此の五言は紅綠青白の文字を使用する爲め、偶爾設けたる題目、王右丞の下馬飲君酒の詩と同樣、必ず其の人有るのではない、一種游戯の詩と見れば可い、

李公擇過高郵。見施大夫與孫莘老賞花詩。憶與僕去歲會於彭門。折花餽筍故事。作詩二十四韻見戲。依韻奉答。亦以戲公擇云

李公擇、高郵を過ぎ、施大夫と孫莘老との賞花の詩を見、僕と去歲彭門に會し、折花餽筍の故事を憶ひ、詩二十四韻を作りて戲れらる、韻に依つて奉答、亦以て公擇に戲るると云ふ

汝陽眞天人。絹帽著紅槿。
纏頭三百萬。不買一微哂。
共誇青山峰。曲盡花不隕。
當時謫仙人。逸韻謝封畛。
詩成天一笑。萬象解寒窘。
驚開小桃杏。不待雷發軫。
餘波尙涓滴。乞與居易穎。
爾來誰復見。前輩風流盡。

汝陽は眞の天人、絹帽紅槿を著く、
纏頭三百萬、一微哂を買はず、
共に誇る青山峰、曲盡くるも花は隕ちず、
當時謫仙人、逸韻封畛を謝す、
詩成りて天一笑し、萬象寒窘を解く、
驚き開く小桃杏、雷の發軫を待たず、
餘波尙ほ涓滴、乞與す居易と穎、
爾來誰か復た見ん、前輩風流盡く、

寂寞兩詩人。殘紅對櫻筍。
饑腸得一醉。妙語傳不泯。
君來恨不與。更復相牽引。
我老心已灰。空煩扇餘燼。
天游照六鑿。虛室掃充牣。
懸知色竟空。那復嗜鳥吻。
蕭然一方丈。居士老龐蘊。
散花從滿褊。不答天女問。
故人猶故目。怨句寫餘恨。
疑我此心在。遮防費欄楯。
應虞已斃蛇。折尾時一蠢。
仄聞孟光賢。未學處仲忍。

【自注】開閤故事。見木傳。

寄招應已足。左右侍雲鬢。

寂寞たる兩詩人、殘紅櫻筍に對す、
饑腸一醉を得、妙語傳へて泯びず、
君來りて與へざるを恨む、更に復た相牽引す、
我老いて心已に灰す、空しく煩はす餘燼を扇ぐを、
天游六鑿を照らす、虛室充牣を掃ふ、
懸かに知る色竟に空なるを、那ぞ復た烏吻を嗜まんや、
蕭然たる一方丈、居士老龐蘊、
散花して滿褊に從ふ、天女の問に答へず、
故人猶ほ故目、怨句餘恨を寫す、
疑ふ我が此の心在るを、遮防欄楯を費す、
應虞已に蛇を斃し、折尾時に一蠢、
仄に聞く孟光の賢、未だ學ばず處仲の忍を、
寄招應に已に足るべし、左右雲鬢に侍す、

何時花月夜。羊酒謝不敏。　何れの時か花月の夜、羊酒不敏を謝せん、
此生如幻耳。戲語君勿慍。　此の生幻の如きのみ、戲語君慍る勿かれ、
應同亡是公。一對子虛聽。　應に同じかるべし亡是公が、一に子虛に對して聽ふに、

【字解】【一】汝陽　汝陽は郡名、唐の玄宗の長子璡は汝陽郡に封ぜらる、杜子美の詩、汝陽三斗始朝天と、【二】天人　杜子美の詩、汝陽讓帝子、眉宇真天人と、【三】紹帽　「南卓羯鼓錄」に、汝陽王璡、玄宗特鍾愛焉、每遊幸、頃刻不會、嘗戴一研紹帽、打一曲、上自摘紅槿花一朶、置帽上其處、二物皆滑、久之方安、遂奏鄂山香一曲、花不墜落、上大笑、賜璡金器、と、【四】鑪頭　「唐書郭子儀傳」に、田承嗣二百匹、爲子儀鑪頭之資、と、俗語の祀儀と同じ、【五】三百萬　「太眞外傳」に、八姨爲秦國夫人、上羯鼓、曲罷、上敍曰、阿瞞樂籍、今日幸得供奏、夫人、請一鑪頭、奉國曰、豈有大唐天子阿姨無錢用耶、遂出三百萬、爲一局、焉と、【六】微晒　「論語先進」に、夫子晒之と、晒笑と成語し、嘲笑と同じ、【七】青山峯　「羯鼓錄」に、宋開府、與上論鼓事、謂上曰、頭如青山峯、手如白雨點、即羯鼓之能事、山峯取不動、雨點取碎急、と、【八】逸韻　顧況酬李侍郎詩、逸韻不可酬、と、【九】封畛　田のアゼを曰ふ、今は封郡の異味、【一〇】天一笑　杜子美の詩、每蒙天一笑、「仙傳拾遺」に、玉女投壺爲而脫、懼不接者、天爲之笑、と、【一一】寒窘　窘は窮困、塞に苦しむ、【一二】發軫　車を出すこと、「魏書高祖紀」に六軍發軫、と、【一三】餘波　「尚書禹貢」に、餘波入於流沙、と、【一四】泪滴　杜子美の詩、重露成泪滴、と、【一五】居易穣　白居易字は樂天、元微之名は稹、中唐に在りて酬和尤も盛ん、世に元白と稱す、【一六】風流蘊藉　「南史張融傳」に、其從弟弔之曰、阿兄風流蘊藉、と、【一七】牽引　「左傳襄公十三年」に石魚曰、今楚不競、行人何罪、止鄭一朝、以除其偪、使睦而疾楚、以固於晉、焉用之、使睦而廢其使、怨其君、以疾其大夫、兩相牽引也、不輸愈乎、と、又「易經注」に、茅之爲物、拔其根、而相牽引者也、と、互に手を引くのである、【一八】心已灰　前に辨ぜり、【一九】餘燼　「左傳成公二年」に、齊賓胡人曰、請收合餘燼、背城借一、と、【二〇】充朝　「漢司馬相如傳」に、萬端鱗萃充朝其中、者、不可勝紀、と、又「後漢書清河王慶傳」に、珍寶玩好、充朝其邸、と、充實、充滿と同じ、【二一】色竟空　「心經」に色即是空と、【二二】烏咮　「史記蘇秦傳」に、飢人飢而不食烏喙者、爲其愈充腹、而與餘死一同之急也、と、毒草の名、トリカブト、烏頭とも曰ふ、【二三】居士　維摩詰居士傳、【二四】散花　天女が花を散じ、其の花が衣に著きたる者は修道の足らぬ者、花衣に著かざる者は修道の徹せる者、【二五】椀　花を盛り、佛に奉げる器、「柳子厚文」に、爲衣椀之贈、と、【二六】故日　「水經注」に、齊存故日、と、【二七】怨句　韓退之の詩、頗蒙怨句、刺棄遺、と、【二八】倒箱　「阿彌陀經」に、七重羅網、周匝圍繞、と、【二九】鹿鹿　山澤を掌る官を鹿人と曰ふ、鹿鹿は之を指すか、【三〇】折尾　杜子美の詩、折尾能一掉、飢腸皆已穿、と、【三一】孟光賢　後漢梁鴻字は伯鸞の妻、名は德曜字は孟光、【三二】嵇仲　「晉書王敦傳」に、王愷字處仲、嘗設酒、教與導俱在坐、有女妓吹笛、小失音韻、愷便殺之、一坐改容、教神色自若、飲日又造愷、愷使美人行酒、以客飲不盡、輒殺之、酒至教導所、教故不肯持、美人悲懼失色、而教徹然不覺、尋還歎曰、處仲若當世心懷剛愎、非令終也、と、【三三】羊酒　韓退之の詩、買羊酤酒謝不敏、偶逢明月、曠桃李、と、【三四】如幻　「金剛經」に如幻如夢、と、【三五】亡是公　晉讀は「ブシコウ」、訓讀はコノコウナシである、「漢書司馬相如傳」に、子虛虛言也、と、【三六】聽　笑ふ鶴、

【題義】李公擇が高郵を過ぎ、施大夫と孫莘老が花を賞する詩を見て、公は去歲彭門に會合して、花を折り筍を餽りし故事を憶うて詩二十四韻を作りて戲れらる、是に於て今其の韻に次して以て奉答、亦以て公擇に戲るると、

【詩意】花を賞するに就いて想像するは唐の汝陽王の如きは眞に天人である、嘗て絹帽に紅槿花を玄宗の爲め付著せられた風流の韻事がある、賜ふ所の鑪頭は三百萬錢であるが、一微晒だに買ふとではない、皆共に誇る青山峯の鼓曲を巧みに彈せることを、一曲を盡すまで帽上の花が墜ちざる程の伎を

呈する、盛唐當時の謫仙人を思へば、其の逸韻の高き封畛を謝したるにあらずや、當時詩成りて天も一笑せるのである、天地萬象も春ならんとして漸く寒窮を解く、時節に驚いて開くは小桃杏である、雷聲が發軫するを待たずして、其の餘波は尚涓滴の音を成して居る、それは白樂天や元稹の類である、それより以來誰か復見るや、逸韻は勿論餘波も涓滴も風流が盡きたのである、其の人物寂寞中に施と莘との兩詩人を見れば、尚ほ春の殘紅が初夏の櫻筍に對する感がある、佩腸も一醉を得るの思ひある、妙語も後に傳へて泯びない、李君の來りて與にせざるを恨む、更に復相牽引せんと思ふ、我は身老いて心も已に死灰と爲る、空しく餘燼を扇揚するは煩はしい、鈞天の游は六鑿を照らすであらう、虛室は充牣する物を掃ふべきである、懸に知る色相あるものは竟に空と爲る、那ぞや復烏吻を嗜まんや、蕭然たる一方丈、方丈に坐する者は居士老龐蘊である、天女の散花は衣裓に滿つるに從す、天女に對して我無心なれば其の問も答ふるの要はない、而かも故人は今の我を見る猶故の我を見る目を以てする、是の故に怨句を以て其の餘恨を寫されたのであらう、公等は疑ふ我が今日の心猶ほ疇昔の心が存在すると、故に散花を遮防するに橫欄直楯を費すならんと思ふ、應虞は已に蛇を斃す、其の蛇は苦しまぎれに折れた尾を一蟄する、我は仄かに聞く細君は孟光の賢と同じと、而かも其の良人は未だ處仲の剛忍を學ばない、寄招することも應に已に定めて、左右に天女の如き雲翼を侍せしむることであらう、何れの時か春江花月の夜に於て、羊を料し酒を暖めて不敏を謝するであらう、思ふに此の生は夢幻の如きのみ、以上の語は皆戲語であるから公等慍ることは爲るな、例へば亡是公と云ふ元來無き人が子虛といふ元來無き人を一听するに同じきことである、

【餘論】紀曉嵐曰く、語自俊逸、唯起處十數句、爲二韻所一牽、不レ免二迂遠一と、公の如き天下の大才も、韻を驅使すること能はずして、反つて韻の爲め驅使せらるるの感あるは、次韻の惡法の罪である、公が樂天を好むは次韻の癖を同じうするからであらう、王若虛の說に、次韻は實に作者の大病なり、詩道宋人に至り、已に自から衰敝す、才識東坡の如きも、亦波蕩して之に從ふを免れず、集中次韻する者、幾んど三の一、技巧を窮極し、一時を傾動すと雖も、而かも天を害すること全く多し、蘇公をして此れ無からしめば其れ古人を去る何ぞ遠からんや、明淸間の大家は皆此の說である、蘇公の爲め實に千秋の恨事である、

王鞏清虛堂

清虛堂裏王居士。
閉眼觀心如止水。
水中照見萬象空。
敢問堂中誰隱几。
吳興太守老且病。

王鞏の清虛堂

清虛堂裏の王居士、
閉眼觀心止水の如し、
水中照し見る萬象の空なるを、
敢て問ふ堂中誰か几に隱るると、
吳興の太守老いて且病む、

【字解】〔一〕居士　譯語である、梵語は「キャラオッ」と稱す、財に居る士、家に居るの士、在家にて佛道を志ざす者、「慧遠雜摩經疏」に居士有レ二、一廣積二資財一、居レ財之士、名爲二居士一、二在レ家修レ道、居家道士と、「禮記玉藻」に、鄭康成曰、居士

堆案滿前長渇睡。
願君勿笑反自觀。
夢幻去來殊未已。
長疑安石恐不免。
未信犀首終無事。
勿將一念住清虛。
居士與我蓋同耳。

堆案滿前長く渇睡す、
願はくは君笑ふ勿れ自觀に反するを、
夢幻去來殊に未だ已まず、
長く疑ふ安石恐らくは免れざるを、
未だ信せず犀首終に無事、
一念を將て清虛に住する勿かれ、
居士我と蓋し同じきのみ、

に、南郭子綦、隱ル几而坐、顏成子游、侍ス於前ニ曰、何居乎、形固可ル使ル如ス槁木ニ、心固可ル使ル如ス死灰ニ乎、子綦曰、今之隱ル几者、非ス昔之隱ル几者ニ と、【六】 吳興 「元和郡縣志」に、吳興、古防風氏之國、三國時、置ニ吳興郡ニ、隋仁壽二年、改ニ湖州ニ、東至ニ杭州ニ一百九十里と、今日の浙江省吳興縣、【七】 太守 晉の何楷以て公自身を譬ふ、【八】 堆案 劉禹錫の詩、莫レ言堆案無ニ餘地ニ、白樂天の詩、堆案拋來眼較明と、【九】 反自觀 注家に異說あると思ふが、余は前文の如くに調む、【一〇】 安石 「晉書」に、謝安棲ニ遲東土ニ、雅レ放ニ情邱壑ニ、然每ニ游賞ニ、必以ニ妓女ニ從、安石妻、劉惔妹也、見ニ家門富貴、而安弼靜退ニ、乃謂曰、丈夫不レ如レ此也、安掩レ鼻曰、恐レ不免耳と、【一一】 犀首 「史記」に、陳軫謂ニ犀首ニ曰、公何好レ飲也、曰無レ事也、軫曰、吾請令ニ公憂ニ事、可乎と、【一二】 同耳 「晉張華傳」に、翠臣論レ伐レ吳、帝曰、此自晉意、舉俱興レ吾同耳と、

【題義】 王定國が開封府城東の清虛堂に寄題して作りし詩、

【詩意】 清虛堂裏の王居士は、終日眼を閉ぢ自心を觀察して心は止水の如く靜寂である、而して其の觀察力が徹底したるときは水中に於て萬象の澄空なるを照見する、敢て問ふ堂中几に隱る者は誰であると、吳興の太守は年老いて且身病む、簿書堆案なるも整理もせずに渇睡する、願はくは君よ君が自己の心觀と相反するを笑うてはいかぬ、假令ひ觀心するも夢の如く幻の如く心が去來して殊に已むことはない、長く疑ふ一生世と違ふと云うた安石も到當世に出づるを免れなかつた、また犀首が無事だと云うたことも信を措けない、君に忠告するが世を逃れんとする一念を將て清虛の一堂に終身住することなぞ止め玉へ、必ずや居士の眞想は我と同じきのみと思ふ、

【餘論】 紀曉嵐曰く微嫌レ多ニ偈頌之氣ニ と、余は謂ふ是れ偈頌七分、詩品は三分、公の詩として最下乘なるものである、

道藝處士也と、【一】 閉眼 心の散亂を防ぐには必ず眼を閉づ、【二】 觀心 「景德傳燈錄」に法融禪師、入ニ牛頭山石室ニ、唐貞觀中、四祖入レ山、見ニ師端坐自若ニ、祖問曰、在レ此作ニ什麼ニ、師曰觀心と、【三】 止水 「楞嚴經」に、月光童子、白レ佛言、有レ佛出世、名爲ニ水天ニ、教ニ諸菩薩、修ニ習水觀ニ、我於ニ是時ニ、室中安禪、我有ニ弟子ニ、圓レ聽觀レ室、唯見ニ清水、遍在ニ室中ニ と、【四】 隱几 「莊子齊物論」

次韻答王鞏

我有方外客。顏如瓊之英。
十年塵土窟。一寸冰雪清。
竭來從我遊。坦率見眞情。
願我無足戀。戀此山水清。
新詩如彈丸。脫手不暫停。

次韻、王鞏に答ふ

我に方外の客あり、顏は瓊の英なるが如し、
十年塵土の窟、一寸冰雪清し、
竭來我に從つて遊び、坦率眞情を見る、
願みるに戀ふに足る無し、戀ふ此の山水の清きを、
新詩彈丸の如し、脫手暫らくも停まらず、

昨日放魚回。衣巾滿浮萍。　昨日放魚して回る、衣巾浮萍滿つ、
今日扁舟去。白酒載烏程。　今日扁舟去る、白酒烏程より載す、
山頭見月出。江路聞鼉鳴。　山頭月の出づるを見、江路鼉の鳴くを聞く、
莫作孺子歌。滄浪濯吾纓。　孺子の歌を作す莫かれ、滄浪に吾が纓を濯ふ、
吾詩自堪唱。相子棹歌聲。　吾が詩自から唱ふるに堪へたり、子が棹歌の聲を相ふ、

【字解】〔一〕方外　釋氏か道士を曰ふ、今多くを指すのであらう、〔二〕瓊之英　「詩」に倚レ之以ニ瓊英一と、「吳女歌」に、美人榮榮兮、顧若ニ宮之英一と、〔三〕竭來　「洪武正韻」に、竭來猶ニ聿來一也と、向來も同義、サキゴロである、「後漢張衡思玄賦」に、彌レ志竭來從ニ元謀一、蓋ニ我所レ求夫何思と、〔四〕如彈丸　「南史」に、沈約謂ニ王志一曰、賈弟子、文章之美、可レ謂後來獨步、謝朓、嘗見語曰、好詩圓美、流轉如ニ彈丸一と、〔五〕坦率　虛飾の反對である、〔六〕烏程　地名、〔七〕鼉鳴　「晉安博物記」に、鼉聲夜鳴、磕磕然と、鱷の一種である、

【詩意】我に方外の客がある、此の僧の顏は瓊の精英なるが如くである、十年間も塵土窟に往來して、而かも一寸冰雪の清きを失はない、竭來より我に從つて遊び、其の性格は坦率にして眞情を見ることが出來る、其の戀はれる我自身を顧みると一向に戀はるる價値は無い、戀ふ所は此の山水の清きに在る、新詩は文字圓轉にして彈丸の如しと思ふ、脫手して暫らくも停滯することはない、昨日放魚して回る、歸來して見れば浮萍が衣巾に附著して居る、今日も又扁舟に乘じて去る、白酒を載せて烏程より發する、山頭を望んで月の出づるを見、江路の間に鼉の鳴くを聞く、孺子は滄浪の水清めば吾纓を濯はんと歌うたが、それに倣うてはいかぬ、吾が詩は吾自から唱ふるのがよい、吾は子が棹歌の聲を相ふのである、

【餘論】王鞏に答ふるに方外客を以て起し、王鞏に和する意味は薄い、或は題目を編纂者が誤れるものにやとも思はる、特に冰雪清、山水清、韻法として此の使用法は曾てない、紀曉嵐は第二句の顏如五字を抹殺せるは當を得て居る、公の詩として是亦最下乘なるもの、

和孫同年卞山龍洞禱晴

孫同年が卞山の龍洞に晴を禱るに和す

吳興連月雨。釜甑生魚蛙。　吳興連月の雨、釜甑魚蛙を生ず、
往問卞山龍。曷不安厥家。　往いて問ふ卞山の龍、曷ぞ厥の家に安んぜざる、
梯空尙巉絕。俯視驚谽谺。　梯空にして尙巉絕、俯視して谽谺に驚く、
神井湧雲蓋。陰崖垂蘚花。　神井雲蓋に湧き、陰崖蘚花垂る、
交流百道泉。赴谷走羣蛇。　交流百道の泉、谷に赴き羣蛇走る、
不知落何處。隱隱如縷車。　知らず何れの處に落つ、隱隱縷車の如し、
我來叩石戶。飛鼠翻白鴉。　我來りて石戶を叩く、飛鼠白鴉翻る、

寄語洞中龍。睡味豈不嘉。　寄語す洞中の龍、睡味豈嘉せざらん、
雨師少弭節。雷師亦停撾。　雨師少しく節を弭めよ、雷師も亦撾を停めよ、
積水得反壑。稻苗出泥沙。　積水壑に反るを得、稻苗泥沙を出づ、
農夫免菜色。龍亦飽豚瑕。　農夫菜色を免かる、龍も亦豚瑕に飽く、
看君擁黃紬。高臥放晚衙。　看る君が黃紬を擁し、高臥して晩衙を放つを、

【字解】〔一〕生魚鮭　「戰國策」に、知伯攻趙城、水不沒者三版、臼竈生龜、人馬相食と、〔二〕卞山　卞山の祠を黃龍洞と曰ふ、〔三〕巉絕　韓退之の詩、梯空上秋旻、孤撑有巉絕と、山のサガシキを曰ふ、〔四〕衙　「司馬相如傳」に、衙衙鬱鬱、阜陵別隅と、谷の大に開けたる貌、〔五〕神井　劉憲の詩、神井堪消沙と、〔六〕陰崖　潘岳の賦、眺巖嶽之陰崖と、嗑鳥の詩、摩壘蘚花增と、〔七〕百道泉　沈佺期の詩、竹裏泉摩百道飛と、〔八〕飛鼠　「太白仙人掌茶詩序」に、荆州玉泉寺、近清溪商山、山洞往往有乳窟、窟中多玉泉、交流、中有白編蝠、大如鴉と、太白の詩、常聞玉泉山、山洞多乳窟、仙鼠如白鴉、倒懸清溪月と、「臨安志」に、大霧洞中有白鼠、長可二尺、僊者名爲玉芝と、〔九〕弭節　「離騷」に吾令羲和弭節兮と、〔一〇〕反壑　歸壑と同じ、「禮記」に、土反其宅、水歸其壑と、〔一一〕菜色　「禮記」に、以三十年之通、雖有凶旱水溢、民無菜色と、〔一二〕豚瑕　「白樂天黑潭龍樂府」に、假託神龍食豚盡、重泉之下龍知無と、〔一三〕黃紬　「傳游錄」に、文潞公、初知潞次縣、題詩於新衙鼓上云、民向鼓樓一一狂揚、揚多揚少不知他、如今幸有黃紬被、努力頭來早放衙と、

【題義】孫同年が久雨を憂へて卞山の龍洞祠に晴を禱る詩を作る、乃ち之に和して作れるもの、

【詩意】吳興の地は三十日を越して猶ほ雨が降る、一家の釜甑に魚蛙を生ずるに至る、乃ち往いて卞山の神龍に問ふ、曷ぞ厥の洞中に安處せずして天空を妄りに飛ぶや、我は空に梯して君に問はんと欲するも天路は巉絕である、下を俯視すれば壑の谿谷たるに驚く、神井は雲蓋を湧出するのみでない、陰崖は總て皆蘚苔の花を垂れる、東西より交流する泉は百道の泉と爲る、谷に赴いて羣蛇を走らし、其の歸著するは何れの處なるやを知らない、水聲の隱隱たるは纒車を轉ずる如くである、我來りて石戸を叩けば、飛鼠が出でて白鴉は翻へる、我は洞中の龍神に寄語することがある、天上を飛躍するよりは睡味の方が嘉いではないか、雨神も少しくは節を弭め、雷神も亦撾を停止し、而して積水は一齊に壑に反りなば、稻苗は青青と泥沙を出で、農夫は欣欣として菜色を免れ、龍も亦豚瑕に飽いて居る、我は看ん孫君が黃紬を著擁して、安心高臥して晩衙を早く放退することを、

【餘論】紀曉嵐曰く、寄語句、直貫レ到二龍亦句一、看君二句、接得少突、前路只有二我來字一、未レ出レ孫也と、詩義明白、讀むに窘屈の感はない、

乘舟過賈收水閣。收不在。見其子。三首

舟に乘じて賈收が水閣を過ぐ、收在らず、其の子を見る　三首

愛酒陶元亮。能詩張志和。　酒を愛す陶元亮、詩を能くす張志和、
青山來水檻。白雨滿漁簑。　青山水檻に來り、白雨漁簑に滿つ、

淚垢添丁面。貧低舉案蛾。淚垢添丁の面、貧低舉案の蛾、
不知何所樂。竟夕獨酣歌。知らず何の樂しむ所ぞ、竟夕獨り酣歌す、

【字解】〔一〕愛酒　杜子美の詩、愛酒晉山簡と、〔二〕添丁　賈が子の名、賈詩に、莫怪添丁郎、淚下作面垢と、〔三〕舉案　「後漢書」に、梁鴻妻孟光、鴻至吳、依大家皐伯通、居廡下、爲人賃舂、每歸妻爲具食、不敢於鴻前仰視、舉案齊眉と、〔四〕能詩　杜子美の詩、能詩何水曹と、〔五〕水檻　杜子美の詩、新添水檻供垂釣と、〔六〕酣歌　白樂天の詩、客去有餘興、竟夕獨酣歌と、

【題義】舟に乘じて賈收が水閣を過ぎたるも、生憎收が不在なりしため、其子供に會見して此詩を作つたもの、

【詩意】酒を愛する晉の陶元亮は今日君である、詩を能くする唐の張志和は今日君である、君が住居は青山が水檻に遶りて來る、白雨は珠を跳らして漁簑に滿つるを見る、淚を流せば垢を伴ふ添丁の面である、貧甚しと言ふとも猶ほ案を舉ぐるの貞妻がある、知らず其の何の樂しむ所ぞや、竟夕獨り酣歌する、

〔二〕

嫋嫋風蒲亂。猗猗水荇長。嫋嫋として風蒲亂る、猗猗として水荇長し、
小舟浮鴨綠。太杓瀉鶯黃。小舟は鴨綠に浮び、大杓は鶯黃に瀉ぐ、

【字解】〔一〕嫋嫋　風のソヨグ貌、〔二〕風蒲　蒲は水蓆ガマ、古詩に風蒲亂曲浦と、〔三〕猗猗　「詩衞風」に綠竹猗猗と、美しく盛んなる貌、〔四〕水荇　荇は水蓆、アサザである、夏時黃花を著く、〔五〕鴨綠　李白の詩、遙看漢水鴨頭綠、恰似蒲萄初釀醅と、〔六〕大杓　水などを汲む器、杓杓と成語する、〔七〕鶯黃　鶯兒は黃色、借りて嬌美なるものを形容する、今酒を謂ふ、杜子美の詩、鶯兒黃似酒、對酒愛新鶯と、

【詩意】嫋嫋として風に吹かるる蒲は亂れる、又猗猗として盛んなる水荇は長い、小舟を鴨綠の水に浮べ、而して大杓を以て鶯黃酒を瀉ぐ、得意なるは酒詩の社である、一生を送るは魚稻の鄉である、樂しいかな一煩事の無きこと、然らば何れの處に在つても清涼である、

〔三〕

曳杖青苔岸。繫船枯柳根。杖を曳く青苔の岸、船を繫ぐ枯柳の根、
德公方上冢。季路獨留言。德公は方に冢に上り、季路は獨り言を留む、
已占蒲魚港。更開松菊園。已に蒲魚の港を占む、更に開く松菊の園、
從茲來往數。兒女自膺門。茲より來往數ば、兒女自から門に膺す、

【字解】〔一〕曳杖　「檀弓」に、孔子負手曳杖と、「樂書任昉傳」に、爲新安太守、率然曳杖徒行と、〔二〕繫船　樂天の詩、應

狩ニ此樽ニ繫ニ龍舟ニと、【三】 德公　「襄陽記」に、諸葛孔明、每ニ至ニ德公家一、輒拜ニ牀下一、德公初不レ令レ止、司馬德操、嘗謂ニ德公一、値ニ其婦レ汝上ニ家、德操徑入ニ其室一、呼ニ德公妻子一、使ニ運作レ黍、徐元直、向云當來就ニ我與ニ德公一、談ニ其妻子一、皆羅ニ拜堂下一、奔走共設、須臾德公還直入、不レ知ニ何者是客一也と、【四】 季路　即ち子路、姓は仲、名は由、親に事へて孝、米を百里の外に負ふ、孔悝の難に死し、二子を戒しむる言を留むる、【五】 蒲魚　「周禮」に、其利蒲魚と、【六】 松菊間　淵明の辭に、三徑就レ荒、松菊猶存と、【七】 來往　數　杜子美の詩、自レ今興興盡、來往亦無レ期と、【八】 蓽門　「晉書李密傳」に、內無ニ蓽門五尺之童一と、杜子美の詩、舉レ樂能無レ蓽、蓽門幸有レ兒と、

【詩意】 杖を青苔の岸上に曳き、船を繫ぐ枯柳の根に、龐德公は方に冢に上り、季路は子の爲めに善言を留む、其の居は已に蒲魚の港を占領する、其の上更に松菊の園を開く、茲より來往も頻繁であらう、兒女が出でて客を門に迎へることと思ふ、

【餘論】 紀曉嵐は第一首を評して句陋拙と、此の詩を三復するに疏樸の處は見るべきも、陋拙の處は見ない、殊に第一首は中晚唐人の間に伍して、遜色無きものと思ふ、如何なる點が陋拙であるか、紀を九泉の下より喚起して其の意見を聞かまほしく思ふのである、

次韻孫祕丞見贈

孫祕丞が贈らるるに次韻す

感概清哀似變風。　感概清哀變風に似たり、
老於詩句耳偏聰。　老いて詩句に於て耳偏に聰なり、
迂疎自笑成何事。　迂疎自から笑ふ何事を成すと、
冷澹誰能用許功。　冷澹誰か能く許功を用ふる、
不怕飛蚊如立豹。　怕れず飛蚊の立豹の如きを、
肯隨白鳥過垂虹。　肯て白鳥に隨つて垂虹を過ぎん、
吟哦相對忘三伏。　吟哦相對して三伏を忘る、
擬泛冰溪入雪宮。　冰溪に泛んで雪宮に入らんと擬す、

【字解】 【一】 感概　「後漢郭解傳」に、少時陰賊感概、注云、感概者、感ニ意氣一而立ニ節概一也と、劉夢得の詩、中年多ニ感概一と、【二】 變風　子夏詩序に、王道衰、禮義廢、政教失、國異レ政、家殊レ俗、而變風變雅作矣と、【三】 冷澹　「全唐詩話」に、楊汝士曰、笙歌聞沸、勿レ作ニ冷澹生活一と、【四】 立豹　蚊有ニ文采一者、謂ニ之豹脚一、【五】 白鳥　蚊子を曰ふ、杜子美の詩、江湖多ニ白鳥一と、朱新仲の「猗覺寮雜記」に、杜詩、黃鳥時鳴ニ白鳥一飛、蓋也、蚊亦名ニ白鳥一、「月令」仲秋之月、鞠鳥羞鳶、注白鳥謂ニ蚊蚋一と、【六】 吟哦　韓退之の詩、帝欲レ長ニ吟哦一と、【七】 三伏　夏至後第三庚爲ニ初伏一、四庚爲ニ中伏一、立秋後初庚爲ニ終伏一、謂ニ之三伏一、【八】 雪宮　次公曰、世謂ニ湖州一、爲ニ水晶宮一と、

【題義】 孫姓の人が祕書省丞の官に在る、此の人が詩を贈られたるに次韻したのである、

【詩意】 君の詩を誦すれば感概に發して其の調や清哀變風に似て居る、我老いたるも詩句に於ては耳偏に聰である、迂疎は自から笑ふ何事も成し得ない、冷澹にしては誰か能く許の如きの功を用ひんや、一向に怕れない飛蚊の立豹の如く羣至するに、肯て白鳥の飛ぶに隨つて垂虹亭を過ぎる、吟哦し相對して三伏の炎熱を忘る、冰溪に舟を泛べて雪宮に入らんと擬するのである、

【餘論】公は石曼卿紅梅の詩、認レ桃無二緣葉一、辨レ杏有二青枝一を評して曰ふ、此至陋語、蓋邨學中體也、故作レ詩力去二此弊一と、然らば余は問ふ、不レ怕飛蚊如二立豹一、肯隨二白鳥一過二垂虹一は如何なるや、飛蚊と白鳥は文字は形を異にするも同じく是れ蚊蚋の一物である、公として杜詩に於て一物を別句となし、以て對を取りし例の有無を知つて居られることと思ふ、要するに此の詩は公の詩として聲聞乘に屬するものである、

與レ客游二道場何山一得二鳥字一

客と道場何山に游ぶ、鳥の字を得たり

清溪到レ山盡。飛路盤空小。
紅亭與二白塔一。隱見喬木杪。
中休得二小菴一。孤絕寄二雲表一。
洞庭在二北戶一。雲水天渺渺。
菴僧俗緣盡。淨業洗未了。
十年畫二鵲竹一。益以詩自繞。
高堂儼像設。禪室各深窈。

清溪山に到りて盡き、飛路盤空小なり、
紅亭と白塔と、隱見す喬木の杪に、
中ごろ休して小菴を得たり、孤絕雲表に寄す、
洞庭北戶に在り、雲水天渺渺、
菴僧俗緣盡き、淨業洗うて未だ了せず、
十年鵲竹を畫く、益す詩を以て自から繞る、
高堂儼像設け、禪室各の深窈、

奔泉何處來。華屋過二溪沼一。
何山隔二幽谷一。去路清且悄。
長松度二翠蔓一。絕壁挂二啼鳥一。
我友自レ杭來。尙歎所レ歷少。
歸途風雨作。一洗紅日燎。
俄驚萬竅號。黑霧卷二蓬蓼一。
舟人紛變レ色。坐羨輕鷗嬌。
我獨喚二酒杯一。醉死勝二流殍一。
書生例二强狠一。造物空煩擾。
更將二掀舞勢一。把レ燭畫二風篠一。
美人爲二破顏一。正似二腰支嫋一。
明朝便陳迹。清景墮二空杳一。
作レ詩記二餘歡一。萬古一昏曉。

奔泉何れの處より來る、華屋溪沼を過ぐ、
何山幽谷を隔て、去路清うして且悄、
長松翠蔓を度る、絕壁啼鳥挂かる、
我が友杭より來る、尙ほ歎ず歷る所の少きに、
歸途風雨作り、一洗す紅日の燎くを、
俄かに驚く萬竅號び、黑霧蓬蓼を卷くに、
舟人紛として色を變じ、坐して羨む輕鷗の嬌たるを、
我獨り酒杯を喚び、醉死流殍に勝る、
書生强狠例なり、造物空しく煩擾、
更に掀舞の勢を將て、燭を把つて風篠を畫く、
美人破顏を爲す、正に腰支の嫋きに似たり、
明朝便ち陳迹、清景空杳に墮つ、
詩を作りて餘歡を記す、萬古一昏曉、

【字解】〔一〕紅亭　「吳興續記」に、郡有二五亭一、白鵲亭、集芳亭、山光亭、朝霞亭、碧波亭、〔二〕白塔　白塔巷、有二白石塔一焉

と、但し此の詩の白塔は道場山中の白塔を指して、巷の白塔ではない、【四】木杪　謝靈運の詩、俯視喬木杪と、【五】俗緣　淨業の反對、【六】俗緣　俗緣の反對、【七】優像　貴僧の像か、佛祖の像か未詳、【八】華屋　堂堂たる屋宅を云ふ、曹植の樂府に、生存華屋處、零落歸二山邱一と、【九】萬竅　萬籟と同じ、【一〇】流殍　流人や殍人、【一一】强狠　「陸賈新語」に俗負二强狠一と、【一二】破顏　卽ち笑顏、【一三】昏曉　杜子美の詩、陰陽割二昏曉一と、

【題義】客と同じく道場山卽ち何山の正眞寺に游び、分韻して公は鳥の字を得て此の詩を作る、

【詩意】清溪の流れは山に到りて盡きる、而して山の飛路は空に盤廻して小徑である、其の間に於て紅亭と白塔が、或は隱れ或は見る喬木の杪に、中途にして休息するに小菴がある、其の小菴は孤絕にして雲表に寄する如くである、洞庭湖は北戶より望むを得、雲か水か天か渺渺として居る、其の菴主は已に俗緣の盡きた人である、が淨業洗ふも未だ全く人間を脫せない、それは十年間も鵠竹を畫くことである、畫のみでない詩累も亦身を繞る、高堂には儼像の設けがある、禪室は各の深く且窈窕である、奔泉は何れの處より來るかを知らない、華屋は溪沼を過ぎて見える、何山は段段と幽谷を隔たる、下山しての去路も淸且悄、見玉へ長松は翠色の蘿蔓を度り、絕壁は啾啾と啼く鳥を挂ける、我が友は杭州より來る、尙ほ歎ず經歷する所の少なきを、歸途に就かんとして風雨が作り、紅日の燎熱を一洗し去る、俄かに驚く萬竅の號怒するに、忽ちにして黑霧は蓬蓼を卷いて、舟人は皆紛として顏色を變ふ、坐して羨む輕鷗が風波を知らぬ顏をして矯たるを、我は多くの舟人と異なりて獨り酒杯を喚び、自から思ふ醉死は流殍より勝ると、書生は古今通例强狠である、造物は空しく煩擾、更に掀舞の勢を將て、我は燭を把つて以て風篠を畫かんと思ふ、美人は破顏を爲して、正しく腰支の嬝きに似たるを知る、此の游も此の景も明朝は便ち陳迹と爲る、淸景も空杳に墮するのである、記念として詩を作り餘歡を記す、萬古千秋要するに一昏曉に過ぎない、

【餘論】紀曉嵐曰く、起四句如レ畫、通首亦緊峭之中、不レ乏二波折一、又紀は醉死以下を評して、又生二一波勢一、更滿足、勢須二如レ此作一收、余も此の評に服する者である、

僕去杭五年。吳中仍歲大饑疫。故人往往逝去。聞湖上僧舍。不復往日繁麗。獨淨慈本長老。學者益盛。作詩寄之

僕杭を去ること五年、吳中仍歲大饑疫、故人往往逝去す、聞く湖上の僧舍、復た往日の繁麗ならずと、獨淨慈の本長老、學者益す盛ん、詩を作りて之に寄す

來往三吳一夢間。　三吳に來往する一夢の間、
故人半作冢纍然。　故人半ば作る冢纍然、
獨依舊社傳眞法。　獨り舊社に依りて眞法を傳ふ、

【字解】【一】三吳　「通典」は、吳郡と丹陽と吳興、之を三吳と謂ふ、「水經」は、吳興と吳郡と會稽とを三吳と謂ひ、「指掌圖」は、蘇州と常州

要與遺民一度厄年。　遺民と厄年を度らんと要す、
趙叟近聞還印綬。　趙叟近ろ聞く印綬を還すと、
竺翁先已反林泉。　竺翁先づ已に林泉に反る、
何時策杖相隨去。　何れの時か策杖相隨つて去り、
任性逍遙不學禪。　性に任せて不學の禪に逍遙せん、

度と、【四】趙叟　趙清獻公抃を謂ふ、【五】印綬　「漢朱買臣傳」に、還二其印綬一と、元豐二年に趙抃は、太子少保の官を辭職する、【六】竺翁　淨慈の本長老を言ふ、辨才を指すとの說もある、竺は僧の意、翁の意、【七】策杖　左太冲の詩、策杖招隱士と、【八】不學禪　「景德傳燈錄」に、潙州長慶寺大安禪師云、在二潙山一三十年、喚二潙山飯一、牸二潙山屎一、不レ學二潙山禪一、只看二一頭水牯牛一と、

【題義】僕が杭州を退去してより五年間を過ぐ、其の間吳中は歲歲飢疫が次ぎ、其の疫の爲め友人が往往逝去すと聞く、湖の淨慈寺や靈隱寺も昔日の繁盛はない、が本長老のみ其の會下が盛んであると、乃ち此の詩を作りて寄せる、

【詩意】三吳の間を往來する五年であるが殆んど一夢間なる思ひがある、五年間には故人が半ば冢墓に歸して冢墓のみ纍然である、我は獨り舊同盟の社に依りて佛の眞法を傳へ、且は遺民と共に飢疫の厄年を越さんと思ふ、天下の大官なる名士も近來辭職したる事を聞く、且人天の導師たる高僧も城を去つて林泉に反られたと聞く、何れの時にか策杖して師に隨つて去り、本性に任せて不學の禪に逍遙することが出來るか、

【餘論】此等の七律は公の作として平衍冲澹のもので誦すべきものである、老熟の境に造らざれば、此の詩は作る能はざるものである、

と湖州とを三吳と謂ふ、通例は水經の說を取る、今の詩は公の生涯として蘇常湖の三吳說が適當なるものと思ふ、【二】遺民　「左傳閔公二年」に、衛之遺民男女七百有三十人と、【三】厄年　「後漢書王莽傳」に、下二吏祿制度一曰、予遭二陽九之厄一、百六之會、國用不レ足、民人騷動、今厄會已

船趕風　船趕の風

吳中梅雨既過。颯然清風彌旬。歲歲如此。湖人謂之船趕風。是時海船初回云。此風自海上與船俱至云爾。

【訓讀】吳中梅雨既に過ぎ、颯然たる清風旬に彌る、歲歲此の如し、湖人之を船趕の風と謂ふ、是の時海船初めて回ると云ふ、此の風、海上より船と俱に至ると爾か云ふ、

三旬已過黃梅雨。　三旬已に過ぐ黃梅の雨、
萬里初來船趕風。　萬里初めて來る船趕の風、
幾處縈回度山曲。　幾處か縈回山曲を度る、
一時清駛滿江東。　一時清駛江東に滿つ、
驚飄蔌蔌先秋葉。　驚飄蔌蔌秋に先つの葉、

【字解】【一】黃梅雨　宋陸佃の「埤雅」に、江湘二浙、四五月之間、梅欲二黃落一則水潤土溽、其鮮如レ澣、謂二之梅雨一、自レ江以南、三月雨、謂二之迎梅一、五月雨、謂二之送梅一と、夏至の前後、各の半月なれば三旬である、【二】船趕風　公の自序で明白

喚醒昏昏嗜睡翁。　喚醒す昏昏睡を嗜むの翁、
欲作蘭臺快哉賦。　蘭臺快哉の賦を作らんと欲し、
却嫌分別問雌雄。　却つて嫌ふ分別雌雄を問ふを、

幽風の賦、蔌蔌風威と、李善云ふ風聲勁捷之貌と、【四】昏昏「孟子盡心」に、今以其昏昏、使人昭昭と、くらき貌、【六】嗜睡杜牧之の文、好酒嗜睡、其癖已痼と、【七】蘭臺「宋玉風賦」に、楚襄王游蘭臺之宮、有風颯然而至、乃披襟而當之、曰快哉此風、寡人所與庶人共者耶、宋玉對曰、此獨大王之風耳、庶人安得而共之、王曰豈有說乎、玉曰、發明耳目、寧神便人、此大王之雄風也、時時嗽喉、致、死生不卒、此庶人之雌風也と、

【詩意】三旬日已に黄梅の雨を送り去る、將に夏より秋に及ばんとする時萬里より初めて船越の風が至る、其の風は幾處をか藥回して山曲を度り來るものであるか、一時疾走して勢が江東に滿つるを見る、其の急勢に驚きて飄るものは蔌蔌と響く秋を待たずして散ずる葉である、又其の風勢は喚び醒ますのである昏昏と睡を嗜む翁を、宋玉に倣うて快哉賦を作らんと思ふも、雌風の雄風のと云ふ分別するを嫌ふが故に作らない、

【餘論】紀曉嵐曰く、結亦大露二不平一と、不平を露はしたのではない、宋人として議論を著けるが當然の慣習である、

なるが、「石林避暑錄」にも、五六月間梅雨時、必有二大風一、速二晝夕一驗レ旬、吳人謂二之船越風一とある、【三】清駛　韓退之の詩、南風亦清駛と、駛は疾走又急速である、【四】蔌蔌　【六】嗜睡

丁公默送蝤蛑

丁公默、蝤蛑を送る

溪邊石蟹小于錢。　溪邊の石蟹錢より小なり、
喜見輪囷赤玉盤。　喜び見る輪囷赤玉盤、
半殼含黃宜點酒。　半殼黃を含み宜しく酒に點すべし、
兩螯斫雪勸加餐。　兩螯雪を斫りて加餐を勸む、
蠻珍海錯聞名久。　蠻珍海錯名を聞く久し、
怪雨腥風入坐寒。　怪雨腥風坐に入りて寒し、
堪笑吳興饞太守。　笑ふに堪へたり吳興の饞太守、
一詩換得兩尖團。　一詩換へ得たり兩尖團、

【題義】丁公默と云ふ人が蝤蛑を送付せられたるを作れる詩、

【詩意】溪邊の石蟹は錢より小さな形であるが、其の形の輪囷たる赤玉盤は喜び見るのである、半殼が黃を含む時は未だ柔であるから酒に點じて食ふがよい、兩螯の肉は雪を斫るが如き色にて食慾が

【字解】【一】石蟹　「蟹賦」に、明越溪澗、石穴中出二小蟹一、其色赤而堅、俗呼爲二石蟹一と、【二】輪囷　「漢鄧陽傳」に、蟠木根柢、輪囷離奇と、マガリクネル、【三】含黃　「吳興掌故集」に、蟹子未レ成時、曰二黃甲一、有二細骨一、黃依以生、入レ海則黃化爲レ子、而色赤漸長、至二春深一散レ子、則色赤餘田蟹腐と、【四】兩螯　「西陽雜俎」に、蝤蛑大者長尺餘、兩螯至强、鄧騭昔有レ人、於二水際泥穴一、探取レ之、手爲二左螯所一夾、卽以レ口嚙レ日、又爲二右螯所一夾、有レ頃而死、至レ今呼レ此、爲二蝤蛑指一、尖斫猶勝二圓斫好一と、母螯の斫は圓、雄螯の斫は尖である、

進む、蠻珍海錯は名を聞くこと久しいが、今日は怪雨腥風が坐に入りて寒きを覺ゆる、笑ふに堪へたるは吳興の饞太守である、一詩を作りて二匹の尖團と交換した、

送孫著作赴考城。兼寄錢醇老李邦直二君於孫處有書見及

孫著作の考城に赴くを送り、兼ねて錢醇老・李邦直に寄す、二君、孫の處に於て、書あり及ばる

使君閒如雲。欲出誰肯伴。
清風獨無事。一嘯亦可喚。
來從白蘋洲。吹我明月觀。
門前遠行客。青衫流白汗。
問子何悤悤。王事不可緩。
故人錢與李。清廟兩圭瓚。
蔚爲萬乘器。尙記溝中斷。
子亦東南珍。價重不可算。
別情何以慰。酒盡對空案。
惟持一榻涼。勸子巾少岸。
北風那復有。塵土飛灰炭。
欲寄二大夫。發發不可絆。

【字解】【一】閒如雲　白樂天の詩、靜將鷗鷺伴、閒與雲相似と、【二】一嘯　「後漢方術傳」に、趙炳、嘗臨水求度、船人不知之、炳乃倚蓋坐其中、長嘯呼風、風從而濟と、【三】白蘋洲　「吳興統記」に、白蘋洲、在苕溪東南一里と、【四】明月觀　王註云、明月觀、在江寧府故臺城と、【五】遠行客　古詩に、人生天地間、忽如遠行客と、【六】悤悤　杜子美の詩、寄語北來人、後來莫悤悤と、【七】王事　「毛詩」に、王事靡盬、憂我父母と、【八】圭瓚　宗廟に用ふる酒器、「毛詩」に藎爾圭瓚と、【九】萬乘器　「漢鄧騭傳」に、蟠木根柢、輪囷離奇、而爲萬乘器者、以左右先爲之容也と、【一〇】溝中斷　「莊子天地篇」に、百年之木、破爲犧樽、青黃而文之、其斷在溝中、比犧樽於溝中之斷、則美惡有間矣、其於失性一也と、【一一】價重　杜子美の詩、價重百車駕と、【一二】發發　「毛詩」に、南山烈烈、飄風發發と、

【題義】著作郎の官を奉ずる孫氏が考城に赴くを送りて作り、兼ねて錢醇老と李邦直との二君に寄示したのである、二君は孫氏に書翰を送られて我の事にも言及されたのである、

【詩意】使君たる我は身閒にして宛も雲の如くである、出でんと欲して誰か肯て伴ふ者がある、伴ふものは獨清風のみである、我れ一嘯すれば清風は以て喚ぶことが出來る、其の來るは白蘋洲の方より子亦東南の珍、價重うして算ふべからず、別情何を以て慰せん、酒盡きて空案に對す、惟一榻の涼を持す、子に勸む巾少岸、北風那ぞ復た有らん、塵土灰炭飛ぶ、二大夫に寄せんと欲す、發發絆ぐべからず、

來る、而して我を吹いて明月觀に到らしむ、忽ち門前遠行の客を見る、其の人や青衫に白汗を流して居る、問ふ子は何の故に惶惶たるやと、子は曰ふ王事は決して緩うすべからざるが故である、故人の錢李の二君は、清廟の兩圭瓚にも比すべきである、蔬として萬乘の器である、尙ほ記す溝中の斷を、子も亦東南の珍寶である、其の價は重くして計算以外の珍である、離別の情は何を以てか慰するや、酒盡きれば空案に對するのみ、又唯一榻の涼風を持するのみ、子に勸む窮屈の態度を爲さずして少しく巾を岸てよ、北風は那ぞ復た有つて、塵土には灰炭を飛ばすであらう、二大夫に詩を寄せんと欲するも、颿風は發發として絆ぐこと出來ない、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、起結甚別、斗入奇絕、塵土句少欠レ雅と、

泛舟城南。會者五人。分韻賦詩。得人皆苦炎字。四首

舟を城南に泛べ、會する者五人、分韻詩を賦す、人皆苦炎の字を得たり　四首

城中樓閣似魚鱗。　城中樓閣魚鱗に似たり、
不見清風起白蘋。　見ずや清風の白蘋に起るを、
試選苕溪最深處。　試に選ぶ苕溪最深の處、
仍呼我輩不羈人。　仍ほ呼ぶ我輩不羈の人、

【字解】〔一〕魚鱗　「楚辭」に魚鱗屋兮龍堂と、〔二〕白蘋　宋玉の「風賦」に起二於青蘋之末一と、湖洲に白蘋洲あるが故、〔三〕苕溪　「地志」に、天目山、一名二浮玉山一、苕溪出焉、在二於餘杭安二縣界一、耆老相傳云、夾岸多二苕花一、每秋風飄二散水上一、如二飛雪一、故因名と、〔四〕不羈人　韓退之の文、惠師者乃是不羈人と、

【補】遶郭　白樂天の詩、遶二郭荷花三十里一と、姜白石云、吳興號二水晶宮一、荷花絳蕤、陳簡齋詩云、今年何以報二荷花一、餘杭水門、二河合二於北郭一、殺務前與二城東水一合、分爲二兩派一、一由二東北上塘一、入二大運河一、一由二西北一、過二江漑橋以北一、入二安吉州界一、曰二下塘河一と、

【題義】舟を城南に浮べて遊んだ時に、會する者五人であつて、韻を分つて詩を賦したが、公は人皆苦炎の四字を得、此四首の詩を作つたのである、

【詩意】城中の樓閣は宛も魚鱗の如く、只今は清風の白蘋を吹くを見る、試みに苕溪の最深處まで入りて去れば、人は呼ぶ我が輩は不羈の人であると、船を窺ふの野鶴は下らんと欲する狀を作すが下らない、燭を見るの飛蟲は空しく自から馴る、郭を遶るの荷花は一千頃もある、誰か知らんや六月の夏に下塘の春を作すを、

窺レ船野鶴何曾下。　船を窺ふ野鶴何ぞ曾て下らん、
見レ燭飛蟲空自馴。　燭を見て飛蟲空しく自から馴る、
遶レ郭荷花一千頃。　郭を遶る荷花一千頃、
誰知六月下塘春。　誰か知らん六月下塘の春、

【補】下塘　「成淳臨安志」に、上下塘、河南、自二天宗水門一、餘杭水門一、二河合二於北郭一、殺務前與二城東水一合、分爲二兩派一、一由二東北上塘一、入二大運河一、一由二西北一、過二江漑橋以北一、入二安吉州界一、曰二下塘河一と、

〔一〕

苦熱誠知處處皆。　苦熱誠に知る處處皆きを、
何當危坐學心齋。　何くにか當に危坐して心齋を學ぶべき、

【字解】〔一〕危坐　端坐、正坐と同じ、正坐すれば姿勢高危に見ゆる故、〔二〕心齋　「莊子人間世篇」

海螯要共詩人把。　海螯は要ず詩人と共に把らん、
溪月行遭霧雨霾。　溪月行くゆく霧雨に遭うて霾からん、
鄉國飄零斷書信。　鄉國飄零書信斷え、
弟兄流落隔江淮。　弟兄流落して江淮を隔つ、
便應築室苕溪上。　便ち應に室を苕溪の上に築き、
荷葉遮門水浸堦。　荷葉門を遮り水堦を浸すべし、

流落　杜子美の詩、故鄉有弟妹、流落關塞邱虛と、

【詩意】苦熱は誠に知る何處も皆同じきを、何くに於てか危坐して心齋を學ばんと欲するや、海螯は要ず同調の詩人と共に把るのが可い、溪月は初めは明輝でありしが徐徐に霧雨の爲め霾に遭ふ、鄉國は飄零するが故に書信を斷絶するに至る、弟兄は流落して江と淮とを隔絶するに至る、便ち應に室を苕溪の上に築きて、荷葉は門を遮り水は堦を浸すの景を見んと、

〔三〕

紫蟹鱸魚賤如土。　紫蟹鱸魚賤しうして土の如し、
得錢相付何曾數。　錢を得て相付す何ぞ曾て數へん、

【字解】〔一〕賤如土　白樂天の詩、米價賤如土と、〔二〕何曾數　「晉書五行志」に何間蛇女工數錢と、

に、顧四曰、象問心齋、仲尼曰、唯道集虛、虛者心齋也と、〔三〕海螯　「晉書」に、畢卓嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒盃、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生一矣と、〔四〕霾雨霾　白樂天の詩、霾雨霾檐雨と、霾はツチケムリである、〔五〕飄零　杜子美の詩、垂老見飄零と、〔六〕

碧筩時作象鼻彎。　碧筩時に象鼻の彎を作し、
白酒微帶荷心苦。　白酒微しく荷心の苦きを帶ぶ、
運肘風生看斫鱠。　肘を運らして風生じ斫鱠を看る、
隨刀雪落驚飛縷。　刀に隨つて雪落ち飛縷に驚く、
不將醉語作新詩。　醉語を將て新詩を作らず、
飽食應慙腹如鼓。　飽食應に慙づべし腹鼓の如きを、

左右挿霜刀、鱠飛金盤白雪高と、「吳興掌故集」に、潮人往時善斫鱠、縷切如絲と、〔六〕如鼓　「莊子馬蹄篇」に鼓腹而遊と、

【詩意】紫蟹も鱸魚も當り年で其の價は土の如く賤し、錢を與ふれば何匹でも吳れて魚の數なぞは關はん、戯れに碧筩を造れば象鼻の彎曲する狀を爲す、筩中に盛る白酒は微しく荷心の苦味を帶びる、魚を料理せんと肘を運らせば風が生ずる是れ鱠を斫るのである、刀を下すに隨つて魚の白身が雪が落ちるかと疑ふそれは飛縷である、余は醉語を將て直ちに新詩となすこと出來ない、飽食すれば應に慙ぢる腹が鼓の如く大膨脹する、

〔四〕

橋上游人夜未厭。　橋上の游人夜未だ厭かず、

【字解】〔一〕風簷　杜子美の詩、

共依水檻立風簷。　共に水檻に依りて風簷に立つ、
樓中煑酒初嘗茨。　樓中酒を煑て初めて茨を嘗め、
月下新妝半出簾。　月下新妝して半ば簾を出づ、
南郭清游繼顏謝。　南郭の清游顏謝に繼ぎ、
北窗歸臥等羲炎。　北窗の歸臥羲炎に等し、
人間寒熱無窮事。　人間の寒熱窮まり無きの事、
自笑疎頑不受痁。　自から笑ふ疎頑の痁を受けざるを、

【詩意】橋上の游人は夜も猶ほ厭はぬ、共に水檻に依りて風簷に立つて居る、而して樓中に酒を煑る者は初めて茨を嘗め、月は新妝を凝らして半ば簾を出づる、南郭の清游は顏公や謝公の蹤を繼ぐのである、北窗に歸臥すれば身は伏羲や神農氏と等しい、人間は寒熱變じ易く窮まり無き事であるが、我は自から笑ふ疎頑なれば普通人間の病む痁と云ふ病を受けたことがない、

【餘論】紀曉嵐は第一首を評して、入手恣逸、妙不二單弱一と、余は其の病を見る、不見、見燭、曾下、下塘、是である、紀は第二首を評して、有二疎宕之氣一と、第三首を評して、仄韻作二五律一已不可、況於二七律一と、余は其の病を見る、如土、如鼓、作象、作詩、紀は第四首を評して、別無二佳處一、唯末句押韻甚巧と、余は其の病を見る、游人、清游、人間、要するに四首共に公として聲聞乘に屬するものである、

[一] 簷雨細飛レ風と、張耒の詩、靜入二風簷一夜雨聲と、[二] 嘗茨　茨は水蓼、オニバス、ミブキ、芒刺あり食ふべし、[三] 新妝　徐悱が妻の劉氏の詩、落日更新妝と、司空圖の詩、晚妝留拜レ月、慾上水晶簾と、[四] 顏謝　顏況の「湖州刺史廳壁記」に、在レ晉則謝安、謝萬、王羲之、王坦之、王獻之、同朝則顏魯公忠烈也、袁紹事、高濂正也、劉員外、全白文翰也、[五] 羲炎　太皞伏羲氏、炎帝神農氏、[六] 寒熱「南史」に、不レ能レ翻二復言語一、自生二寒熱一也と、[七] 不受痁　次公曰、痁速疾也、其爲レ狀、一寒一熱と、痁は瘧、オコリである、

與王郎夜飲井水

王郎と夜井水を飲む

吳興六月水泉溫。　吳興六月水泉溫なり、
千頃菰蒲聚鬬蚊。　千頃の菰蒲鬬蚊を聚む、
此井獨能深一丈。　此の井獨り能く深きこと一丈、
源龍如レ我亦如レ君。　源龍我の如く亦君の如し、

【詩意】吳興の六月は水泉溫かである、千頃の菰蒲に鬬蚊が集る、此の井は獨り能く深きこと一丈、源龍我の如く亦君の如くである、

次韻李公擇梅花

李公擇の梅花に次韻す

詩人固長貧。日午饑未レ動。　詩人固長貧、日午饑ゑて未だ動かず、

偶然得一飽。萬象困嘲弄。
尋花不論命。愛雪長忍凍。
天公非不憐。聽飽卽喧鬨。
君爲三郡守。所至滿賓從。
江湖常在眼。詩酒事豪縱。
奉使今折磨。清比於陵仲。
永懷茶山下。攜妓修春貢。
更憶檻泉亭。插花雲髻重。
蕭然臥濡麓。愁聽春禽哢。
忽見早梅花。不飲但孤諷。
詩成獨寄我。字字愈頭痛。
嗟君本侍臣。筆橐從上雍。
脫韡吟芍藥。給札賦雲夢。
何人慰流落。嘉蔿天爲種。

偶然一飽を得、萬象嘲弄に困しむ、
花を尋ねて命を論せず、雪を愛して長く凍を忍ぶ、
天公憐まざるにあらず、聽飽卽ち喧鬨す、
君は三郡の守たり、至る所賓從滿つ、
江湖常に眼に在り、詩酒豪縱を事とす、
奉使今折磨す、清きは於陵の仲に比す、
永く懷ふ茶山の下、妓を攜へて春貢を修す、
更に憶ふ檻泉亭、花を挿んで雲髻重し、
蕭然として濡麓に臥す、愁へ聽く春禽の哢するを、
忽ち見る早梅花、飲まず但孤諷、
詩成りて獨り我に寄す、字字頭痛を愈す、
嗟君本侍臣、筆橐上雍に從ふ、
韡を脫して芍藥に吟ず、給札雲夢を賦す、
何人か流落を慰する、嘉蔿天爲めに種う、

杯傾笛中吟。帽拂果下鞚。
感時念羈旅。此意吾儕共。
故山今何有。桐花集鳳。
君亦憶匡廬。歸掃藏書洞。
何當種此花。各抱漢陰甕。

杯は傾く笛中の吟、帽は拂ふ果下の鞚、
時に感じて羈旅を念ふ、此の意吾が儕共にす、
故山今何か有る、桐花鳳集まる、
君も亦匡廬を憶ふ、歸りて掃ふ藏書洞、
何か當に此の花を種ゑ、各の漢陰甕を抱くべき、

【字解】【一】長貧　養書張負曰、因有美如陳平長貧者乎と、【二】饑未動　白樂天の詩、痛飲因連宵、悲吟飢過午と、【三】萬象　韓退之の詩、萬類因陵暴と、【四】忍凍　孟東野の詩、凍吟成此章と、【五】喧鬨　鬨は鬨と同じ、【六】三郡　鄂州、湖州、齊州、【七】賓從　魏文帝の文に、賓從無曆と、【八】豪縱　縱は去聲、放恣なり、【九】折磨　白樂天の詩、由來才命相折磨と、【一〇】於陵仲　「高士傳」に、陳仲字子終、適楚居於陵、楚王欲以子終爲相、入告於妻、妻曰觀世多清、於是相與逃、而爲人灌園と、【一一】茶山　湖州に在り、【一二】春貢　茶を製して、貢物と爲す、杜牧之の湖州詩に、山實東南秀、茶稱瑞艸魁と、【一三】檻泉亭　齊州に在り、【一四】雲髻　「曹植洛神賦」に雲髻峩峩と、【一五】濡麓　濡山の麓、公擇が官を以て舒州を巡視せし時を云ふ、【一六】頭痛　「三國志」に、陳琳作諸書及檄、是日疾發、臥讀琳所作、翕然而起曰、此愈我病、數加厚賜と、【一七】侍臣　曹子建の詩、侍臣省文奏と、【一八】筆橐　橐は囊囊、フクロ、小を囊と謂ひ、大を囊と謂ふ、【一九】上雍　漢の司馬遷の書、迫季冬、僕又薄從上雍と、【二〇】脫韡　「舊唐書李白傳」に、玄宗欲作樂府新詞、亟召白、白已醉臥、以水灑面乘筆、頃之成十餘章、皆沈醉殿上、引足令高力士脫韡、由是斥去と、【二一】芍藥　「楊妃外傳」に、開元中、禁中重木芍藥、植於沈香亭前、會花繁開、持金花牋、宣李白、立進清平調詞、上自是顧李翰林、異於他學士、會高力士、以脫韡爲恥、異日戲曰、以飛燕指妃子、賤之甚矣、妃深然之、帝嘗三欲命白官、卒捍止と、【二三】給札　筆紙を賜はる、【二三】

雲夢　洞庭湖の七澤の一、【二四】　嘉蔵　美花を謂ふ、【二五】　笛中吟　落梅曲を謂ふ、【二六】　果下乗　「後漢書」に、袁紹献二果下馬一と、馬の高さ三尺、之に乗りて果樹の下を行く、【二七】　桐花　桐花鳥は西蜀に産する、鳳に似て小、蜀人之を倒掛子と謂ふ、【二八】　么鳳　桐花鳥を謂ふ、【二九】　此花　梅花を謂ふ、【三〇】　漢陰叟　「荘子天地篇」に、子貢南游二於楚一、反二於晉一、過二漢陰一、見二一丈人、方将二為一圃畦一、鑿レ隧而入レ井、抱レ瓮而出灌、搰搰然、用レ力甚多、而見レ功寡と、

【詩意】　詩人は固より長貧である、日午に猶ほ飢ゑて未だ活動が出来ない、偶然にも一飽を得るときは、萬象が嘲弄するかの如くなるに困しむ、花を尋ねんと意思が動けば命なぞを論ずる遑がない、且雪も愛するを以て長く凍冷を忍ぶ、天公も詩人を憐まざるのではないが、飽くことを聴けば即ち喧関するであらう、君は三郡を次ぎ次ぎと太守と爲つた、而して至る所賓客や從者が滿ちて居た、江湖の出來事は常に眼中に在りて、詩酒の會を以て豪奢なる放恣を事と爲た、又王命を奉じ使者と爲りて骨を折り心を磨す、而かも其の心事の清きは於陵の陳仲にも比すべきである、永く懐ふ茶山の下に於て、妓を攜へて春貢の茶を造修せしことを、更に記憶する檻泉亭に在りし時を、花を挿んで雲髻の重き風流の游を、爾來は蕭然として灞山の麓に臥して、愁を將て春禽の鳴哢を聴く、忽ち早梅の花開くを見、酒を飲まずして但孤吟諷詠し、其の詩を以て我に寄贈せらる、其の詩を讀めば我頭痛も平愈する、嗟乎君は本來侍從の臣である、嘗て筆案を以て上雍に隨從せるが、一旦鞾を脱せしめて芍藥を吟じた る太白の豪氣と、札を給せられて雲夢を賦せし相如との蹤を學び、遂に何人も左遷や流落を慰する無きに至る、所が嘉蔵は天の種植である、杯を傾けて落梅花曲を笛中に傳ふる、帽は拂ふ果下の縠馬に乗りて、時節に感じて以て羈旅の情を念ふ、此の意は君も我輩も同樣である、故山は今や何が有るか、定めし桐花鳥が頻りに鳴集して居るであらう、君も亦僕が蜀を想ふと同じく故郷の廬山を憶ひ、早く歸りて其の藏書洞を掃はんと、何か當に此の花を種ゑて、各の漢陰丈人の如く骨を折ることが出來るであらう、

【餘論】　紀曉嵐は評して曰く、一起口説二公擇一、却句句藏二自己一在レ内、早爲二篇末結胎一、又曰、借レ題抒レ意、梅花只借作二點綴穿挿一、方是和レ人詩、若句句實寫梅花一、便同二自詠一、又忽見早梅花の二句を評して一齊綰結、滴水不レ漏と、乃ち案ず、題目に梅花と題して詩中に梅無し、維摩の無言は竟に文殊の有言に勝るものである、

送淵師歸徑山

淵師の徑山に歸るを送る

我昔嘗爲徑山客。　我昔し嘗て徑山の客と爲る、
至今詩筆餘山色。　今に至りて詩筆山色を餘す、
師住此山三十年。　師此の山に住すること三十年、
妙語應須得山骨。　妙語應に須らく山骨を得べし、

【字解】　〔一〕　徑山客　徑山は今日の浙江省錢塘道臨安縣の北三十里に在る、唐肅宗の永泰元年に法欽、此の山に入りて修禪す、代宗の大歷四年、闕に召し、國一大師と號を賜ふ、此より宋元と世を歴て、今に至

鄿城六月水雲蒸。　鄿城六月　水雲蒸す、
飛蚊猛捷如花鷹。　飛蚊猛捷なること花鷹の如し、
羨師方丈冰雪冷。　羨む師が方丈　冰雪冷か、
蘭膏不動長明燈。　蘭膏不動長明燈、
山中故人知我至。　山中の故人我が至るを知り、
爭來問訊今何似。　爭ひ來りて問訊す今何似と、
爲言百事不如人。　爲めに言へ百事人に如かず、
兩眼猶能書細字。　兩眼猶ほ能く細字を書すと、

燭、摩燈錍些と、【七】問訊「古樂府」に、帝可問訊と、「佛經」に問訊如來と、今の句は佛經を準とする、【八】書細字　公の自注に、徑山夏無蚊、余著詩云、問龍乞水歸洗眼、欲看細字館蘇年と、

【題義】澄慧大師、名は淵と稱する僧が徑山に歸るを送る詩である、

【詩意】我は昔日徑山の客と爲りて寓居した、其の時の詩筆は平凡のもので山の皮相を寫せるのみ、然るに師は此の徑山に定住すること三十年、修行の久しき妙語も應に山の骨まで了得せらるるであらう、鄿城の地は六月の晩夏水雲蒸して、飛蚊が人を刺す猛捷にして花鷹の如くである、羨む師が徑山の方丈は夏日にも冰雪が冷やかにて、蘭膏は盡くる時無く不動にして日夜に燈が明である、山中の故人は師が歸るを聞いたなら、爭ひ來つて東坡は今日何似と問訊するであらう、師は我が爲めに挨拶して吳れ玉へ東坡は百事他人に及ばざるが、唯兩眼は猶ほ明かで細字をも書すと、

【餘論】紀曉嵐曰く、不免淺率と、余謂ふ紀は佛學を知らざれば、勝手なる批評を下す、淺率は紀自からが淺率である、自分の詩は道副の如く淺く、師が語は道育の如く深いと云ふ意義を山色と山骨とに依つて出したる處、言ふべからざる味がある、紀は學問を以て文學を解せんとする癖がある、此の詩の評に於て、最も能く其の癖を見る、

送表忠觀錢道士歸杭

表忠觀の錢道士が杭に歸るを送る

熙寧十年。詔以龍山廢佛祠。爲表忠觀。元豐二年。通敎自杭來。見予於吳興。問觀亦卒工乎。曰未也。杭人比歲不登。莫有助我者。余曰異哉杭人。重施輕財。是不獨爲福田也。將自託於不朽。今歲成矣。子其行乎。及還作詩送之。

【訓讀】熙寧十年、詔して龍山の廢佛祠を以て表忠觀と爲し、元豐二年、通敎杭より來り、予を吳興に見る、問ふ觀亦工を卒るかと、曰く未だしなり、杭人比歲登らず、我を助くる者ある莫し、余曰

く、異なる哉杭人、施を重んじ、財を輕んず、是れ獨り福田の爲めならざるなり、將に自から不朽に託せんとす、今歳成る、子共れ行くか、還るに及んで詩を作り之を送る、

【字解】〔一〕熙寧十年　宋の第六主神宗の年號、〔二〕廢佛祠　廢佛寺と見よ、祠ではない、妙因院を廢したのである、〔三〕元豐二年　熙寧十年より三年後である、同じく神宗の年號、〔四〕通敎　道士の名、〔五〕問觀　法師の住院を寺と謂ひ、道士の住院を觀と謂ふ、今此の表忠觀は吳越の錢氏一族を祀るの觀である、〔六〕重施　杭州の人間が觀を建築するに金錢を施舍するを謂ふ、〔七〕福田　道士が世世生活出來ることを謂ふ、是の福田の語は佛氏の專門語、今借りて道士に用ふ、

先王舊德在民心。
著令稱忠上意深。
墮淚行看會祠下。
挂名爭欲刻碑陰。
凄涼破屋塵凝坐。
憔悴雲孫雪滿簪。
未信諸豪容郭解。
却從他縣施千金。

先王の舊德民心に在り、
著令忠を稱す上意深し、
墮淚行いて看る祠下に會するを、
挂名爭ひ碑陰に刻せんと欲す、
凄涼破屋塵坐に凝り、
憔悴雲孫雪簪に滿つ、
未だ信せず諸豪の郭解を容るるを、
却つて他縣より千金を施す、

【字解】〔一〕先王　用語廣し、今は錢氏の祖先を謂ふ、〔二〕舊德　「周易」に、食舊德、貞厲終吉と、〔三〕著令　詔令を著明するを謂ふ、〔四〕墮淚　晉の羊祜が峴山碑を稱して墮淚碑と謂ふ、〔五〕挂名　韓退之の文、挂名經端、自託不腐、と、〔六〕碑陰　「徐陵傳大士碑」に、載在碑陰、書其名品、と、〔七〕破屋　司空圖の詩、落葉穿破屋、と、〔八〕凝坐　「晉舊文帝紀」に、留心典籍、不以居處爲意、凝塵滿席寡如也、と、謝靈運の詩、芳塵凝瑤席、と、〔九〕雲孫　錢道士を謂ふ、「爾雅」に、子の子が孫、孫の子が曾孫、曾孫の子が玄孫、玄孫の子が來孫、來孫の子が昆孫、昆孫の子が仍孫、仍孫の子が雲孫、其の意は輕遠如浮雲、とある、〔一〇〕郭解　「史記游俠傳」に、郭解洛陽人、有相仇者、邑中賢豪、居間者以十數、終不聽、客廼見解、解夜見仇家、仇家曲聽解、解乃謂仇家、洛陽諸公、在此間多不聽、今子幸而聽解、解奈何從他縣、奪人邑中賢大夫權、手、乃夜去、不使人知、と、

【題義】表忠觀を守る錢道士が杭州の其の住觀に歸るを送る詩である、

【詩意】吳越の祖先たる錢鏐の德は民心に滲み込んで在る、敕旨を以て表忠と稱する主上(神宗)の意は深きものがある、今の民は晉時の民と同じく碑を覽て淚を墮し祠下に會するであらう、又各の其の志を表したる名を碑陰に刻せんことを爭ふのである、凄涼たる錢氏の破屋は塵埃が坐に凝る如く曾ては荒れたのである、憔悴せる錢氏の雲孫は雪が簪に滿つる如くに老ゆ、諸豪が郭解の俠氣を容れたと云ふことを未だ信じない、信じない理由は却つて他縣より民が其の德を慕うて錢廟修理に千金を寄施したので知れる、

【餘論】公は別に表忠觀碑を杭州知事趙抃に代つて作りたるものがある、其の文も、其の銘も、堂堂たる傑作であるに反し、此の詩の平凡無味なるは不思議に思ふ、紀曉嵐曰く如レ此大題、何詩語凡近乃爾、豈美盡二於碑一、此不レ妨二草草一耶と、人の歸を送るのであるから、歸來後觀を守るの訓戒の意味を加ふれば可と思ふが、題目は一向に關らずして錢廟の事のみを言ふ、紀評の如く草草たる故に然るかと察する、

次韻周開祖長官見寄

俯仰東西閲數州。
老於岐路豈伶優。
初聞父老推謝令。
旋見兒童迎細侯。
政拙年年祈水旱。
民勞處處避嘲謳。
河吞巨野那容塞。
盜入蒙山不易搜。
仕道固應慚孔孟。
扶顛未可責由求。
漸謀田舍猶懷祿。
未脱風濤且傍洲。
惘惘可憐眞喪狗。
時時相觸似虛舟。
竭來震澤都如夢。
只有苕溪可倚樓。
齋釀酸甜如蜜水。
樂工零落似風甌。
遠思顔柳幷諸謝。
近憶張陳與老劉。
風定軒窗飛豹脚。
【自注】湖多蚊。土人云、豹脚者尤毒。
雨餘欄檻上蝸牛。
舊遊到處皆蒼蘚。
同甲惟君尚黑頭。
憶昔湖山共尋勝。
相逢杯酒兩忘憂。

周開祖長官が寄せらるるに次韻す

俯仰東西數州を閲す、
岐路に老ゆ豈伶優ならん、
初めは聞く父老の謝令を推すを、
旋ち見る兒童の細侯を迎ふるを、
政　拙にして年年水旱を祈り、
民勞して處處に嘲謳を避く、
河は巨野を呑むも那ぞ塞を容れん、
盜は蒙山に入るも搜し易からず、
仕道固に應に孔孟に慚づべし、
扶顛未だ由求を責むべからず、
漸く田舍を謀るも猶ほ祿を懷ひ、
未だ風濤を脱せず且らく洲に傍ふ、
惘惘憐むべし眞の喪狗、
時時相觸れ虛舟に似たり、
竭來震澤都て夢の如く、
只苕溪の樓に倚るべきあり、
齋釀　酸甜蜜水の如く、
樂工零落して風甌に似たり、
遠く思ふ顔柳幷に諸謝、
近く憶ふ張陳と老劉とを、
風定まつて軒窗豹脚飛び、
雨餘の欄檻蝸牛上る、
舊遊到る處皆蒼蘚、
同甲惟君尚ほ黑頭、
憶ふ昔し湖山に共に勝を尋ね、
相逢うて杯酒兩ながら憂を忘る、

【字解】【一】俯仰　「魯靈光殿賦」に、俯仰顧盼、東西周章と、【二】岐路　「陸士衡樂府」に、岐路交=朱輪=と、【三】謝令　「晉鄧攸傳」に、攸爲=吳郡=、刑政清明、去=郡、不=受=一錢=、百姓數千人、留=牽攸船=、不=得=進、攸乃少停、夜中發去、吳人歌=之曰、杭如打=五鼓=、難鳴天欲=曙、鄧侯挽不=留、謝令推不=去、【四】細侯　「後漢書郭伋傳」に、伋字細侯、爲=并州牧=、始至行=部、到=西河美稷=、有=兒童數百=、各騎=竹馬=、道次迎拜と、【五】政拙　自責して謂ふ、【六】河吞　公徐州に在りて水害に遭ひしを謂ふ、【七】盜入蒙山　公密州に在りし事を謂ふ、【八】孔孟　孔子と孟子、【九】由求　仲由と冉求、【一〇】惘惘　「莊子庚桑楚篇」に、汝亡人哉、惘惘乎、汝欲=返=汝性情=而無=由=入、可=憐哉と、「史記」に、孔子適=鄭、與=弟子=相失、獨立=郭東門=、鄭人曰、東門有=人、其額似=堯、其項類=皐陶=、其肩類=子産=、然自=腰以下、不=及=禹三寸、纍纍若=喪家之狗=と、【一一】虛舟　「莊子山水篇」に、方舟而濟=於河=、有=虛船=來觸=舟、雖=有=褊心之人=、不=怒と、【一二】倚樓　杜子美の詩、勤業頗看=史傳=、行藏偶倚=樓と、【一三】風甌　査云、甌疑作=鳴と、紀云、甌當=作=漚と、【一四】顔柳　顔眞卿と柳公權、【一五】諸謝　謝靈運、謝惠連、謝元暉、【一六】張陳　張子野、陳令舉、【一七】老劉　劉孝叔、【一八】蒼蘚　蒼蒼たる苔蘚、皆墓上を謂ふ、【一九】尋勝　韓愈の詩、尋勝不=憚=險と、【二〇】杯酒　顧榮謂=張翰=曰、唯酒可=以忘=憂と、【二一】駭汗流　韓愈の詩、

醉看梅雪清香過。
夜棹風船駭汗流。
百首共成山上集。
三人同作月中遊。
海南未起垂天翼。
澗底仍依徑寸庥。
已許春風歸過我。
預憂詩筆老難酬。
此生歲月行飄忽。
晚節功名亦謬悠。
犀首正緣無事飲。
馮驩應爲有魚留。
從今更踏青州麴。
薄酒知君笑督郵。

醉うて梅雪清香を看て過ぎ、
夜風船に棹して汗流に駭く、
百首共に成す山上の集、
三人同じく作す月中の遊、
海南未だ起たず垂天の翼、
澗底仍ほ依る徑寸の庥、
已に許す春風の歸りて我に過ぐるを、
預め憂ふ詩筆の老いて酬い難きを、
此の生歲月行く〻飄忽、
晚節功名亦謬悠、
犀首正に緣る無事の飲、
馮驩應に有魚の爲に留まるべし、
從今更に青州の麴を踏み、
薄酒知る君が督郵を笑ふを、

汗出魏且驚と、【三二】 乘天翼 「莊子逍遙遊篇」に、鵬怒而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運則將徙於南溟、と、【三三】 謬悠 「莊子天下篇」に、莊周聞其風而悅之、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、と、虛誕にして、實際に近からざるを謬悠と言ふ、【三四】 犀首 「史記」に、陳軫謂犀首曰、公何好飲也、曰、無事也、軫謂曰、吾請令公無事、可乎、【三五】 馮驩 「史記」に、馮驩居孟嘗君傳舍、彈其劍而歌曰、長鋏歸來乎、食無魚、孟嘗君、遇之幸舍、食有魚矣、【三六】 青州 「世說」に、桓公有主簿、善別酒、有酒輒令先嘗、好者謂是青州從事、惡者、謂是平原督郵、注曰、青州屬齊郡、平原有鬲縣、從事謂到脚下、督郵謂在脚上、住也、脚はホソ、ヘソ、臍はムネ、

【題義】 周邠字は開祖は錢塘の長官である、其の寄示せられたる詩に次韻して作る、

【詩意】 東西に俯仰して數州を閱歷し、以て岐路に身を老ゆるは伶優のみではない、君の官途に在るや初めは聞く父老が謝令を推したる如く敬したるを、更に旋りて見る兒童までが紈侯を迎ふる如くに禮したるを、僕は官に在りて政治を執ること拙なれば年年水旱を天に祈るの不幸を見、又民衆をして勞せしめて處處にて嘲弄せられし諷を避けた、河が巨野を呑むの水害に逢ふも其れを閉塞する策が無く、盜賊が蒙山に入るも其れを搜索する力も薄かつた、道行はれざるも仕ふるは固に孔孟に對して慚媿する、又國家の顯を扶け正すの力無きを責められたる由求が事を言ふ僕は資格が無い、而かも漸く氣が付いて田舍の善きを知るも半面は猶ほ仕祿を懷ふの慾がある、是の故に未だ世路の風濤を脫せずして且らく知府の位地に居る、惘惘として憐む可き狀態は眞に喪家の狗の如くである、又時時是非を誤りて觸れることは虛舟に似たることもある、さきごろ住したる震澤は都て夢の如くに思ふ、只苕溪の游びのみは樓に倚るべしとの安意があつた、齋釀の酸甜は變じて蜜水の如く、樂工は零落して蹤無く風漚にも似て居る、遠くしては思ふ顏柳諸謝の世に於ける功と文に於ける力とを、近くしては憶ふ張陳老劉の高風美德を、風定まるときは軒窗に惡蚊が多く飛び、雨餘の欄檻には蝸牛が上るを見る、而して舊游は到る處に皆墓下の人と爲つて居る、僕と同年の君は唯獨り黑頭で健在する、昔日を追憶すれば湖山に共に名勝を尋ね、相逢うては杯酒兩人とも憂を忘れた、乃ち醉うて梅雪の清香を看賞して過ぎ、又は夜風船に棹して汗の流るるに駭く、百首の詩は各の山上の集會にて成る、三人にして同

じく月中の游もする、君は今日宜しく垂天の翼を張りて臺閣に飛び入る人であるが、澗底に在りて徑寸庶の縣令席に依る、已に許せるは春風が歸りて我に過ぎることを、預め憂ふ詩筆が澀滯して厚意に酬い難きを、此の生や歳月行くゆく飄忽にして、晩節の功名も亦謬悠たるものである、犀首と同じく我は無事なるが故に飲む、馮驩たる君は宜しく魚あるが爲めに留まるのであらう、今より更に青州從事たる美酒を飲むべきである、平原督郵たる惡酒は君の笑ふ所である、

【餘論】紀曉嵐曰く、喪狗之喪字、原有二平仄一讀、如作レ平、則不レ協レ律、如作レ去、則刪二去家事一、殊不レ安と、又曰く遠思句法太率と、又曰く澗底句未レ詳、又曰く七言長律、少陵亦不レ能レ工、不レ可レ作也と、紀は此の如く評するを以て自から選せる「擇粹」には此の詩を取らず、案ずるに喪は明白に去聲に使用せらる、去聲としての喪は得喪、氣喪、道喪、淪喪、彫喪、沮喪にして、輓喪、奔喪、亡喪、治喪の平聲では無い、喪家狗は平平仄である、公が大才なるも此の失は如何とも出來ない、馮應榴も「敬齋古今黈」を引いて曰く、止用二喪狗兩字一、似レ不二甚妥一と、今余は謂ふ是れ皆次韻の失にして、公の失ではない、宋人の失にして、公の失ではない、

林子中以詩寄文與可及余。與可既歿。追和其韻

林子中、詩を以て文與可及び余に寄す、與可既に歿す、其の韻を追和す

斯人所甚厭。投畀每不受。　斯の人甚だ厭ふ所、投畀毎に受けず、

欲其少須臾。奪去唯恐後。　其をして少須臾ならんと欲するも、奪ひ去りて唯後るるを恐る、

云誰尸此職。無乃亦假守。　云ふ誰か此の職を尸どる、無乃亦假守せん、

賦才有巨細。無異斛與斗。　賦才巨細あり、斛と斗とに異なる無し、

胡不安其分。但聽物所誘。　胡ぞ其の分に安んぜず、但物の誘ふ所に聽す、

時來各飛動。意合無妍醜。　時來りて各の飛動す、意合すれば妍醜無し、

坐令雞棲車。長載朱伯厚。　坐ろに雞棲車をして、長く朱伯厚を載せしむ、

平生無一旅。既死咤萬口。　平生一旅無く、既に死して萬口咤ちす、

自聞與可亡。胸臆生堆阜。　與可の亡を聞きしより、胸臆堆阜を生ず、

懸知臨絶意。要我一執手。　懸かに知る臨絶の意、我をして一たび執手せんと要す、

相望五百里。安得自其腑。　相望む五百里、安んぞ得ん其の腑に自るを、

遺文付來哲。後事待諸友。　遺文來哲に付し、後事諸友を待つ、

伶俜嵇紹孤。老病孟光偶。　伶俜嵇紹孤なり、老病孟光偶なり、

世人賤目見。爭笑千金帚。　世人目見を賤しみ、爭ひ笑ふ千金の帚、

君詩與楚詞。識者當有取。　君が詩楚詞と、識者當に取るあるべし、

但知愛墨竹。此歎吾已久。　但墨竹を愛するを知る、此の歎吾已に久し、
故人多厚祿。能復哀君否。　故人多くは厚祿、能く復た君を哀しむや否や、
不見林與蘇。饑寒自奔走。　見ずや林と蘇と、饑寒自から奔走す、

【字解】〔一〕 投畀　詩に、取彼譖人、投畀豺虎、豺虎不食、投畀有北、有北不受と、〔二〕 少須臾　「漢買山傳」に、願少須臾毋死見德化之成と、〔三〕 奪去　「唐楊綰傳」に、綰薨、帝驚悼曰、天何奪綰之速耶と、〔四〕 尸此職　詩に誰其尸之と、〔五〕無乃　「論語」に無乃大簡乎と、杜子美の詩、無乃舉射殺と、皆ムシロである、〔六〕 假守　「漢項籍傳」に、會稽假守通素賢と、柳子厚の文、存義假令零陵二年と、假守、假令共に權守である、〔七〕 有亘絪　吳都賦に、庸可共世而論亘絪と、〔八〕 時來　杜子美の詩、時來展才力と、〔九〕 意合　意氣投合、「史記」に、善仕不如遇合と、〔一〇〕 雞棲車　「後漢陳蕃傳」に、朱震字伯厚、爲州從事、奏濟陰太守單匡贓罪、并遣匡兄中常侍、超三府、諺曰、車如雞棲馬如狗、疾惡如風朱伯厚と、杜子美の詩、雞栖奈汝何と、〔一一〕 無一旅　「左傳」に、五百人爲旅と、〔一二〕 旣死　王次公曰、言生雖寡徒、而死則共惜也と、〔一三〕 咤　多く叱咤なぞと成語して怒聲に用ふ、今次公の言ふ如く惜聲に用ふるか、〔一四〕 生堆阜　胷中に邪魔の物が生ずる、〔一五〕 遺文　魏文帝の書に遺文都爲一集と、〔一六〕 伶俜　古詩に、少年慢且怖、伶俜到仙鄉と、オチブレ又はサマヨフ貌を言ふ、〔一七〕 皆紹孤　「晉山濤傳」に、濤字巨源、與嵇康善、康後坐事臨誅、謂子紹曰、巨源在、汝不孤矣と、〔一八〕 孟光偶　後漢の梁鴻と其の妻の孟光とが夫妻相慰めて偶坐する、前に辨ある、〔一九〕 踐日見　「張平子東京賦」に、若客所謂、末學膚受、貴耳而賤目者也と、〔二〇〕千金帶　魏文帝の論文に、夫人善於自見、而文非一體、鮮能備美、是以各以所長、相輕所短、里語曰、家有敝帝、享之千金、斯不自見之患也と、〔二一〕 有取　劉勰辨騷に、楚辭者體慢於三代、而風雅於戰國、乃雅頌之博徒、而詞賦之英傑也、楊子老子之言、道德、吾有取焉耳と、〔二二〕 故人　杜子美の詩、厚祿故人書斷絕と、

【題義】 林希字は子中が詩を作り公と文與可とに寄示せられたるも、與可は旣に歿したる後なれば公が子中の詩に和して詩中に與可の事を言うたのである、

【詩意】 斯の文與可と云ふ人が甚だしく厭ふことは、投げ畀へたる物は毎に受けない、今少須臾くは生存させたく思うたが、天が奪ひ去つて後るるを恐るるものの如くである、云ふ誰が湖州知府の職を尸る者ぞ、無乃亦假守の人が尸るであらう、人の賦才は各の巨才と細才とがある、其れは斛と斗との異あると同じである、斛は斛斗は斗と其の分際に安んずれば可い、但物象の誘ふに聽すべきである、時節が來れば各の飛動する、意氣合すれば妍醜の別は無い、陳蕃は友人の朱伯厚をして雞の棲む車の如き役不足の地位に置いた、平生は一旅團をも有せざる身が、旣に死んだと聞いて萬口が一齊に惜聲を放つた、文與可が死亡すと聞いてより、僕は胸臆に堆阜を生じたるかと疑ふ、懸かに知る與可が世と背絕に臨むときの意、我と一度握手がしたいと要したのであるが、相望むとも懸遠五百里である、安んぞ其の牖に自ることが出來やう、但し其の遺藁は後進の者に付與し、其の家の後事は諸友に依託する、伶俜たるも幸なるは嵇紹の孤兒である、老病たるも幸であるは孟光の偶坐である、而して世人の多くは古より目見を賤しと爲す、論より證據千金の帶を爭ふを笑うたではないか、文君の詩と楚詞は、識者は必ず之を取るべきを信ずる、世人の多くは識者でない但其の墨竹を愛することのみを知る、此の事を慨歎すること吾は久しきものである、文君の故人は多く厚祿の身分である、其の故人は能く復た君を哀哭するや否や、見ずや林子中と蘇子瞻は、飢と寒とに鬪ひつつ奔走して居る、

【餘論】紀曉嵐曰く、起不二醒豁一、不レ免二吃力之痕一、後半自沈著と、詩中言ふ所首尾共に與可の事を言うて、寄せられたる林子中の事は陪伴たるに過ぎない、意合無二妍醜一、長載二朱伯厚一等の句あるを見れば、當時黨人が朝に蘇派、暮に王（安石）派、昨は守舊派、今は新法派と移り易ること、猶ほ今日我邦の政黨と稱するものと同樣なることが知れる、

與二王郎昆仲及兒子邁一遠二城觀荷花一登二峴山亭一

晚入二飛英寺一分韻得二月明星稀一四首

王郎昆仲及び兒子邁と、城を遠りて荷花を觀、峴山亭に登り、晚に飛英寺に入り、分韻して月明星稀を得たり　四首

昨夜雨鳴レ渠。曉來風襲レ月。　昨夜雨渠に鳴り、曉來風月を襲ふ、
蕭然欲二秋意一。谿水清可レ啜。　蕭然秋意ならんと欲す、谿水清くして啜るべし、
環レ城三十里。處處皆佳絶。　城を環る三十里、處處皆佳絶、
蒲蓮浩如レ海。時見舟一葉。　蒲蓮浩として海の如く、時に見る舟一葉、
此間眞避レ世。青蒻低二白髮一。　此の間眞に世を避く、青蒻白髮に低る、
相逢欲二相問一。已逐二驚鷗沒一。　相逢うて相問はんと欲す、已に驚鷗の沒するを逐ふ、

【字解】〔一〕襲月「漢劉向傳」に、襲二惑襲レ月と、杜子美の詩、自鳴夜二浩蕩一と、〔二〕鳴沒　杜子美の詩、自鳴夜二浩蕩一と、〔三〕蒲蓮　韓愈の詩、淺有二蒲蓮一深有二荷蓮一と、〔四〕青蒻　蒻を以て製せる笠、

【題義】王家の兄弟と公と公の子邁と四人にて城を遠り荷花を觀、而して峴山亭に登り、晚日に飛英寺に入る、是の寺に於て韻を分ちて各の詩を賦し、公は月明星稀の四字を得て四首を作るもの、

【詩意】昨夜は雨聲が渠に鳴るを聞いたが、曉來は天晴れて風が月を吹き襲ふ、夏日であるが蕭然として秋意を覺ゆる、谿水は清冽にして啜る可く、城を環る三十里、處處皆佳絶である、蒲蓮は浩渺として海の如く、時に何處からとも無く舟が一葉來るを見る、青蒻は白髮に及ぶまで低れてある、相逢うて互に相問はんと欲すれば、皆言ふ心は已に驚鷗の沒するまで逐ふと、

〔二〕

清風定何物。可レ愛不レ可レ名。　清風定んで何物ぞ、愛すべくして名く可からず、
所レ至如二君子一。草木有二嘉聲一。　至る所君子の如く、草木嘉聲あり、
我行本無事。孤舟任二斜橫一。　我が行本無事、孤舟斜橫に任す、
中流自偃仰。適與風相迎。　中流に自から偃仰す、適ま風と相迎ふ、

舉杯屬浩渺。樂此兩無情。　杯を擧げて浩渺に屬す、此を樂んで兩ながら無情、
歸來兩溪間。雲水夜自明。　歸來兩溪の間、雲水夜自から明らかなり、

【字解】〔一〕如君子　「風俗通」に、風或清明來、久長不動樹木、離地二三丈者、此謂龍德在於下風、或清明、不及二三尺、者、此君子風也と、〔二〕喜聲　「蔡邕碑」に、文領嘉聲、而響和と、〔三〕本無事　「唐陸象先傳」に、天下本無事と、〔四〕孤舟　寇萊公の詩、孤舟繫日橫と、

【詩意】清風と云ふものは定んで何物である、但是れ愛すべくして何物と名くることは出來ない、至る所嫋嫋と吹いて君子の如く人に快感を覺えしむ、又風の爲めに草木も嘉聲を發する、我が一行は本より無事の人である、孤舟に乘じて舟の斜橫に一任する、而して中流に於て上下を偃仰する、適ま風と相迎へて、杯を擧げて以て浩渺に屬する、此を樂んで人も境も共に無情である、兩溪の間を歸り來れば、雲も水も夜自然と晴明である、

〔三〕

苕水如漢水。鱗鱗鴨頭青。　若水は漢水の如く、鱗鱗として鴨頭青し、
吳興勝襄陽。萬瓦浮青冥。　吳興は襄陽に勝る、萬瓦青冥に浮ぶ、
我非羊叔子。媿此峴山亭。　我羊叔子にあらず、此の峴山亭に媿づ、
悲傷意則同。歲月如流星。　悲傷の意は則ち同じ、歲月流星の如し、

〔三〕

【字解】〔一〕苕水　浙江の天目山より出づ、〔二〕襄水　陝西の嶓冢山より出づ、〔三〕吳興　苕水の流るる地、〔四〕襄陽　漢水の流るる地、〔五〕羊叔子　晉の羊祜字は叔子、卒するに及び、襄陽の百姓、其の德を慕ひ、碑を峴山に樹て、以て墮淚碑と題す、〔六〕如流星　王昌齡の詩、白馬如流星と、〔七〕兩王子　王適と王遜、〔八〕高鴻　「西京賦」に、「高鴻」と、〔九〕漢聲　「洪容齋題跋」に、晉代名臣文集、凡十四家、有張敏者、太原人、其一篇云、風寶子羽、文九百餘言、都滿姓名、因羊叔子傳、字曰潤甫、襄陽、興郡潤甫、同登峴山と、

【詩意】苕水の流れは漢水の如くである、鱗鱗として水は鴨頭の青を漾はす、而して吳興の繁華は襄陽に勝るものがある、萬家の屋瓦は青冥に浮び出る、我は當年の羊叔子ではない、不德を以て此の峴山亭を見ることを媿ぢる、但悲傷する意は當年の百姓と同じ、歲月は流星の如く疾し、我に從隨する王郎の二人の兒は、高鴻が修翎を挿むの概がある、都滿の輩は何ぞ共れ道ふに足らんや、人は當に德を以て自から銘とすべきである、

從我兩王子。高鴻挿修翎。　我に從ふ兩王子、高鴻修翎を挿む、
滿輩何足道。當以德自銘。　滿輩何ぞ道ふに足らん、當に德を以て自から銘すべし、

〔四〕

吏民憐我嬾。鬬訟日已稀。　吏民は我が嬾きを憐み、鬬訟日に已に稀なり、
能爲無事飲。可作不夜歸。　能く無事の飲を爲す、不夜の歸を作す可し、

〔四〕

復尋飛英(一)游。盡此一寸暉。復た飛英を尋ねて游び、此の一寸の暉を盡くす、
撞鐘履聲集。顚倒(二)雲山衣。鐘を撞けば履聲集る、顚倒す雲山の衣、
我來無時節。杖屨自推扉。我來る時節無し、杖屨自から扉を推す、
莫作使君看。外似中已非。使君の看を作す莫かれ、外は似て中は已に非なり、

【字解】【一】不夜歸　「詩」に朕眼夜飲、不醉無歸と、杜子美の詩、不夜月臨樹と、月明盡の如きを謂ふ、【二】飛英寺　在府城北門內、唐咸通中、僧雲皎、自長安來、得舍利、建飛英石塔、中和五年、改上來寺、景德二年、改舊名、飛英教寺とあれば、天台又は華嚴を來するのであらう、【三】顚倒　「毛詩」に、東方未明、顚倒衆衣と、

【詩意】官吏も人民も我が嫻性を憐むのであらう、闕謗等の事は日に已に稀である、謗事稀なるが故に我は無事に飲むことが出來る、月明に乘じて歸るの好きを思へば、復た飛英寺を尋ねて游び、此の一寸時の暉も盡くさんと思ふ、僧が山鐘を撞けば履聲が多く集まる、蒼黃と至れば雲山の衣を顚倒して著るものもある、我は來游するに時節は問はない、興が湧けば杖屨自から山扉を推す、諸君は僕を太守だの知府なぞと看て吳れるな、外觀は知府であるが中心は知府ではない、

【餘論】紀曉嵐が第一首を評して忽作清音、却仍用本色、不規規于王孟形模と、又第二首を評して、此暗用漁父事、非寫景也と、又三四を評して二首又以朴至勝と、此の四首を以て前の林子中追和の詩に比較すれば、別人の手に出づるの感がある、紀が王孟形模と評したるは頗る當る、

次韻章子厚飛英留題

章子厚が飛英留題に次韻す

款段(一)曾陪馬少游。款段曾て陪す馬少游、
而今人在鳳麟洲(二)。而今人は鳳麟洲に在り、
黃(三)公酒肆如重過。黃公の酒肆如し重過せば、
杳杳白蘋天(四)盡頭。杳杳白蘋天の盡きる頭、

【字解】【一】款段　「後漢書馬援傳」に、乘下澤車、御款段馬と、足の遲き馬、【二】鳳麟洲　「東方朔十洲記」に、鳳麟洲、在西海之中と、【三】黃公　「世說」に、王濟冲、爲尙書令、經黃公酒壚下過、顧謂後車客、吾昔與嵇叔夜、阮嗣宗、共飲於此壚、竹林之游、亦預其末、自嵇生夭、阮公亡以來、便爲時所羈紲、今日視此鄙近、選若山河と、【四】天盡頭　曾松詩に、直到天頭天盡頭と、

【題義】章惇　字は子厚が翰林學士たりし時、飛英寺に留題せる詩を見て公が次韻して作る、

【詩意】款段たる馬に騎り曾て馬少游に陪游したが、而今は其の人は鳳麟洲卽ち翰林に在る、黃公の酒肆に如し重過を思はば、杳杳たる白蘋の天盡きる頭に來玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰く、語殊溫藉と、信に七絕の上乘たるものである、

城南縣尉水亭。得長字

城南縣の尉水亭、長の字を得たり

兩尉(一)鬱相望。東西百(二)步場。兩尉鬱として相望む、東西百步場、
揮旂蒲(三)柳市。伐鼓水(四)雲鄉。旂を揮ふ蒲柳の市、鼓を伐つ水雲の鄉、

已作(六)觀魚檻。仍開(六)射鴨堂。
全家畫舫(七)依。極目亂紅妝(八)。
激激波頭細。疎疎雨脚長(九)。
我來閒濯足。溪漲欲浮牀。
澤國山圍裏(一〇)。孤城水影旁(一一)。
欲知歸路處。葦外記風檣(一二)。

【字解】〔一〕兩尉　「宋史職官志」に、太平興國七年、析二烏程一置二歸安二縣一、皆爲二望縣一、則各置レ尉と、今考ふ或は尉水亭が二亭有るを謂ふかと、〔二〕百步場　尉司較閱處を言ふ、〔三〕蒲柳市　湖州を言ふ、〔四〕水雲鄉　湖州を言ふ、〔五〕觀魚　「左傳」隱公五年」に、公將レ如レ棠觀二魚者一と、〔六〕射鴨堂　王註曰、孟郊爲二溧陽尉一、開二射鴨堂一と、〔七〕畫舫　劉希夷の詩、畫舫煙中淺と、〔八〕紅妝　杜子美の詩、特地引二紅妝一と、〔九〕雨脚長　杜牧の詩、林黑山高雨脚長と、〔一〇〕澤國　「周禮」に、凡邦國之使節、山國用二虎節一、土國用二人節一、澤國用二龍節一と、宋之問の詩、澤國留氣早と、多水の國を謂ふ、〔一一〕孤城　李渤の詩、孤城吹角水花花と、〔一二〕風檣　「杜牧之、李長吉集序」に、風檣陣馬、不レ足レ爲二其勇一也と、檣は帆柱、ホバシラ、

【詩意】彼此の兩尉を鬱として相望む、其の東西大凡そ百步場である、東面の方では旅を揮うて蒲柳の市が有る、西面の方には鼓を伐つ水雲の鄉が有る、此の亭には已に觀魚の檻を作る、更に仍ほ射鴨堂をも開く、一家を擧げて畫舫に依る、其の畫舫には極目紅蓮の花が亂れて看える、激激たる波頭は微細であるが、疎疎たる雨脚は廣長である、我は此に來りて閒に足を濯はんと思ふも、溪は水漲りて牀を浮べんとする勢である、我が歸路の處を知らんと欲すれば、葦外に風檣の在るを記憶すれば路は誤らない、

【餘論】紀曉嵐曰く、東坡五言長律、皆氣機流動、由二其一筆寫出一、不レ由二堆砌一而成と、

與胡祠部游法華山

胡祠部と法華山に游ぶ、

陂湖欲盡山爲界。
始見寒泉落高派。
道人未放泉出山。
曲折虛堂瀉清快。
使君年老尙兒戲。
綠棹紅船舞澎湃。
一笑翻杯水濺裙。
餘歡濯足波生隘。
長松攙天龍起立。
蒼藤倒谷雲崩壞。

陂湖盡きんと欲し山界を爲す、
始めて見る寒泉の高派より落つるを、
道人未だ放たず泉は山を出づ、
曲折虛堂瀉清快を瀉ぐ、
使君年老いて尙ほ兒戲す、
綠棹紅船澎湃に舞ふ、
一笑杯を翻して水裙に濺ぐ、
餘歡足を濯へば波隘に生ず、
長松天に攙し龍は起立す、
蒼藤谷に倒れて雲崩壞す、

【字解】〔一〕道人　學道の人を謂ふ。今、山僧を指す、〔二〕曲折　委曲と同じ、〔三〕水濺裙　王註曰、樊虔餘、成通末、佐二李公淮南幕一、游二江舟水刺レ船、誤爲二竹篙濺水一、濺二近レ座之衣一、公色變、虔餘遽紀二一絕一曰、滿領鵝黃金縷衣、翠翹浮動玉釵垂、從教水濺羅衣濕、知道巫山行雨歸、公覽レ之絕レ歡と、〔四〕隘　狹隘、〔五〕蒙密　范蔚宗の詩、選レ渚蒙二蒙密一と、〔六〕可怪　「木玄虛海賦」に、何怪不レ備と、〔七〕謝云　「吳興掌故集」に、法華寺高頂、有二臨湖亭一、「湖州志」に、太湖周三萬六

仰穿蒙密得清曠。
一覽震澤吁可怪。
誰云四萬八千頃。
渺渺東盡日所曬。
歸途十里盡風荷。
清唱一聲聞露薤。

【自注】是日樂工有作此聲者。

嗟予少小慕眞隱。
白髮青衫天所械。
忽逢佳士與名山。
何異枯楊便馬疥。
君猶鸞鶴偶飄墮。
六翮如雲豈長鍛。
不將新句紀茲游。
恐負山中清淨債。

仰いで蒙密を穿ちて清曠を得、
一覽震澤吁怪なる可し、
誰か云ふ四萬八千頃と、
渺渺東は盡く日の曬す所、
歸途十里盡く風荷、
清唱一聲露薤を聞く、

嗟予少小より眞隱を慕ふ、
白髮青衫天の械する所、
忽ち佳士に逢うて名山を與にす、
何ぞ異ならん枯楊便ち馬疥、
君猶ほ鸞鶴偶ま飄墮、
六翮雲の如く豈長鍛、
新句を將て茲游を紀せずんば、
恐らくは山中清淨の債を負はん。

【題義】胡祠部と卞山の別峯である法華山に游んで作れる詩。

【詩意】陂湖が盡きんと欲する所は山を以て南北の界を爲す、此に來りて始めて寒泉が高派より落つるを見る、道人は未だ坐禪より起つて來ないが泉は山より出て居る、其の水は虛堂を曲折して其の瀉ぐ狀は清快である、使君たる我輩は年老ゆるも尙ほ兒戲を好む、玩具である綠棹や紅船を其の水に浮ぶれば其の水の澎湃たるに舞ふ、一笑する船杯を翻覆すれば水が裙に濺ぐを、餘歡滅せざる中に足を濯へば波が狹隘に生ずる、又見る長松が天に攄して龍の起立せる如くなるを、或は蒼藤の枝が谷に倒れる狀は雲の崩壞せる如くである、仰いで蒙蒙密密の中を穿ち出れば清曠の地に達する、是に於て俯して震澤を一覽すれば怪物が棲むべきを思ふ、誰人か云ふ四萬八千頃の廣き湖が、渺渺として東の方日の曬す所に到りて盡きると、歸途の十里は盡く荷香を聞きながら過ぐ、且舟子が唱ふる歌聲は宛かも露薤を聞くが如きの哀調である、嗟予予は少小の時より眞隱を慕うて居る、而かも白髮青衫眞隱と爲るを得ざるは天に械梏せらるるに由る、忽ち佳士に逢うて名山の游びを與にするも、何ぞ異ならん疥馬が枯楊に其體を摩擦するに、ただ一時の樂に過ぎないのである、胡君は鸞鶴の偶然と飄墮するが如く、六翮は雲の如くにして長鍛する憂は無い、新句を求め得て茲佳游を紀せざるときは、恐らくは山中清淨の債を負はんである。

千頃、廣二百八十里、東爲松江、又東流二百里入海と、【八】所曬　韓退之の詩、秋日萬里曬と、【九】風荷　顧況の詩、荷花十餘里と、【一〇】聞露薤　杜子美の詩、盈餘承露薤と、【一一】少小　韓退之の詩、少小尙奇偉と、【一二】眞隱　與開府の詩、望氣求眞隱と、【一三】枯楊　「五燈會元」に、僧問仁岳禪師、一大藏經、盡是名言、離此名言、如何指示、師曰、癩馬揩枯柳と、【一四】六翮　「韓詩外傳」に鴻鵠舉千里、所恃者六翮耳と、【一五】長鍛　韻延年の詩、鑒翮有時鍛、龍性謬能馴と、鍛は本來ツルギ、矛(ホコ)である、今は殘(ソコナフ)の義、【一六】新句　張籍の詩、回首吟新句と、【一七】清淨債　白樂天の詩、猶結淸淨緣と、

【餘論】紀曉嵐曰く、二詩俱道緊と、又曰く蕹露倒押欠レ妥と、今案ずるに倒用法は詩家の通例、而かも自然を損せざる範圍に於てのみ、露蕹は如何に韻字の爲めとは言へ、紀評の如く妥當を欠くものである、英雄人を欺く者か、

又次前韻贈賈耘老

具區呑滅三州界。
浩浩湯湯納千派。
從來不著萬斛船。
一葉漁舟恣奔快。
仙壇古洞不可到。
空聽餘瀾鳴湃湃。
今朝偶上法華嶺。
縱觀始覺人寰隘。
山頭臥碣弔孤冢。
下有至人僵不壞。
空餘白棘網秋蟲。
無復青蓮出幽怪。
我來徙倚長松下。
欲掘茯苓親洗曬。
聞道山中富奇藥。
往往靈芝雜葵薤。
詩人空腹待黃精。
生事只看長柄械。
今年大熟期一飽。
食葉微蟲直癬疥。

【自注】買云。今歲有小蟲食葉。不甚爲害。

又次前韻贈賈耘老

具區呑滅す三州の界、
浩浩湯湯として千派を納る、
從來著け ず萬斛の船、
一葉の漁舟 恣に奔快す、
仙壇古洞到る可からず、
空しく聽く餘瀾の鳴いて湃湃たるを、
今朝偶ま上る法華嶺、
縱觀して始めて覺ゆ人寰の隘きを、
山頭の臥碣に孤冢を弔す、
下に至人の僵れて壞せざるあり、
空しく白棘を餘して秋蟲を網す、
復た青蓮の幽怪を出づる無し、
我來りて徒倚す長松の下、
茯苓を掘りて親しく洗曬せんと欲す、
聞く道く山中奇藥に富むと、
往往靈芝葵薤に雜はる、
詩人空腹にして黃精を待つ、
生事只看る長柄の械、
今年大に熟せば一飽を期す、
葉を食ふの微蟲は直癬疥、

【字解】【一】具區「蘇州圖經」に、具區接蘇常湖秀四州界、內有大小山七十二、洞庭居其一焉と、「周禮」に、東南曰揚州、其山鎮曰會稽、其澤藪曰具區、と、【二】納千派「王鑒震澤編」に、北曰百瀆、納北康常潤之水、南曰諸淦、納宣歙臨安苕霅之水、と、【三】仙壇「元中記」に、洞庭、古人謂仙壇之靈區、有龍威林屋等洞、と、【四】湃湃 馮應榴曰く、湃湃二字、未詳レ所レ本と、【五】縱觀「漢高紀」に、縱觀秦皇帝、と、【六】臥碣 碣は碑碣、碑は方、碣は圓、法華寺に唐大光和尚の碑あるを謂ふ、【七】不壞 白樂天の詩、身壞口不壞と、佛經に金剛不壞と、【八】網秋蟲 劉禹錫の詩、蒼蒼網蟲遍と、蜘蛛の巢を謂ふ、【九】青蓮「法華經」に、有人聞是品、能隨喜讚善者、是人口中、常出青蓮、と、湖州法華山、昔有檀矣、入山得青蓮一枝、蓋生於平陸、因持入市、市人以花生非時、且異其事、乃從檀夫、還至本處、掘地視之、下有石匣、中有一童子、舌根不壞、花自舌出、是人生持誦法華經、致此勝果、故以名其山、と、【一〇】徒倚 王粲の詩、徒倚欲何依、と、「楚辭哀時命」に、獨徒倚而彷徨と、聊か憂情を以て倚徊するの語、【一一】長松「輿興偏志」に、法華寺前、有松逕數里、皎然詩、路入松聲遠更奇、山光水色共參差、中峯禪寂一僧在、坐

白花半落紫穟香。　白花半ば落ちて紫穟香ばし、
攘臂欲助磨鎌鍛。　臂を攘うて助けんと欲す鎌鍛を磨くを、
安得山泉變春酒。　安くにか山泉の春酒に變ずるを得て、
與子一洗尋常債。　子と一洗せん尋常の債を、

也と、「漁隱叢話」に、杜詩黃精無苗、後人所改也、舊乃黃獨、本處謂之土芋、根唯一顆兩色黃、故名黃獨、饑歲土人、掘以充食、故老杜云爾、東坡云、空腹待黃精、則坡讀杜詩、亦以黃獨爲黃精矣と、【一四】長柄械　杜子美の詩、長鑱長鑱白木柄、我生托子以爲命、是れ公の自註である、【一五】大蘇　豐年を謂ふ、【一六】食葉　公の自注に、賈云今歲有小蟲食葉、不其爲害と、【一七】癡疥　蟲の寄生に依りて起る小泡、俗にヒゼンと稱し、手指の間に生ずるもの、傳言、患之小者、謂癡疥也と、【一八】攘臂「孟子盡心章」に馮婦攘臂下車と、勇奮して起つの形容、【一九】春酒　太白の詩、此江若變作春酒、と、【二〇】尋常債　杜子美の詩、酒債尋常行處有と、「三國志」に、孫濟、孫權之叔也、嗜酒不治產、常醉屢欠酒債、人皆笑之、濟恬然自若、謂人曰、尋常行坐處、欠人酒債、欲貸此縕袍償之と、

【詩意】震澤の浩渺たる常に三州の界を呑滅する、其の勢は浩浩湯湯として百千の支派の水を納る、從來大なる萬斛の船を著けざるも、尤も小なる一葉の漁舟が恣に奔快するを見る、仙壇古洞は容易に到る可からざるも、唯空しく餘瀾の鳴りて湃湃たるを聽く、今朝偶ま來りて法華山の頂に上り、自由に觀望して始めて人寰の狹隘なるを覺る、而して山頭に横臥して居る墓碣に孤冢を弔ふ、此の孤冢の下には高僧の僵れて舌根の壞せざる人がある、其の冢邊には空しく白棘を餘して蜘蛛の巢を網にするに任す、復た青蓮の生ずる如き幽怪は見ることがない、我は來りて長松の下に徙倚し、茯苓を掘りて以て親しく洗嚥せんと思ふ、曾てより聞く山中には奇藥が豐富であり、往往にして靈芝が葵薤に雜りて生ずると、詩人は空腹になれば芋魁を食はんと待つのである、人生の事は只長柄の械を看る如きが多い、今年は定めし大熟ならん、然らば一飽を期して可い、葉を食ふの微蟲は病としても癡疥の類大なる害は無い、稻の白花は半落ちて今や紫色の穟穗が香を放ちてある、我も臂を攘うて勇氣を出し收穫の助けを爲さんと鎌や鍛を磨くである、安くにか山泉の春酒に變ずるを得て、子と共に尋常行處の債務を一洗すべきや、

趙閲道高齋

見公奔走謂公勞。　公が奔走を見て公が勞を謂ふ、
聞公隱退云公高。　公が隱退を聞いて公が高きを云ふ、
公心底處有高下。　公が心底の處に高下あらん、
夢幻去來隨所遭。　夢幻去來遭ふ所に隨ふ、
不知高齋竟何義。　知らず高齋竟に何の義ぞ、
此名之設緣吾曹。　此の名の設けらるる吾曹に緣る、
公年四十已得道。　公年四十已に道を得るも、

趙閲道の高齋

【字解】【一】公奔走　王安石が新法を行はんと欲せる時、公は其の非を鳴らして、東西奔走したることを謂ふ、【二】底處　何處と吟んど同義、【三】夢幻　佛氏の語、【四】四十「孟子」に四十不動心と、【五】癡疥　佛氏の語、【六】伊尹　殷の湯王の相、阜陶は唐虞の際の相、【七】逆旅「莊子知北游」に、哀樂之來、吾不能禦、其去弗

俗緣未盡餘伊皐。
功名富貴皆逆旅。
黃金知繫何人袍。
超然已了一大事。
挂冠而去眞秋毫。
坐看猿猱落置罔。
兩手未肯置所操。
乃知賢達與愚陋。
豈直相去九牛毛。
長松百尺不自覺。
企而羨者蓬與蒿。
我欲贏糧往問道。
未應舉臂辭盧敖。

俗緣未だ盡きず伊皐を餘す、
功名富貴皆逆旅、
黃金知る何人の袍を繫ぐ、
超然として已に了ず一大事、
挂冠して去る眞に秋毫、
坐して看る猿猱の置罔に落つるを、
兩手未だ肯て操る所を置かず、
乃ち知る賢達と愚陋と、
豈直に相去る九牛毛、
長松百尺自ら覺らず、
企てて羨む者蓬と蒿と、
我糧を贏ひ往いて道を問はんと欲す、
未だ應に臂を舉げ盧敖を辭すべからず、

に、南榮趎贏レ糧、七日七夜、至二老子之所一と、「漢書刑法志」に、贏二三月之糧一と、【二】盧敖若士一、敖自謂觀二乎六合之外一、若士舉レ臂而竦レ身、遂入二雲中一、盧敖仰而觀之不レ見と、

【題義】趙抃字は閬道は西安の人、參知政事の時、安石と爭うて位を去り、後に資政殿學士を拜して、杭州の知事と爲る、青州、越州の知事を經て、遂に太子少保に移り、是に於て致仕して三衢に居り、高齋を作りて、以て高僧名士と來往し、年七十七を以て薨ず、世に清獻公と稱す、今此の詩其の高齋に題して作れるもの、

【詩意】公が國事の爲め奔走せるを見ては公の勤勞を謂ひ、公が退隱せらるるを聞いては公が清高なるを云ふ、而かも公が心に於ては底の處にも高下は無いのである、世事は畢竟夢幻の去來なれば遭ふ所に隨ふのみ、然らば居處を高齋と稱するは何の義なるを解知し得ない、所で此の高齋の名の設けは吾が輩等に緣つて出來たものである、公は年四十所謂不惑の年已に道を得たのであるが、而かも官に居せしは世緣が盡きずして古の伊皐の如く世を救ふの仕事を餘したからである、意ふに功名富貴は暫時止まり暫時に去る旅舍の如きもの、黃金の力は何人の袍を繫ぐものぞや、公は出も超然、處も亦超然、已に死生の一大事なることを了悟せらるる、冠を挂けて官を去る眞に秋毫、坐して看る彼の猾性なる猿猱が罟罔に落ちながら、猶ほ其の左右の手に握りて居る物を離さない、そこで知る去る者の賢達と落ちる者の愚陋とを、之を比較すれば提燈に釣鑑以上九牛毛程の異がある、松は長じて百尺に及ぶも自から其の高きを覺らないは賢達である、其の高きに達せんと企て羨むの蓬蒿は愚陋である、我は糧を贏らして高齋に往いて道を問はんと欲するが、公は臂を擧げてそれを拒絶しないであらうか、

レ能レ止、悲夫、世人直爲二物逆旅一耳と、又「列子仲尼篇」に、龍叔曰、吾鄉譽不二以爲一榮、國毀不二以爲一辱、得而不レ喜、失而弗レ憂、視レ生如レ死、視レ富如レ貧、視レ人如レ豕、視レ吾如レ人、處二吾之家一、如二逆旅之舍一、觀二吾之鄉一、如二戎蠻之國一と、【八】一大事「法華經」に、諸佛世尊、唯以二一大事因緣一、放出二現於世一と、【九】九牛毛「晉華譚傳」に、或問レ譚曰、諺言人之相去、九牛毛、寧有二是理一乎、譚曰、昔許由巢父、讓二天子之貴一、市道小人、爭二半錢之利一、此之相去、何齊九牛毛也と、【一〇】蓬與蒿韓退之の詩、自慙青蒿倚二長松一と、【一一】贏糧贏は餘贏、豐贏、財物都て充分以上なるを言ふ、以て「ニナフ」又は「モメラス」なぞと使用する、「莊子廉桑楚篇」「淮南子」に、盧敖遊二于北海一、遇二一

【餘論】七古一韻の作法、蘇家の憲法を紊さない、紀曉嵐は評して、大晋傷レ雅と、公は時あり憤激の語を吐く、大雅に背くあるも、目前に慨して已むを得ざるの言と思ふ、

送俞節推

吳興有君子。澹如朱絲琴。
一唱三太息。至今有遺音。
嗟余與夫子。相避如辰參。
猶喜見諸郎。窈然清且深。
異時多良士。末路喪初心。
我生不レ有レ命。其肯枉尺尋。

【自注】退翁官於蜀。余在京師。余歸而退翁去。及余官於吳興。則退翁亡矣。

【字解】〔一〕君子　俞節推の父、汝尚字は退翁と謂ふ、退翁は其の人清白、屯田郎中の官を以て致仕す、其の妻の黄氏に謂つて曰く、人生七十の者は稀、吾と夫人と皆已に之を過ぐ、往く可し、黄曰く我先づ去らん、後三日黄は沐浴して化去す、退翁は明日、諸子を召して曰く、吾も亦行かん、俄かに几に憑りて終る、孫莘老の碑文詳かに此の事を敍す、〔二〕夫子　退翁を言ふ、公の自注に、退翁官於蜀、余在京師。余歸而退翁去、及余官於吳興、則退翁亡矣と、〔三〕辰參　蘇武の詩、昔爲倡與レ樂、今爲參與レ辰と、辰星は東南に出で、參星は西方に出で、時刻は參星沒して後、辰星が出るのである、〔四〕異時　「漢食貨志」に、異時言往時也と、〔五〕末路　「戰國策」に、行百里者半九十、此言末路之難と、〔六〕初心　韓愈の文、道德日負於初心と、〔七〕枉尺尋　「孟子滕文公章句下」に、枉尺而直尋と、

【詩意】吳興の地に君子が有る、其の人品は澹泊にして朱絲琴の如くである、一度曲を奏すれば三たび太息する、今日に至るまで其の遺音がある、嗟于余は夫子と、其の境地の相避け去る辰參の如きものであるが、猶ほ喜ぶものは夫子の諸郎を見ることが出來る、諸郎の人品も皆窈然と清く且深く輕薄の態は無い、而かも考ふ異時に良士を多く知つて居りしが、多くは末路が初心に背きて全うしない、我等が生にして若し命あらざるときは、其れ肯て一尺を枉げて一尋を直くするであらう、

【餘論】紀曉嵐は異時多以下を評して曰く、不甚分明と、前作の坐看猿猱の句も今と同樣頗る明白を缺く所がある、

次韻答孫侔

次韻、孫侔に答ふ

十年身不レ到朝廷。　十年身は朝廷に到らず、
欲伴騷人賦落英。　騷人に伴うて落英を賦せんと欲す、
但得低頭拜東野。　但低頭して東野を拜するを得ば、
不レ辭中路候淵明。　辭せず中路に淵明を候するを、

【字解】〔一〕落英　「離騷」に、朝飲木蘭之墜露、兮、夕餐秋菊之落英と、〔二〕低頭　韓退之の詩、低頭拜東野、願得終始如駑蹇、東野不回頭、有如寸莖撞鉅鐘と、〔三〕候淵明　「晉陶潛傳」に、

艤舟苕霅人安在。　苕霅に艤舟する人安くに在る、
卜築江淮計已成。　江淮に卜築する計已に成る、
千里論交一言足。　千里論交一言に足る、
與君蓋亦不須傾。　君と蓋亦傾くるを須ひず、

【題義】孫侔字は少述は眞州の人、親に事へて至孝、王安石、曾子固と游ぶ、州學教授に除せらるるも、就かずして江淮の間に客居して卒す、東坡の名を慕うて詩を贈り、公が之に次韻したものである、

【詩意】君は十年も身を野に處して朝廷に到らない、唯騷人に同伴して落英を賦せんと欲せらる、但低頭して東野を拜することを得れば、肯て辭せない中路に出でて淵明を仕候することを、艤舟して苕霅の游を爲せし當時の人は今は安くに在る、君は江淮の間に家を構ふる計已に成ると聞く、千里を隔てても交を論ずれば一言にして足る、其の一言は君と蓋は亦傾くるを須ひず、面交よりは心交の方が重い、

【餘論】紀曉嵐曰く、六句指買田泗上之事と、此の詩、律としては亦病がある、不到、不辭、不須、騷人、人安、紀は古人の疵を指摘するに巧にして、此の疵を論せざるは不思議である、

刺史王宏造焉、潛稱疾不見、宏令人候之、密知當往廬山、乃遣其故人龐通之等、齎酒先於半道、要之、潛既遇酒、便引酌野亭、欣然忘歸、宏乃出與相聞、遂欵宴竟日、【四】千里「後漢范式傳」

重寄

凜然高節照時人。　凜然たる高節時人を照す、
不信微官解浣君。　信せず微官の君を解浣するを、
蔣濟謂能來阮籍。　蔣濟謂ふ能く阮籍を來すと、
薛宣眞欲吏朱雲。　薛宣眞に朱雲を吏とせんと欲す、
好詩衝口誰能擇。　好詩口を衝いて誰か能く擇ばん、
俗子疑人未遣聞。　俗士人を疑ふ未だ遣聞せず、
乞取千篇看俊逸。　千篇を乞取して俊逸を看る、
不將輕比鮑參軍。　將て輕しく鮑參軍に比せず、

【字解】【一】解浣「孟子公孫丑下」に、爾焉能浣我哉と、汚及び洗と同じ、ケガスである。【二】蔣濟「晉阮籍傳」に、太尉蔣濟、聞籍有奇才、而辟之、籍詣都亭、奏記求免、初濟恐籍不至、得之記欣然、遣卒迎之、而籍已去、濟大怒、於是鄉郡共諂之、乃就吏、後謝病歸と、【三】薛宣「前漢朱雲傳」に、薛宣爲丞相、雲往見之、宣備賓主禮、從容謂雲曰、在田野無事、且留我東閤、可以觀四方奇士、雲曰、小生乃欲相吏邪、宣不敢復言と、【四】鮑參軍「南史」に、鮑照字明遠、文辭瀚逸、臨海王子項、爲荊州、照爲前軍參軍と、杜子美の詩、清新庾開府、俊逸鮑參軍と、鍾嶸曰、鮑參軍詩、如駑馬走坂、俊逸奔放と、

【詩意】凜然たる君の高節は時に走る人を照す、余は信せない微官君を解浣することを、昔し蔣濟は謂うた能く阮籍が己れの部下に來たと、薛宣も亦朱雲を吏にせんと欲したのである、好詩は口を衝いて出づ誰か能く擇ばんや、俗士は人を疑うて眞實の事を聞かしめない、君の詩千篇を乞取して俊逸を

看んと思ふ、輕輕に君を將て鮑參軍に比するのではない、

【餘論】紀曉嵐曰く、連二用五人名一礙レ格と、一律の中四人は對法として已むを得ざるも五人の名を連ぬる例は無い、紀評の礙レ格は洵に然るべきと思ふ、且、不信、未遣、不將、謂能、誰能、坡公の律往往之れあるは、公が此の格を創せしとなれば可なるも、然らざれば病である、

次韻和劉貢父登黃樓見寄。竝寄子由二首

劉貢父が黃樓に登り寄せらるるに次韻して和し、竝に子由に寄す　二首

清派連淮上。黃樓冠海隅。　清派淮上に連なり、黃樓海隅に冠たり、
此詩尤偉麗。夫子計魁梧。　此の詩尤も偉麗、夫子計るに魁梧、
【自注】劉爲人短小。

世俗輕瑚璉。巾箱襲武夫。　世俗瑚璉を輕んじ、巾箱武夫を襲ふ、
坐令乘傳遽。奔走爲儲須。　坐して傳遽に乘せしむ、奔走儲須を爲す、
邂逅我已失。登臨誰與俱。　邂逅我已に失す、登臨誰と與俱にせん、
貧貪倉氏粟。身聽冶家檇。　貧貪倉氏が粟、身聽冶家の檇、
會合難前定。歸休試後圖。　會合前定し難し、歸休後圖を試む、
腴田未可買。【自注】本欲買田於潤上、近已不遂矣。　腴田未だ買ふべからず、
窮鬼却須呼。　窮鬼却つて須らく呼ぶべし、
二水何年到。雙洪不受艫。　二水何れの年か到る、雙洪艫を受けず、
至今清夜夢。飛轡策天吳。　今に至るまで清夜の夢、飛轡天吳を策す、
【自注】此詩寄劉。

【字解】【一】清派　次公曰、清派卽清河也、其水從青州來、與淮會於徐と、【二】偉麗　揚子、詩人之賦麗以則と、【三】魁梧　公自注に劉爲人短小と、「史記」に、聞張良之智勇、以爲其鴟魁梧奇偉、反若婦人女子と、【四】瑚璉　宗廟にて用ふる器、論語に出づ、【五】巾箱　元稹の詩、童兒挂巾箱と、絹張りの小箱を言ふ、「南齊書陸澄傳」に、王儉出巾箱几案彝服飾と、【六】武夫　「戰國策」に、武夫類玉と、武夫は珷玟、玉に似たる石、【七】傳遽　「唐韻」に傳遽驛也、以車曰傳、以馬曰遽と、「王注」に、傳遽使車之公者と、貢父が京東轉運使の職を奉ずる時を言ふ、【八】儲須　軍儲軍須より起りて、總ての儲、總ての須に用ふ、【九】邂逅　「毛詩」に、見此邂逅と、【一〇】貧貪倉氏粟　頗る解し難き句、案するに「後漢書王嘉傳」に、貪其材器、有益於公家也、孝文時、吏居官者或長、子孫以官爲氏、倉氏庫氏、則倉庫吏之後也と、【一一】冶家檇　檇は槖と同じ、「莊子大宗師篇」に、今一以天地爲大爐、以造化爲大冶と、【一二】腴田　公の自注に、本欲買田於潤上、近已不遂矣と、「漢張禹傳」に、家以田爲業、及富貴、多買田、至四百頃、皆浙潤肥美、號曰腴田と、【一三】窮鬼　韓退之の送窮文に結柳作車、縛蒲爲船、載糗輿脯、三揖窮鬼と、【一四】雙洪　百步洪と呂梁洪の二、【一五】艫　船尾卽ちトモ、【一六】天吳　「山海經」に有神人、八首人面、虎身十尾、名曰天吳と、

【題義】劉貢父が黃樓に登りて感慨せられし詩を寄示せられたるを次韻し、一首を劉に贈り、一首を

子由に贈りたるもの、

【詩意】清河の水派は淮上にまで連なる、而して河上に在る黄樓の大なるは海隅に冠絶する、君が此の詩は尤も偉麗である、知らざるもの其の詩を讀んで夫子を狀貌魁梧の人と計するであらう、所が世俗は瑚璉の如き禮器は輕視して、反つて巾箱に珎玦の如きものを祕襲する、聞く奔走するは儲須の爲めであると、邂逅するも忽ちにして我は失する、我が黄樓に登臨するときは誰と與俱にするぞや、貧らば愈よ貧である倉氏の財粟、身に於て聽く治家の模倣を、會合するもいつと前定は容易でない、官を罷めて歸休後の計を圖るべきである、腴田なぞは買ふを要しない、反對に窮鬼が却つて呼ぶことと思ふ、二水の邊には何れの年にか到るや、雙洪は狹くして艫を容るる事が出來ない、今に至るまで清夜の夢、轡を飛ばして天臭を策つことを、

〔一〕

與子皆去國。十年天一隅。
數奇逢惡歲。計拙集枯梧。
好士餘劉表。窮交憶灌夫。
不矜持漢節。猶喜攬桓須。
清句金絲合。高樓雪月俱。

〔二〕

子と皆國を去る、十年天の一隅、
數奇にして惡歲に逢ひ、計拙にして枯梧に集る、
士を好むは劉表を餘し、窮交は灌夫を憶ふ、
矜らず漢節を持するを、猶ほ喜ぶ桓須を攬ることを、
清句金絲合し、高樓雪月俱にす、

吟哦出新意。指畫想前橅。
【自注】子由初赴南京。登之出東門。登城上。覽山川之勝。云。此地可作樓觀。於是始有改築之意。

吟哦新意を出し、指畫前橅を想ふ、

自寫千言賦。新裁六幅圖。
【自注】近以絹自寫子由黄樓賦。答六幅圖。甚妙。

自から寫す千言の賦、新たに裁す六幅の圖、

傳看一座聳。勸著尺書呼。
莫使騷人怨。東游不到吳。
【自注】此詩寄子由。

傳看せんと一座聳え、勸著して尺書呼ぶ、
騷人をして怨ましむる莫かれ、東游吳に到らず、

【字解】〔一〕天一隅　李陵の詩、各在天一涯と、〔二〕數奇　俗語のフシアハセ、奇は偶の對、運命相合はざるの義、「史記李廣傳」に、李廣數奇、惡不得所欲と、〔三〕集枯梧　「國語」に、優施、謂里克妻曰、主孟啓我、我敢茲暇豫事也君、乃歌曰、暇豫之吾、吾不如鳥烏、人皆集於菀、已獨集於枯と、菀は茂木の貌、〔四〕好士　「後漢劉表傳」表爲荆州刺史、學士歸者千數と、〔五〕灌夫　「前漢書」に、竇嬰無勢、諸公稍自引而意疎、唯灌夫側否、兩人相爲引重と、〔六〕不矜　次公曰、言賈父不以爲使自矜耳と、〔七〕桓須　「晉桓伊傳」に、謝安、主壻王國寶、安惡其爲人、每抑制之、孝武末年、國寶讒諛行於主相之間、遂釀遂成、帝召伊飲、安侍坐、帝命伊吹笛一弄、乃請以箏歌、伊攬箏而歌、怨詩曰、爲君既不易、爲臣良獨難、忠信事不親、乃有見疑患、周且佐文武、金縢切不刊、推心輔王政、二叔反流言、聲節慷慨、俯仰可觀、安泣下霑襟、乃越席而就之、抒其須曰、使君於此不凡、帝有愧色と、須は卽ち鬚である、〔八〕指畫　韓退之の詩、指畫愛悅欲と、公の自注に、子由初赴南京、登之出東門、登城上、覽山川之勝、云此地可作樓觀、於是始有改築之意と、〔九〕六幅圖　公の自注に、近以絹自寫子由黄樓賦、爲六幅圖、甚妙と、〔一〇〕傳看　韓退之の詩、一府傳看黄琉璃と、〔一一〕不到吳　公自注に、此詩寄子由と、韓退之の詩、孔子西

行不レ到レ呉と、

【詩意】子と余と皆國を出でてより、十年餘も各の天の一隅を隔てて居る、數奇にして互に凶惡の歳に逢ふ、生計も拙なれば枯梧に集まりて茂樹に止まることをせぬ、士を好むの劉表を今日も猶ほ餘すあるを喜ぶ、又窮交は人の好まざる所灌夫を憶はざるを得ない、貢父の人物は漢節を持しても矜らない、猶ほ喜ぶことには桓伊の須を攬るの人なるを、清句を誦すれば金絲合する妙がある、高樓に登れば雪月俱に看るの興がある、吟哦は新意を出し、指畫宜しきを得たるは前撫を想はざるを得ない、自から千言の賦を寫して、且新たに六幅の圖を裁製する、傳看する者は一座皆身を聳かすであらう、尺書を以て呼ぶことを勸著するも、唯騷人をして怨ましめてはいかぬ、騷人は東游して呉に到らない、

【餘論】此の二篇解すべく亦解すべからざる所が多い、詩意として余が解する所、唯是れ余が解にして、果して作者が首肯するや否やを知らない、作者のみならず、今人も亦首肯するや否やも亦知らない、

呉江岸

曉色兼秋色。蟬聲雜鳥聲。　曉色と秋色と、蟬聲鳥聲に雜はる、
壯懷消鑠盡。回首尚心驚。　壯懷消鑠し盡きぬ、首を回らして尚心驚く、

【詩意】呉江の岸上の秋色は眞に秋色である、蟬が彗彗と鳴く裏に鳥が啾啾と囀ずる聲に雜はる、壯懷は已に消鑠し盡くるも、首を回らして尚心魂の驚くものがある、

御史臺。榆槐竹柏。四首　御史臺、榆槐竹柏　四首

榆

我行汴堤上。厭見榆陰綠。　我汴堤の上を行く、見るを厭ふ榆陰の綠なるを、
千株不盈畝。斬伐同一束。　千株畝に盈たず、斬伐して同一束、
及居幽囚中。亦復見此木。　幽囚の中に居るに及んで、亦復た此の木を見る、
蠹皮溜秋雨。病葉埋牆曲。　蠹皮秋雨溜り、病葉牆曲を埋む、
誰言霜雪苦。生意殊未足。　誰か言ふ霜雪苦と、生意殊に未だ足らず、
坐待春風至。飛英覆空屋。　坐して待つ春風至り、飛英空屋を覆ふを、

【字解】〔一〕汴堤「元和郡縣志」に、「開二汴渠一、以通二淮泗一、漢永平中築レ堤、隋煬帝、更令レ自二板渚一引レ河入レ汴口、又從二大梁之東一、引レ汴達レ淮、河畔樹レ之以二榆柳一」と、〔二〕幽囚「馬融上二安帝一書」に、今皆幽囚、陷二於法網一」と、公作る所の詩忌諱に觸れ、投獄せられしことを言ふ、〔三〕蠹皮　蠹は木中に生じて、心を食ふ蟲、〔四〕病葉　杜子美の詩、病葉多先墜と、〔五〕飛英　任昉の詩、飛英若二總素一と、

【題義】御史臺は漢以來稱する所、乃ち刑務所である、御史は綱紀を肅正し、官邪を糾察する處、其の臺前に植うる榆と槐と竹と柏との四植物を詠じたのである、榆は陰深く、槐は年を經るに從つて大且つ高く、竹と柏は四時色を變へざるからである、

【詩意】我は汴堤の上を行いた時、楡柳の陰の綠なるを見ることを願ふ、千株あるも敢に登たざるに、斬伐して同一束と爲す、後幽囚の中に居るに及んでも、汴堤と同じく亦復た此の木を見る、蠹の爲めに皮が腐りて秋雨が其の皮に溜り、病葉は墜落して牆の曲處を埋む、誰か言ふ霜雪の爲め苦しめられて、生意が殊に未だ足らずと、坐して春風の吹き至るを待つて、飛莢が紛紛と空屋を覆ふことを、

槐

憶我初來時。草木向衰歇。
高槐雖經秋。晚蟬猶抱葉。
淹留未云幾。離離見疎莢。
棲鴉寒不去。哀叫饑啄雪。
破巢帶空枝。疎影挂殘月。
豈無兩翅羽。伴我此愁絕。

【字解】〔一〕衰歇　太白の詩、瑤琴恐衰歇と、〔二〕高槐　「淮南子」に、槐之生也、入季春一五日而兎目、十日而鼠耳、更旬而始規と、〔三〕抱葉　杜子美の詩、抱葉寒蟬靜と、〔四〕離離　「詩王風」に其植物宜莢物一と、〔五〕疎莢　莢は莢殼、實を包めるサヤ、「周禮」に其植物宜莢物一と、〔六〕破巢　「後漢孔融傳」に、破巢之下、安有完卵一と、〔七〕翅羽　白樂天の詩、奮飛無翅羽一と、〔八〕愁絕　戴叔倫の詞に、鏤筋一聲愁絕と、

【詩意】憶ふに我が御史臺に初めて來るの時は、草木が總て衰歇に向ふの節であつた、高槐は秋を經るとも、晩蟬が猶ほ葉を抱いて鳴いて居る、淹留すること未だ幾何でもないが、高槐は離離として疎莢を見る、棲鴉は寒を畏れて去つて飛ばない、哀叫しながら飢ゑて雪を啄みて居、破れた巢が空枝に帶びてある、其の疎影には殘月が挂る、烏は兩翅羽が無いのではない、我が輩の愁絕に伴ふが爲であると思はる、

竹

今日南風來。吹亂庭前竹。
低昂中音會。甲刃紛相觸。
蕭然風雪意。可折不可辱。
風霽竹已回。猗猗散青玉。
故山今何有。秋雨荒籬菊。
此君知健否。歸掃南軒綠。

【字解】〔一〕中音會　「莊子養生主篇」に、庖丁解牛、奏刀騞然、莫不中音、合於桑林之舞、中經首之會一と、〔二〕甲刃

「杜牧晚晴賦」に、竹林外裏兮、十萬丈夫、甲刃鏘鏘、密陣雨環侍と、【四】猗猗　前に解ぜり、【五】青玉　陸龜蒙の詩、萬條寒玉一淡煙と、

【詩意】今日は南風が吹き來りて、庭前の竹を吹き亂す、甲乙と相低昂して一一音會に中らざるは無い、一低と一昂と宛かも甲刃が紛として相觸れるの形である、蕭然たる風雪の吹く意は、折る可きも之を辱しむ可からずと、風が霽るれば竹も亦風に隨つてぐるぐる回る、其の喜ぶの狀は猗猗として青玉を散ずるので判る、故山は今の時節に何かあるや、秋雨の爲に定めし籬菊が荒涼と爲つたであらう、但獨り此君が健在であつたなら、歸る日は南軒の綠を掃うて賞觀せんと思ふ、

柏

故園多珍木、翠柏如蒲葦。
幽囚無與樂、百日看不已。
時來拾流膠、未忍踐落子。
當年誰所種、少長與我齒。
仰視蒼蒼幹、所閱固多矣。
應見李將軍、膽落溫御史。

柏

故園珍木多く、翠柏蒲葦の如し、
幽囚與に樂む無し、百日看已まず、
時に來りて流膠を拾ふ、未だ忍びず落子を踐むに、
當年誰か種うる所、少長我と齒す、
仰ぎ視る蒼蒼の幹、閱する所固より多し、
應に見るべし李將軍、膽は落とさる溫御史、

【字解】【一】珍木　張九齡の詩、燒燒珍木巔と、【二】翠柏　柏は扁柏の類、常綠喬木の總稱、ヒノキ、【三】流膠　一本流肪に作る、皮より流るる脂肪、【四】落子　「木鮮」に柏九月結子と、【五】所閱　「漢書寬饒傳」に、平恩侯許伯入第、寬饒仰視屋而歎曰、善哉、於富貴無常、忽川易人、此如傳舍、所閱多矣と、【六】李將軍　李祐、【七】溫御史　溫造、「舊唐書」に、溫造召拜侍御史、李祐自夏州入拜金吾、遣御逆馬百五十匹、造正衙彈奏、祐股戰汗流、私謂人曰、吾夜臨蔡州城、擒吳元濟、未嘗心懾、今日膽落於溫御史、吁可畏哉と、

【詩意】柏臺の故園には珍木が多くある、中に就いて翠柏は蒲葦の如くに鬱茂である、幽囚せらるるに及んで與に樂むことなければ、此の柏樹のみ百日看て已まない、時には來りて流膠を拾ふこともある、が忍びない其の落子を踐み行くには、當年誰か此の樹を種ゑたものである、少も長も皆我と同年位である、仰いで蒼蒼の幹を視て、樹としても閱する所のもの多くあらう、應に見るべし法を正す爲めには李將軍も、溫御史の爲めに豪膽を落されたることを、

【餘論】紀曉嵐、楡を評して純用二寫意一、妙不二怨怒一と、槐を評して借レ題抒レ意、正不二必句句切一槐と、竹を評して查初白云ふ、骨節清剛、琅然可レ誦と、紀は又柏を評して觸手立レ意と、

己未十月十五日獄中恭聞太皇太后不豫有レ赦作レ詩

己未十月十五日、獄中恭しく太皇太后の不豫、赦あると聞いて詩を作る

庭柏陰陰晝掩門。
烏知有赦鬧黃昏。
漢宮自種三生福。
楚客還招九死魂。
縱有鋤犁及田畝。
已無面目見邱園。
只應聖主如堯舜。
猶許先生作正言。

庭柏陰陰晝門を掩ふ、
烏は赦ある を知りて黃昏に鬧ぐ、
漢宮自から種う三生の福、
楚客還た招く九死の魂、
縱ひ鋤犁の田畝に及ぶあるも、
已に面目の邱園を見ること無し、
只應に聖主堯舜の如くなるべし、
猶ほ先生に許して正言と作さしむ、

我何面目見之と、【六】正言「職名」に宋雍熙四年、改補闕、爲左右司諫、拾遺、爲左右正言」と、

【題義】元豐二年己未八月に貶せられ、獄に在ること七十有餘日にして皇太后が偶ま不豫、是に於て大赦令を出し、公も亦出獄するを得て是の詩を作る、

【詩意】庭柏は陰陰として獄舍の門を晝も掩ふ、烏は大赦令があるを聖得知して黃昏に啼き鬧ぐ、漢宮は乃ち大恩德を施して以て三生の福因を種ゑ、楚客は已に生を期しないのに還九死の魂魄を招來する、今後縱ひ鋤犁を把りて田畝に耕すの勞を厭はずとするも、已に一度入獄した身は此の面目を以て邱園を見るに忍びない、只應に聖主は堯舜の仁厚にも比すべきである、猶ほ先生を許して正言の官を授け玉ふ、

【餘論】紀曉嵐曰く、亦和平と、余案するに、有赦、有鋤、三生、先生、例の同字が多い、和平は和平なるが、三生の佛語を挾入するは亦是れ英雄人を欺くものか、

十月二十日恭聞太皇太后升遐。以軾罪人不許成服。欲哭則不敢。欲泣則不可。故作挽詞二章

十月二十日、恭しく太皇太后の升遐を聞く、軾罪人を以て服を成すを許されず、哭せんと欲するも則ち敢てせず、泣かんと欲するも則ち不可、故に挽詞二章を作る、

巍然開濟兩朝勳。
信矣才難十亂臣。
原廟固應祠百世。
先王何止活千人。
和熹未聖猶貪位。

巍然として開濟す兩朝の勳、
信なり才は難し十亂臣、
原廟は固に應に百世に祠らるべし、
先王何ぞ止だ千人を活かさん、
和熹未だ聖ならず猶ほ位を貪り、

【字解】【一】開濟　杜子美の詩、兩朝開濟老臣心と、「宋史」に、曹彬字國華、眞定人、太祖開寶六年、進檢校太傅、八年平江南、拜樞密使、太宗即位、加同平章事、從征太原、加蒙恃中、太平興國三年、進檢校太師、尋封魯國公、咸平二年卒、追封濟陽郡王、謚武惠、と、

明德雖賢不及民。　　明德賢なりと雖も民に及ばず、
月落風悲天雨泣。　　月落ち風悲しんで天雨泣く、
誰將椽筆寫光塵。　　誰か椽筆を將て光塵を寫すや、

享太祖廟廷」と、【四】活千人「前漢書元后傳」に、王莽擅曰、吾聞活千人者、有封子孫、吾所活者、無餘人、後世其興乎と、【五】和熹「後漢和熹鄧皇后紀」に、和帝崩、殤帝生始百日、后乃迎立之、尊后爲皇太后、臨朝、及殤帝崩、太后定策、立安帝、臨朝政、范曄論曰、鄧后稱制終身、號令自出、衛謝前政之良、身興明辟之義、至使嗣主側目斂衽、於虛器、直生懷戀、懸書於象魏、借之儀者、殆其惑哉、又「宋史曹皇后傳」に、英宗即位、尊后爲皇太后、帝感疾、請罷同處分軍國事、御內東門小殿聽政、明年夏帝疾愈、即命撤簾還政、帝持書久不下、及秋始行之、【六】明德「後漢明德馬皇后紀」に、皇太后曰、馬貴人德冠後宮、即其人也、遂立爲皇后、常衣大練、不加綵、建初元年、欲封爵諸舅、太后不聽、【七】椽筆「世說」に、王東亭夢、人以大筆與之、管如椽、【八】光塵「老子」に和其光、同其塵、

【題義】獄を出でて五日にして太皇太后の升遐を聞くも、一旦罪人と爲りし身、成服は許されない、是の故に哭することも泣くことも、羣臣の如くにすることは出來ない、但挽詩二章を賦して哀悼の意を表するのである、

【詩意】太祖太宗の兩朝に涉りて國家を開濟する曹族の勳は、巍然たるものがある、才は難し僅かに十亂臣のみと孔子の言はれしは信である、功臣として太祖の廟に配せられ曹彬は百世に祠らるるものである、先王の廣德は何ぞ止だ千人の人數を活かすのみではない、和熹は女傑ではあるが未だ帝位でない而かも長く帝位を貪る、明德は賢后ではあるが其の夫の帝を輔くるに止まりて其の功が民には及ばない、月は落ち風は悲しんで天も涙を雨らす、誰か椽太の筆を將て太后の光塵を寫し出すものぞや、

〔一〕

未報山陵國士知。　　未だ報せず山陵國士の知に、
遶林松柏已猗猗。　　林を遶る松柏已に猗猗、
一聲慟哭猶無所。　　一聲慟哭するに猶ほ所無く、
萬死酬恩更有時。　　萬死恩に酬ゆ更に時あり、
夢裏天衢隘雲仗。　　夢裏天衢雲仗隘く、
人間雨淚變彤帷。　　人間雨淚彤帷變ず、
關雎卷耳平生事。　　關雎卷耳平生の事、
白首纍臣正坐詩。　　白首の纍臣正に詩に坐す、

〔二〕才難「論語泰伯章」に、武王曰、予有亂臣十人、孔子曰才難、不其然乎」と、邑姜一人は女である、【三】原廟「漢書」に孝惠爲原廟」と、「宋史」に、曹彬本傳、配享太祖廟廷、

【字解】【一】國士知「史記刺客傳」に、豫讓曰、知伯以國士遇我、我以國士報之と、「東都事畧」に蘇軾以詩得罪、人知必死、慈聖太后、遣黨中聞之、謂神宗曰、官家仁宗、以制科得軾兄弟、甚喜曰、吾爲子孫得兩宰相、今聞軾以作詩繫獄、得非仇人中傷之招、至於詩、其過微矣、吾疾勢已篤、不可冤滯致傷中和、神宗涕泣、軾由是得免と、【二】關雎「詩經周南詩篇の名、周の文王の后妃の德を歎ぜる詩、【三】卷耳「詩周南」に、采采卷耳、不盈頃筐と、后妃が文王を思慕すること、【四】纍臣「左傳成公三年」に、以君之靈、纍臣得歸骨於晉と、【五】坐詩李定と舒亶の二人、公の詩、贏得兒童語言好、一年强半在城中」讀書萬卷不讀律、致君堯舜終無術、」東海若知明主意、應教斥鹵變桑田」等を擧げ、公は君父を怨謗すと、是に於て幽囚せらる、

【詩意】未だ山陵の國士として偶せられし恩は報いざるに、陵林を遶るの松柏は已に猗猗と茂る、一

聲慟哭せんと欲するも其の所無く、又萬死を以て恩に酬ゆるは更に時あるを知る、夢裏に天衢雲仗も隘きの感を爲し、人間の雨淚彤帷を變ずるの悲しみがある、關雎卷耳を唱ふるは、太后平生の事である、白首の欒臣は正に詩に坐したるを憫み玉ふ、

【餘論】紀曉嵐、後首を評して、三四沈痛、後半措語頗滯と、眞に確評である、

予以事繫御史臺獄。獄吏稍見侵。自度不能堪。死獄中。不得一別子由。故作二詩。授獄卒梁成。以遺子由

予事を以て御史臺獄に繫がる、獄吏稍侵さる、自から度るに堪ふる能はず、獄中に死し、子由に一別するを得ざらんと、故に二詩を作り、獄卒梁成に授け、以て子由に遺る

聖主如天萬物春。　聖主天の如く萬物春なり、
小臣愚暗自亡身。　小臣愚暗にして自から身を亡ぼす、
百年未滿先償債。　百年未だ滿たず先づ債を償ひ、
十口無歸更累人。　十口歸する無く更に人を累せん、
是處青山可埋骨。　是の處青山骨を埋むべし、
他年夜雨獨傷神。　他年夜雨獨り傷神、
與君世世爲兄弟。　君と世世兄弟と爲り、
又結來生未了因。　又結ぶ來生未了の因を、

【題義】予は時事を議したる罪を以て獄に繫がれ、獄吏の爲め稍稍侵さるることもある、自から度るに堪ふることは出來ない、獄中に於て死に、且子由に一別の言辭を爲すことが出來ない、是に於て二首を作りて、獄吏の梁成に依屬して以て子由に遺るを得たのである、

【詩意】聖主の恩德は天の如く高く萬物一樣に春である、小臣は愚暗なるが故に自から身を亡ぼすに至る、未だ定命の百年に滿たずして先づ其の債を償ふとしても、蘇家の十口は歸する所無く更に他人を累するに忍びない、是の處青山骨を埋むべきも、他年夜雨を聞くごとに獨り傷神するに堪へない、君と願はくは世世兄弟と爲つて、又來生にも未了の因を結ばんと、

【字解】【一】債債　「首楞嚴經」に、債＝其宿債＝と、過去の罪を消するを云ふ、【二】十口　一家十人、【三】夜雨　杜子美の詩、夜雨剪＝春韭＝、新炊間＝黃粱＝と、【四】未了因　未だつきぬ因緣の意、

〔一〕

柏臺霜氣夜凄凄。　柏臺の霜氣夜凄凄、
風動琅璫月向低。　風は琅璫を動かして月は低に向ふ、
夢繞雲山心似鹿。　夢は雲山を繞りて心鹿に似、

〔二〕

【字解】【一】柏臺　御史臺の異名、【二】琅璫　「後漢書董卓、敬＝根裡＝、付＝郿獄＝、鎖＝之銀鐺鎖＝と、此はクサリ、杜子美の詩、風動金琅

魂驚湯火命如雞。
眼中犀角眞吾子。
身後牛衣愧老妻。
百歲神游定何處。
桐鄉知葬浙江西。

【自注】獄中聞杭潮問、民爲余作解厄道場。案月、故有此句。

魂は湯火に驚きて命雞の如し、
眼中の犀角眞に吾子、
身後の牛衣老妻に愧づ、
百歲神游定んで何れの處ぞ、
桐鄉知る浙江の西に葬るを、

【詩意】柏臺の霜氣は夜凄凄である、風は獄内の琅璫を動かし月は低に向ふ、我が夢は雲山を繞りて心は之を慕ふの鹿にも似て居る、魂は湯火にも驚きて我が命は之に烹らるる雞の如きかと思ふ、我が眼中に在る今日の犀角は眞に吾子一人である、身後葬家を寒飢ならしむるは老妻に愧づる、死後の神游は定めし何れの處である、桐鄉は知る浙江の西に葬ると、

【餘論】査初白の說に、此の獄中詩は、正集に入らず、南宋人の詩話中、往往之を載せて、頗る字に異同多しと、然らば何れが眞とも定め難きも、多く傳ふる所、今の本の如くなれば、姑らく之に從ふのである、紀曉嵐前首を評して曰く、譏刺太多、自是東坡大病、然但多排詆權倖之言、而無一毫怨謗君父之意、是其根本不壞處、所以能傳於後世也、情至語、不以工拙論也と、後首を評して句太俚と、余は曾て韓文公の潮州七律と此の前首とを以て情至語の雙璧と稱した、今紀と意の合したるを喜ぶ、

十二月二十八日蒙恩。責授檢校水部員外郎黃州團練副使。復用前韻二首

十二月二十八日、恩を蒙りて、檢校水部員外郎黃州團練副使を責授せらる、復た前韻を用ふ　二首

百日歸期恰及春。
餘年樂事最關身。
出門便旋風吹面。
走馬聯翩鵲啅人。
却對酒杯渾似夢。
試拈詩筆已如神。
此災何必深追咎。

百日の歸期恰かも春に及ぶ、
餘年の樂事最も關身、
門を出づれば便旋として風面を吹き、
馬を走らすれば聯翩として鵲人に啅し、
却つて酒杯に對し渾て夢に似、
試みに詩筆を拈ずれば已に神の如し、
此の災何ぞ必ずしも深く追咎せん、

【字解】【一】百日　初白云ふ、公以八月十八日赴獄、十二月二十八日出獄、恰滿百日と、【二】餘年　韓退之の詩、吾其寄餘齡と、【三】便旋　種種の說あるも、今は踟躕不進の貌、【四】聯翩　韓退之の詩、起居諫議聯翩來と、甲より乙と次第して進むを言ふ、【五】鵲　カササギ、喜を報ずる鳥、【六】啅　人を啄と同じ、今は喧噪である、

竊祿從來豈有因。　竊祿從來豈因あらん、

三閭、智非ニ昆論一、竊レ仕爲レ過、免レ罪爲レ幸と、孫君孚の談圃に、子瞻得レ罪、時有ニ朝士一、賫ニ一詩策一、內有ニ使墨君事者一、遂下レ獄、李定、何正臣、勤ニ其事一、以ニ指斥一論、謂レ蘇曰、學士素有ニ名節一、何不ニ與レ他招了一、蘇曰、軾爲ニ人臣一、不ニ敢萌ニ此心一、却未レ知ニ何人造ニ此意一、一日禁中、遣ニ馮宗道按ニ獄、止貶ニ黃州團練副使一と、

【題義】出獄後に思赦を蒙りて、公事文牘を檢校する水部員外郎と爲り、黃州の節度防禦團練副使を責授せられて作れるものである、

【詩意】百日間の幽囚より歸期を得て回春の氣を覺ゆ、餘年の樂事は最も關身の事である、門を出づれば便旋せざるを得ない風の面を吹くに、馬を走らせば騁翩たる喜びは鵠も知つて人前に啼しく鳴く、却つて酒杯に對すれば萬事渾て夢の如く、試みに詩筆を拈來すれば已に神の如くである、此の災禍は何ぞ必ず深く追咎せられんや、祿を竊む從來何の因があるでもない、

〔一〕

平生文字爲ニ吾累一。
此去聲名不レ厭レ低。
塞上縱歸他日馬。
城東不鬬少年雞。

〔二〕

平生文字我が累を爲す、
此を去つて聲名低きを厭はず、
塞上縱ひ他日の馬に歸するも、
城東鬬はさず少年の雞、

【字解】【一】塞上「淮南子」に近ニ塞上一之人、有ニ善術者一、馬無レ故亡而入レ胡、人皆弔レ之、其父曰、此何遽不レ爲レ福乎、居數月、其馬將ニ胡駿馬一而歸、人皆賀レ之、其父曰、

【七】追咎　王羲之の書、追ニ咎往事一と、【八】竊祿　孔融の書、忠非ニ

休官彭澤貧無レ酒。
隱几維摩病有レ妻。
堪笑睢陽老從事
爲レ余投レ檄向ニ江西一。

【自注】子由聞ニ予下レ獄、乞レ以ニ官爵一贖ニ予罪一、貶ニ筠州鹽酒一。

官を休むる彭澤貧にして酒無く、
几に隱る維摩病んで妻あり、
笑ふに堪へたり睢陽の老從事、
余が爲めに檄を投じて江西に向ふ、

法喜ニ爲レ妻と、【四】老從事　子由を指す、【五】投檄　公の自注に、子由聞ニ予下レ獄、乞レ以ニ官爵一贖ニ予罪一、貶ニ筠州鹽酒一と、退之の詩、投レ檄北去何蘇哉と、

【詩意】平生文字の爲めに累せらる、今日より以後の聲名は低きを厭はない、縱ひ今日の禍が明日の福と變るとするも、城東に向つて少年輩と鬬雞などは共にせぬ、少年輩に頭を下げるを厭うて官を休めた彭澤は貧にして酒は無い、又羅漢等を叱呵したる維摩は几に隱りて病を愈すに法妻がある、笑ふに堪へたる事は睢陽の老從事である、余が爲めに餘計な心配をして檄を投じて江西に向うたは、

【餘論】紀は譏刺太多、東坡大病と前に評したるが、公の頂門の一針である、平生文字爲ニ吾累一と自己を知り乍ら、又好んで爲レ累の詩を歌ふ、「宋史」にも蘇軾、程頤、同在ニ經筵一、軾喜ニ諧謔一、而頤以ニ禮法一自持、軾每嘲ニ侮之一とありて、程伊川の如きですら、兒童を見る如くである、況んや餘子をや、後首、爲吾、爲余、不厭、不鬬、詩にも病がある、

此何遽不レ爲レ禍乎と、【三】城東　「城東父老傳」に、賈昌年七歲、明皇召爲ニ繼坊小兒一、長至ニ元和庚寅一、年九十八矣、語ニ太平事一、歷歷可レ聽、自言少年、以ニ鬬雞一侍レ上、上以ニ俄優一畜レ之と、曹植の詩、鬬雞東郊道と、此の游戲は漢代より起る、【三】維摩　「淨名經」に、維摩示レ疾、以ニ

蘇東坡詩集　卷二十

古今體詩　六十首

陳州與文郎逸民飲別攜手河堤上作此詩

陳州に文郎逸民と攜手河堤上に飲別し、此の詩を作る

白酒無聲滑瀉油。　白酒聲無く滑かに油を瀉ぐ、
醉行堤上散吾愁。　醉うて堤上に行き吾愁を散ず、
春風料峭羊角轉。　春風料峭として羊角轉じ、
河水渺緜瓜蔓流。　河水渺緜として瓜蔓流る、
君已思歸夢巴峽。　君已に歸を思うて巴峽を夢み、
我能未到說黃州。　我能く未だ黃州を說くに到らず、
此身聚散何窮已。　此の身聚散何ぞ窮已あらん、
未忍悲歌學楚囚。　未だ忍びず悲歌楚囚を學ぶに、

【字解】〔一〕料峭　陸龜蒙の詩、東風料峭客帆遲と、風が肌に著き微寒の貌、〔二〕羊角　旋風を言ふ、「莊子逍遙遊」に、摶扶搖羊角而上者九萬里と、ゲルゲル旋る風、〔三〕渺緜　李太白の詩、洞庭瀟湘意渺緜と、〔四〕瓜蔓　「永衡記」に、三月桃花水、五月瓜蔓水と、瓜蔓延ぶる節故に名づく、〔五〕未到　韓退之の詩、潮陽未到吾能說、海氣昏昏水拍天と、〔六〕黃州　公、團練副使と爲り、明年二月に黃州に至る、

【二】楚囚　「左傳成公九年」に、晉侯觀二於軍府一、見二鍾儀一、問レ之曰、南冠而繫者誰也、有司對曰、鄭人所レ獻楚囚也と、又「晉書王導傳」に、過レ江人士、每二暇日一、相要出二新亭一、飲宴、周顗中坐嘆曰、風景不レ殊、舉レ目有二河山之異一、皆相視流涕、唯導愀然變レ色曰、當レ共戮二力王室一、克二復神州一、何至レ作二楚囚一、相對泣耶、衆敕レ誤而謝レ之と、

【題義】陳州に於て子由の女壻である文邈民と留別に際し此の詩を作りしものである、

【詩意】白酒を杯に瀉ぐも聲が無く油の如く滑かである、飲後堤上に醉歩して吾が愁を散ずる、面前の春風は料峭として羊角轉ずる如く、脚下の河水は溶溶として瓜蔓流るる、君は已に歸を思ふが爲めに巴峽を夢むる、我は黃州に到るに定まつて居るがまだ詳說することは出來ない、此の身の聚散は窮已あること無い、唯忍びない悲歌して楚囚を學ぶには、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、滑瀉油三字不レ雅、羊角乃旋颿之狀、與二春風料峭一不レ合、角字渺字、皆應レ平而仄、以二次句瓜字、應レ仄而平一、雙救之、此唐人定格也と、紀は作法に於ては之を許すも、起句滑瀉油の三字を俗と爲す、余は例の同字多きを指摘する、吾愁、我能、未到、未忍、後生學ぶ者は不可、羊角は旋颿の狀であるから、春風と不合であるとの紀評も大に聞く可きである、

子由自南都來陳三日而別　子由南都より來陳、三日にして別る

夫子自逐客、尙能哀楚囚。　夫子自から逐客、尙ほ能く楚囚を哀しむ、
奔馳三百里、徑來寬我憂。　奔馳三百里、徑ちに來りて我が憂を寬うす、
相逢知有得、道眼淸不流。　相逢うて得るあるを知る、道眼淸うして流れず、
別來未一年、落盡驕氣浮。　別來未だ一年ならず、落ち盡くす驕氣の浮ぶを、
嗟我晚聞道、款啓如孫休。　嗟我晚に道を聞き、款啓孫休の如し、
至言難久服、放心不自收。　至言久しく服し難く、放心自から收めず、
悟彼善知識、妙藥應所投。　悟る彼善知識、妙藥投ずる所に應ず、
納之憂患場、磨以百日愁。　之を憂患の場に納れ、磨するに百日の愁を以てせん、
冥頑雖難化、鐫發亦已周。　冥頑化し難しと雖も、鐫發亦已に周ねし、
平時種種心、次第去莫留。　平時種種の心、次第に去つて留まる莫し、
但餘無所還、永與夫子游。　但無所還を餘して、永く夫子と游ばん、
此別何足道、大江東西州。　此の別何ぞ道ふに足らん、大江東西の州、
畏蛇不下榻、睡足吾無求。　蛇を畏れて榻を下らず、睡足りて吾求め無し、
便爲齊安民、何必歸故邱。　便ち齊安の民と爲る、何ぞ必ずしも故邱に歸らん、

【字解】【一】逐客　「史記李斯傳」に、秦宗室大臣、請ニ一切逐レ客、斯亦在二逐中一と、【二】三百里　樂史の「太平寰宇記」に、自二鄭州一至二陳州一、二百八十里と、鄭州軍西南一至二陳州一、二百八十里と、鄭州軍は卽ち南京である、【三】寬我憂　杜子美の詩、斗水何直百憂寬と、【四】道眼　道を修

して得たる眼、「圓覺經」に分別邪正、能於末世一切衆生無畏道眼」と、【九】驕氣　「史記老子傳」に、謂孔子曰、去子之驕氣、與多欲」と、【八】欲啓　「莊子達生篇」に、有孫休者、踵門而詫、今休欲啓、寡聞之民也と、欲は空にて、啓は開、所見の小なるを言ふ、【七】放心　「孟子」に、學問求其放心而已と、【六】善知識　「法華經妙莊嚴王品」に、善知識者、是大因緣と、天台の「法華文句」に、聞名爲知、見形爲識、是人益我菩提之道、名善知識と、良友を稱する語、博學の士を稱するのではない、【五】妙藥　「維摩經」に、世尊現身、爲大醫王、善療衆病、應病與藥と、【四】冥頑　韓退之の文に、冥頑不靈と、【三】鏃發　ホリヒラクのである、【二】種種　白樂天の詩、銷盡平生種種心と、【一】無所還　「仞嚴經」に、阿難言、我心性各有所還、別妙明元心、何故無還、佛告阿難、今當示汝無所還地、と、【一二】長蛇　「佛遺教經」に、煩惱毒蛇、睡在汝心、譬如黑蚖在汝室、睡當以持戒之鉤、早併除去之、睡蛇既出、乃可安臥、と、【一三】齊安　春秋の世、楚國、隋の齊安郡、今の黃州、

【題義】元豐三年に黃州に赴任の途次、道を陳州に取る、時に子由も南都より來りて、三日會談せし時の詩である、

【詩意】夫子は自から朝廷を放逐せられた客である、が尙ほ能く楚囚と爲る人を哀しむ、君は三百里も遠路を奔馳せられ、徑ちに來りて我が心憂を寬慰せらる、君と相逢うて所得あるを知る、道眼は淸うして流れない、君と一別來未だ一年は經ない、是の間に驕氣や浮念は落ち盡きぬ、嗟乎我は晩年に道を聞いて、所見の狹小なること孫休の如くである、先賢の至言は久しく敬服はして居るが、散漫たる放心は尙ほ自から收むることが出來ない、悟る彼の方外の良朋友は、病者の爲めに病に應適する藥を投ぜらるるを、我も之を憂患の場に納め入れられ、磨して以て百日の愁を消したい、冥頑の天分は變化する難きも、聊かでも頑冥を鏃發せらるること已に周ねきを知る、平生積種なる煩惱の心も、次第次第に去つて跡が留まることがない、但無所還の地を餘して、此の淸淨の境地に永く夫子と游ばんと思ふ、今日此の別は何ぞ道ふに足らん、大江を中心に東州と西州との隔てのみ、蛇害を畏るるを知つて榻を下らない、一榻を守りて睡は足る又何をか求めんや、便ち齊安の一民と爲つて、必ず故鄕に歸らんと思ふ念は起さない、

【餘論】紀曉嵐曰く、起二句施二於兄弟一不レ合、於二朋友一則可、道眼句拙、落盡句亦拙と、紀評當る、公の子由を視る、弟として視るよりは寧ろ友として視ることが多い、起二句の紀評は取るに足らぬ、

正月十八日。蔡州道上遇雪。次子由韻二首

正月十八日蔡州道上雪に遇ふ、子由の韻に次す　二首

蘭菊有生意。微陽回寸根。
蘭菊生意あり、微陽寸根を回す、

方憂集暮雪。復喜迎朝暾。
方に憂ふ暮雪集まるを、復た喜ぶ朝暾を迎ふるを、

憶我故居室。浮光動南軒。
憶ふ我が故居室、浮光南軒に動くを、

松竹半傾瀉。未レ數葵與萱。
松竹半は傾瀉、未だ數へず葵と萱とを、

三徑瑤草合。一瓶井花溫。
三徑瑤草合し、一瓶井花溫なり、

至レ今行吟處。尙餘履舄痕。
今に至りて行吟の處、尙ほ履舄の痕を餘す、

一朝出從仕。永愧李仲元。
晩歲益可羞。犯雪方南奔。
山城買廢圃。槁葉手自掀。
長使齊安人。指說故侯園。

一朝出でて從仕し、永く李仲元に愧ぢ、
晩歲益す羞づべし、雪を犯して方に南奔、
山城廢圃を買ひ、槁葉手自から掀ぐ、
長く齊安の人をして、故侯の園を指說せしめん、

【字解】〔一〕蘭菊　「懷花錄」に、陳後主、問ふ煬帝、麗華與ふ麗妃何如、帝曰、春蘭秋菊、亦各一時之秀也と、〔二〕集喜雪　「毛詩」に、先集維霰と、〔三〕朝暾　「楚辭九歌」に、暾將出兮東方、照吾檻兮扶桑と、〔四〕浮光　劉孝綽の詩、浮光亂ふ紛驚、〔五〕奔與萱　奔はアフヒ、萱はワスレ草、忘憂艸、宜男艸、〔六〕井花　杜子美の詩、兒童汲ふ井花と、紀曰、井花須ゆ作ゆ華と、華が正しい、〔七〕履舄痕　孟東野の詩、小時履舄痕と、〔八〕李仲元　楊子、或問、子蜀人也、請ふ人、曰有ふ李仲元者、人也、不ゆ屈ふ其意、不ゆ累ふ其身、曰是夷惠之徒歟、曰不ゆ夷不ゆ惠、可否之間也、仲元世之師也と、〔九〕掀　掀舉又は掀蹇である、〔一〇〕故侯園　「前漢書」に、召平故秦東陵侯、秦破爲ふ布衣、貧種ふ瓜長安城東、瓜美、故世謂ふ東陵瓜と、

【題義】正月十八日、蔡州の道上にて雪に逢ひ、子由が詩を作る、乃ち其の韻を次して作る、

【詩意】蘭も菊も皆生意がある、微しく陽暖なれば寸根を回す、其の寸根を死すものは雪であるが故に憂ふ、復た喜ぶことは朝暾を迎ふる時である、憶ふに我等が國の故居室に在りし時は、晩暾の浮光が南軒に動き、松竹は雪の爲め半は傾瀉し、而して未だ葵と萱とを數へることが出來ない、三徑は瑤艸が鎖合して、僅に一瓶に井華が溫である、今に至るまで當時行吟の處、尙ほ我等が履舄の痕跡を餘す、一朝國を出でて朝に仕へ、永く以て國を出でない李仲元に愧ぢ、晩歲に及んで益す其の羞を知る、此の大雪を犯して方に南奔することを、山城に廢圃を買ひ求め、枯槁せる樹葉を手自から掀取する、長く齊安の民衆をして、故侯が處理せる園なることを指說せしむとは、

〔二〕

鉛膏染髭須。旋露霜雪根。
不如閉目坐。丹府夜自暾。
誰知憂患中。方寸寓羲軒。
大雪從壓屋。我非兒女萱。
平生學踵息。坐覺兩鐙溫。
下馬作雪詩。滿地鞭箠痕。
佇立望原野。悲歌爲黎元。
道逢射獵子。遙指狐兎奔。
蹤跡尙可原。窟穴何足掀。
寄謝李丞相。吾將反邱園。

鉛膏髭須を染め、旋露霜雪の根、
如かず閉目して坐し、丹府夜自から暾、
誰か知らん憂患の中、方寸羲軒を寓す、
大雪屋を壓するに從す、我は兒女の萱にあらず、
平生踵息を學び、坐ろに覺ゆ兩鐙の溫なるを、
馬より下りて雪詩を作る、滿地鞭箠の痕、
佇立して原野を望み、悲歌黎元の爲にす、
道に射獵子に逢ふ、遙かに狐兎の奔るを指す、
蹤跡尙ほ原ぬべし、窟穴何ぞ掀ぐるに足らん、
寄謝す李丞相、吾將に邱園に反らんとす、

【字解】〔一〕鉛膏　ナマリにて造るアブラ、卽ち白髮染である、〔二〕丹府　陸機辨亡論に、響ふ丹府之愛ふ、注謂ゆ心也と、〔三〕

兒女花。孟郊詩、黄草兒女花、不ㇾ解ニ壯士憂一。【四】 蹤息 「莊子大宗師篇」に、眞人之息以ㇾ踵、衆人之息以ㇾ喉と、踵はキビス、喉はノド、【五】 兩鐙 鐙は鐙を正とす、アブミ、【六】 佇立 「毛詩」に、瞻望弗及、佇立以泣と、【七】 黎元 黎は黒、元は首、即ち黔首、人民を謂ふ、【八】 李丞相 李斯は秦の丞相、犬を率ひて上蔡東門を出でし事、今借りて李定に喩ふ、

【詩意】 鉛膏を用て髭須を染むるも、尚ほ霜雪の如き毛の根は露はれて居る、如かず閉目して坐し、丹府に心眼を開きて見れば夜も亦朝暾の如くである、誰か知らんや憂患の中、丹府の方寸に羲軒氏を寓するのであるを、然らば大雪が屋を壓するに從せてよい、我等は固より兒女の萱艸とは違ふ、平生より眞人と衆人との相違の事を學ぶ、坐ろに覺ゆ眞人踵息の旨を得たものか兩鐙が溫かくなりたるを、乃ち馬より下りて雪の詩を作れば、滿地皆鞭箠の痕である、是に於て佇立して原野を望み、悲歌慷慨するは黎元の爲めである、道にして射獵の子に逢ふ、其の子は遙かに狐兎を指して奔る、其の蹤跡は尚ほ尋ぬるを得るも、狐兎の窟穴は何ぞ掀擧するに足らんやと思ふ、詩を以て李丞相に寄謝する、吾は將に故の邱園に反らんと欲する、

【餘論】 紀曉嵐、前首を評して是憂患後語と、後首を評して暾字押得牽强、兒女萱亦生造、大雪二句、蹤跡二句皆寓言也と、紀は牽强や生造の非を知りて、次韻の罪にあることを問はない、要するに次韻は牽强もする、生造もする、

過新息留示鄉人任師中

新息を過ぎ鄉人任師中に留示す、

昔年嘗羨任夫子。
卜居新息臨淮水。
怪君便爾忘故鄉。
稻熟魚肥信清美。
竹陂雁起天爲黑。
桐柏煙横山半紫。
知君坐受兒女困。
悔不先歸弄清泚。
塵埃我亦失收身。
此行蹭蹬尤可鄙。
寄食方將依白足。
附書未免煩黃耳。

昔年嘗て羨む任夫子、
新息に卜居して淮水に臨む、
怪しむ君が便爾故鄉を忘れ、
稻熟し魚肥え信に清美、
竹陂雁起りて天爲めに黑し、
桐柏煙横はりて山半ば紫なり、
知る君が坐ながら受く兒女の困みを、
悔ゆ先づ歸りて清泚を弄せざることを、
塵埃我も亦身を收むるを失す、
此の行蹭蹬尤も鄙しむ可し、
寄食方に將に白足に依らんとす、
附書未だ免れず黃耳を煩はすを、

【注】小竹陂在ニ縣北一。
【注】桐柏廟在ニ縣南一。

【字解】【一】 新息 「太平寰宇記」に、新息縣、在ニ蔡州東南一百五十里一、淮水自ㇾ西流入、經ニ縣南一と、今の河南省汝陽道息縣、漢の馬援は新息侯と爲る、【二】 便爾 爾は語助のみ、【三】 竹陂 公「自注」に小竹陂在ニ縣北一と、【四】 桐柏 公「自注」に桐柏廟在ニ縣南一と、【五】 兒女困 「史記淮陰侯傳」に、呂后使ニ武士縛一信、信曰、吾悔不ㇾ用ニ蒯通之計一、乃爲ニ兒女子所一ㇾ詐と、元豐中に任師中は轉運判官と見を異にし、誣奏せられたる事を言ふ、【六】 收身 歐陽修の詩、何日早收ㇾ身、江湖一漁艇と、【七】 蹭蹬 杜子美の詩、蹭蹬職騷老と、道路に疲勞せし貌、【八】 白足 「高僧傳」に、曇始者、晉武帝時人、足白ニ於面一、時稱爲ニ白足和尚一と、【九】 黃耳 犬の名、「晉書陸機傳」に、機有ニ駿犬一、

往雖不及來有年。　往は及ばずと雖も來は年あり、
詔恩倘許歸田里。　詔恩倘し田里に歸るを許さば、
却下關山入蔡州。　却つて關山を下りて蔡州に入り、
爲買烏犍三百尾。　爲めに買はん烏犍三百尾、

【自注】黃州出水牛。

郝會稽、と、【一一】入蔡州「王註」に、關山則自蔡州所經由來黃州路、先生後有梅花小詩云、半飛飛雪度關山、と、【一二】烏犍　水牛を言ふ、

【題義】黃州に赴かんとする途次、新息を過ぎ、其の同鄕人の任師中に留示するもの、

【詩意】昔年霄て羨む任夫子、羨む意味は新息に卜居して其の居は淮水に臨むと聞くに由る、然るに今日は怪しむ君が容易に故鄕の事を忘却して、此の地稻は熟し魚は肥えて信に淸美であると言ふ、僕が見る所は竹陂には雁起ちて天が爲めに黑い、又桐柏は煙が橫はりて山色が半紫である、知る君が坐ながら兒女輩の爲め困められ、悔ゆらくは先きに歸りて鄕國の淸泚を弄せざるを、君の事を言ふ僕も同じく塵埃中に奔走して早く牧身の法を失つて居る、今次の此の行の如きは蹭蹬尤も自から鄙しむべきを知つて居る、黃州に赴かば身は僧房に寄寓して寺僧の厄介にならんと思ふ、故鄕へ遺る書を附して黃耳を煩はすことを免れない、已往は及ばずと言ふも未來は更に年あり、詔恩を蒙りて田里に歸ることを許さるれば、却つて關山を下りて蔡州に入り、生の爲めに烏犍三百尾を買うて活を計らんと思ふ、

名黃耳、既寄寓京師、久無家問、笑語犬曰、我家絕無書、汝能齎書、取消息否、犬搖尾作聲、機乃爲書、以竹筒盛之、繫其頸、犬時路南走、遂至家、得報還洛、後以爲常、と、【一〇】歸田　柳子厚の詩、皇恩若許歸田去、晚歲當爲鄙夫、

【餘論】紀曰く（以下曉嵐は昇す）竹陂二句寓言、任之獄事、以雁與煙、比小人也、然其言不甚警切、と、往雖以下を評して、此却得體と、余は此の評を善と信ずる、

過淮　淮を過ぐ

朝離新息縣。初亂一水碧。　朝に新息縣を離れ、初めて亂る一水の碧、
暮宿淮南邨。已度千山赤。　暮に宿す淮南の邨、已に度る千山の赤きを、
麝題號古戍。霧雨暗破驛。　麝題古戍に號び、霧雨破驛暗し、
回頭梁楚郊。永與中原隔。　頭を梁楚の郊に回らせば、永く中原と隔つ、
黃州在何許。想像雲夢澤。　黃州は何れの許に在る、想像す雲夢澤、
吾生如寄耳。初不擇所適。　吾が生は寄するが如きのみ、初めは適く所を擇ばず、
但有魚與稻。生理已自畢。　但魚と稻とあらば、生理は已に自から畢る、
獨喜小兒子。少小事安佚。　獨り喜ぶ小兒子、少小安佚を事とし、

相從ふ艱難の中、肝肺鐵石の如し、
便ち應に與に晤語すべし、何ぞ止だ衰疾を寄せん、

【自注】時家在二子由處一。獨與二兒子遇一南來。

【字解】【一】初亂　「尙書」に亂二于河一と、河流を正しく横ぎり渡る、【二】淮南邨　「元和郡縣志」に、淮水自レ西流入、經二新息縣一南去レ縣五里と、【三】千山赤　杜子美の詩、中原杳茫茫と、【四】雲夢澤　今日湖北の江漢道安陸縣に屬す、雲澤と夢澤との二澤の名、方八九百里、總じて之を雲夢と謂ふ、孟浩然の氣蒸雲夢澤は是である、【五】麋鹿　麋は鹿の類、鹿はムササビ、謝元暉の詩、飢鹿此夜啼寄寞疾「公自注」に時家在二子由處一、獨與二兒子遇一南來と、杜子美の詩、渡二渼江渡一身衰疾と、【六】中原　杜子美の詩、中原杳茫茫と、【七】如鐵石　「魏武故事」に、長史王忠、必能勤レ事、心如二鐵石一と、【八】

【詩意】早朝に新息縣を發途して、初めて一水の碧なるを亂る、晩暮に宿する所は淮南の邨である、其の途次已に千山の禿なるを度る、麋鹿の號ぶを聞くは其れは古戍の邊である、霧や雨の爲め破驛は暗い、頭を梁楚の郊に回らして見れば、永く中原と遠隔せることを覺ゆ、我が赴かんとする黃州は果して何れの處である、先づ雲夢澤の狀を想像する、吾が生は寄寓の如きのみである、初めより適く所を擇んでは居らぬ、但生を保つの魚と稻とあらば、生理は已に自から畢る、獨り喜ぶは小兒子、少小の時は安佚を事としたのであるが、長じて我が艱難の中に從うて、肝肺は堅固にして鐵石の如くである、便ち應に之と晤語すべく、何ぞ止だ此の衰疾を勞はるのみではない、

【餘論】紀曰く、沈痛、語不レ在レ深と、

書麐公詩後

麐公詩後に書す

過二加祿鎭南二十五里大許店一。休二馬於逆旅祁宗祥家一。見壁上有二幅紙一。題レ詩云。滿院秋光濃欲レ滴。老僧倚レ杖青松側。只怪高聲問不レ聾。嗔余踏二破蒼苔色一。其後題云。滏水僧寶麐。宗祥謂レ余。此光黃間狂僧也。年百三十。死於熙寧十年。既死。人有二見レ之者一。宗祥言其異事甚多。作二是詩一以識レ之。麐公本名清戒。俗謂二之戒和尙一云。

【訓讀】加祿鎭南二十五里、大許店に過ぐ、馬を逆旅祁宗祥が家に休ふ、壁上を見れば、幅紙あり、詩を題して云ふ、滿院の秋光濃かに滴らんと欲す、老僧杖に倚る青松の側、只怪しむ高聲問ふも聾へず、嗔る余が蒼苔の色を踏破せるをと、其の後に題して云ふ、滏水の僧寶麐と、宗祥余に謂ふ、此れ光黃間の狂僧なり、年百三十、熙寧十年に死す、既に死す、人之を見るもの有り、宗祥其の異事を言ふ甚だ多し、是の詩を作り以て之を識す、麐公本名清戒、俗之を戒和尙と謂ふと云ふ、

麐公昔未レ化。來往淮山曲。
壽逾二兩甲子一。氣壓二諸尊宿一。

麐公は昔未だ化せず、來往す淮山の曲、
壽は兩甲子を逾え、氣は諸尊宿を壓す、

但嗟濁惡世、不受龍象蹴。
我來不及見、悵望空遺躅。
霜顱隱白毫、鎖骨埋青玉。
皆云似達磨、隻履還西竺。
壁間餘清詩、字勢頗拔俗。
爲吟五字偈、一洗凡眼肉。

【字解】〔一〕未化　僧の死を遷化と言ふ、〔二〕草宿　僧の戒德の高きものを言ふ、〔三〕濁惡世　「阿彌陀經」に五濁惡世と、〔四〕龍象　學德の高き僧を龍象と言ふ、「維摩經」に、如龍象蹴踏、非餘所堪と、〔五〕悵望　謝元暉の詩、停驂我悵望と、〔六〕白毫　佛陀が面上眉間の毫髮を言ふ、〔七〕鎖骨　「觀音持驗記」に、觀音大士、昔於陝府、化爲倶女、以救淫逸者、既死埋之、後掘之視、唯金鎖而已と、又「續元怪錄」に、延州有一婦人、頗有姿貌、城市年少、悉與游狎、數年兩歿、瘞道左、大歷中、有胡僧、自西域來、見墓歎禮焚香、人謂曰、此一淫縱女子何敬耶、僧曰、斯乃大聖、慈悲寃擯、世俗之欲、無不狗焉、此卽鎖骨菩薩、乘人開墓視、遍身之骨、鈎結皆如鎖狀、人異之、爲起塔焉、〔八〕達磨　「傳燈錄」に、磨眼已化、葬熊耳山果城、三年後有魏使宋雲、自使西域、回、見達磨於葱嶺、手攜隻履、翩翩獨行、言吾歸西天、雲至、言之孝莊帝、使人發塔開棺、唯隻履在耳と、

【詩意】嘗公が昔し遷化せざる時、淮山の曲に來往すると、其の壽は兩甲子を逾え、氣は諸尊宿を壓服すと、但嗟く濁惡の世、龍象等の蹴躅なぞ受けない、我は公の生前を見るに及ばずして、今は悵望するも空しく遺躅である、霜顱には佛陀の如く白毫あるも隱し、道體は埋葬したるも凡夫の骨ではない、人は皆云ふ達磨大師が隻履を提げて西天に還るに似て居ると、宗祥が家の壁間に清詩を餘すを見れば、字勢は頗る拔俗である、公の爲めに今佛經の五字の頌文を吟誦して、以て凡眼肉を一洗せんとするものである、

【餘論】紀は此の篇を評しない、案ずるに公は僧の七絕を清詩と稱せるが、俗陋極まるものである、轉結二句殊に滑稽の極である、公は諧謔を好むの癖、此の詩に於て遺憾なく發揮せるもの、紀の論せざる所以も、察知するに難くない、

游淨居寺

淨居寺に游ぶ

淨居寺在光山縣南四十里。大蘇山之南。小蘇山之北。寺僧居仁爲余言。齊天保中。僧惠思過此見父老。問其姓。曰蘇氏。又得二山名。乃嘆曰。吾師告我。遇三蘇則住。遂留結菴。而父老竟無有。蓋山神也。其後僧智顗見思於此山。而得法焉。則世所謂思大和尙。智者大師是也。唐神龍中。道岸禪師。始建寺於其地。廣明庚子之亂。寺廢於兵火。至乾興中。乃復。而賜名曰梵天云。

【訓讀】淨居寺は光山縣の南四十里、大蘇山の南、小蘇山の北に在り、寺僧居仁余の爲めに言ふ、齊

の天保中、僧惠思、此を過ぎ父老を見て其の姓を問ふ、曰く蘇氏と、又二山の名を得、乃ち嘆じて曰く、吾師我に告ぐ、三蘇に遇はば則ち住まれと、遂に留まりて菴を結ぶ、而して父老竟に有る無し、蓋し山神なり、其の後僧智顗、思を此の山に見、而して法を得、則ち世に所謂思大和尚、智者大師是なり、唐の神龍中、道𡸁禪師、始めて寺を其の地に建つ、廣明庚子の亂、寺兵火に廢す、乾興中に至り、乃ち復して名を賜ひ梵天と曰ふと云ふ、

【字解】〔一〕光山　光山は今河南省汝陽道の光山縣に在る、一名弋山、山の周圍二十里、大蘇山も小蘇山も、是の支山である、〔二〕齊天保中　北齊の第一主文宣帝洋の年號、〔三〕惠思　北魏李氏の子、齊に入りて惠文に依りて法を受け、後大蘇山に住したるも、兵亂を避けて、去りて南嶽に赴き、是の山に住する十年、陳の大建九年に遷化す、世に思大和尚又は南嶽大師と號す、〔四〕智顗　字は德安、姓は陳氏、年十八、大蘇山に上りて惠思に謁して法を受け、後天台山に入りて、是の山に寂す、世に智者大師と號す、〔五〕唐神龍中　中宗の年號、智者大師寂後百有九年、〔六〕道𡸁　姓は唐氏、世潤川の大族、即ち智者と同郷、後光州に遷り、田家後は會稽の龍興寺に在りて法を說く、寂年は未詳、今此の浮居寺は道𡸁の此の禪師の建立である、要するに天台系の宗派である、

十載遊名山。自製山中衣。
願言畢婚嫁。攜手老翠微。
不悟俗緣在。失身陷危機。
刑名非宿學。陷穽損積威。
十載名山に遊び、自から製す山中の衣、
願うて言に婚嫁を畢へ、手を攜へて翠微に老いんと、
俗緣の在るを悟らず、失身危機に陷る、
刑名は宿學にあらず、陷穽積威を損ず、
遂恐生死隔。永與雲山違。
今日復何日。芒鞵自輕飛。
稽首兩足尊。舉頭雙涕揮。
靈山會未散。八部猶光輝。
願從二聖往。一洗千劫非。
徘徊竹溪月。空翠搖煙霏。
鐘聲自送客。出谷猶依依。
回首吾家山。歲晚將焉歸。
遂に生死の隔てを恐る、永く雲山と違ふ、
今日復た何の日ぞ、芒鞵自から輕飛す、
稽首す兩足尊、頭を擧げて雙涕揮ふ、
靈山の會未だ散せず、八部猶ほ光輝あり、
願はくは二聖に從つて往き、千劫の非を一洗せん、
竹溪の月に徘徊すれば、空翠煙霏搖く、
鐘聲自から客を送り、谷を出でて猶ほ依依たり、
首を吾が家山に回し、歲晚れて將に焉くに歸らんとするや、

【字解】〔一〕婚嫁　白樂天の詩、女嫁男婚了と、〔二〕翠微　杜子美の詩、華亭入翠微と、〔三〕刑名　「史記」に、申不害之學、本於黃老、而主刑名と、法律學を言ふ、〔四〕陷穽　「司馬遷の書」に、猛虎在深山、百獸震恐、及其在檻穽之中、搖尾而求食、積威之漸也と、〔五〕今日　杜子美の詩、今夕復何夕、共此燈燭光と、〔六〕稽首　印度にて敬禮九儀の一か稽首と言ふ、「法華經」に、稽首兩足尊と、佛陀は自身も滿足、他人をも滿足、悲泣と、〔八〕靈山會　荆溪の「法華玄義」に、智者初入大蘇山、謁思大禪師、悟法華三昧、見靈山一會、儼然未散と、〔九〕八部　天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅八を言ふ、部は部屬、皆大神力を有し、變化自在なる神類である、〔一〇〕二聖　南嶽と智者、〔一一〕千劫　儒は千世萬世と言ひ、佛は千劫萬劫と言ふ、〔一二〕空翠　王右丞の詩、空翠濕人衣と、孟浩然の詩、空

翠蓋を庵陰に、

【詩意】十載の間名山に游ぶ、常に自から旅行用としての山中服を裂して居る、願うて言に子女等が婚嫁が畢りしならば、同調の人と手を攜へて翠微に入つて老いんと、而かも猶ほ俗縁の在るを悟らず、俗世の爲めに時を罵り詩を作り失身して危機に陥りし事を招く、檻穽の中に陥りて積威を損ずるに至る、遂に恐る生死相隔て、現世に於て永く雲山と違ふことを、然るに今日は復何の日ぞや、芒鞵を穿ちて此の名山に輕飛を得たるは、無上兩足尊を稽首して、頭を擧げて佛面に對し雙涕を揮ふ、今も猶ほ靈山に佛陀が說法する集會が未散であるかと覺ゆ、隨つて八部衆も光輝が依然としてある、願はくは二聖の敎に從つて往き、千劫に此の身の非なるを一洗せんと思ふ、更に竹溪の月に徘徊すれば、梵林の空翠が煙霏を搖かすを見る、時に鐘聲が聞ゆるは客をして下山せしむる報である、乃ち谷を出でて去るも猶ほ心は依依と後へ殘る、首を回らして大蘇小蘇の二山を見、歲晚れて將に焉くに歸らんとするや、

【餘論】紀曰く、頓挫好、是憂患後語、結得縣邈と、紀評の如く憂患後語は疑ふべくもない、已に乾竺の學に深し、實際の感慨に遇ふ、此の文字ある、然らざるを得ない、世に蘇洵を老蘇と稱し、蘇軾を大蘇と稱し、蘇轍を小蘇と稱し、合して三蘇と號す、南嶽大師が事と合して、公に於て不思議の思ひ起る、亦當然である、結末に吾が家山は眉州の家山を指すにあらずして、大蘇小蘇を指す所、思慕の情察すべきである、

梅花二首

梅花　二首

春來幽谷水潺潺。
的皪梅花草棘間。
一夜東風吹石裂。
半隨飛雪度關山。

春來幽谷水潺潺、
的皪たる梅花草棘の間、

日日東風吹石裂と、【三】鬪山　高適聞笛詩に、借問梅花何處落、風吹一夜滿關山と、

【詩意】春が來りたれば幽谷を流るる水も潺潺と音を爲す、的皪として鮮明なる梅花も草棘の間に開く、一夜東風が石を吹いて裂くの勢である、十分に開きし梅花も半は飛雪と爲つて關山を度る、

〔二〕

何人把酒慰深幽。
開自無聊落更愁。
幸有青溪三百曲。
不辭相送到黃州。

〔二〕

何人か酒を把つて深幽を慰する、
開きても自から無聊落つれば更に愁ふ、
幸に青溪三百曲あり、
辭せず相送りて黃州に到るを、

【詩意】何人か酒を把つて我が深幽を慰する者ぞや、開くも自から無聊である落つれば更に愁と爲る、

【字解】〔一〕的皪　花の鮮明なるを言ふ、〔二〕石裂　「國史補」に李生月夜泛舟、吹笙、俄有客呼船請載、旣至請吹之、其聲淸壯、山石可裂と、獨孤及の文、溪嵌地坼、谷連石裂と、歐陽修の詩に、

【字解】〔一〕無聊　「楚辭」に、思君兮無聊と、〔三〕三百曲　太白の詩、三十六曲水回縈、一谿初入千花明と。

幸に清溪が三百曲も長く續く、此の中を行いて辭せない相送りて黃州に到るを、

【餘論】二絕宋絕として上乘なるもの、紀曰く前首借喩、後首說明、章法不レ苟と、案ずるに二首梅花を借りて、自況を敍するにあれば、解釋も見る人に依つて異なる、余は姑らく當面の解を爲すのみ、

戲作種松

我昔少年日。種レ松滿東岡。
初移一寸根。瑣細如挿秧。
二年黃茅下。一一攢麥芒。
三年出蓬艾。滿山散牛羊。
不レ見十餘年。想作龍蛇長。
夜風波浪碎。朝露珠璣香。
我欲レ食其膏。已伐百本桑。
【自注】煑松脂法用桑柴灰水。
人事多乖迕。神藥竟渺茫。

戲に種松を作る

我昔し少年の日、松を種ゑて東岡に滿つ、
初め一寸の根を移し、瑣細挿秧の如し、
二年黃茅の下、一一麥芒攢まる、
三年蓬艾出で、滿山牛羊散ず、
見ざること十餘年、想ふ龍蛇の長きを作すを、
夜風波浪碎け、朝露珠璣香ばし、
我其の膏を食はんと欲し、已に百本の桑を伐る、
人事多くは乖迕、神藥竟に渺茫、
竭來齊安野。夾レ路須髯蒼。
會開龜蛇窟。不レ惜斤斧瘡。
縱未レ得茯苓。且當レ拾流肪。
釜盎百出入。皎然散飛霜。
槁死三彭仇。澡換五穀腸。
青骨凝綠髓。丹田發幽光。
白髮何足レ道。要使雙瞳方。
却後五百年。騎鶴還故鄉。

【字解】【一】我昔　杜子美の詩、甫昔少年日と、【二】麥芒　芒は麥の尖、針の如き毛、潘安仁の賦に、麥漸漸以擢レ芒と、【三】蓬艾　蓬も艾もヨモギ、【四】波浪碎　松葉が風の爲め動くを言ふ、【五】百本桑　公の自注に煑レ松脂法、用レ桑柴灰水と、【六】蒼　紀曰く蒼當レ作レ創と、【七】龜蛇窟　松脂土に入つて千年、茯苓と爲る、狀龜蛇鳥獸の如きもの良品である、【八】乖迕　杜子美の詩、人事多錯迕と、【九】流肪　「本草」に松脂別名松肪、注云、松節、松心、松枝、在レ土不レ朽、流脂日久、變爲レ琥珀と、【一〇】澡換　「本草」に松脂先須用レ大釜、加レ水置レ甑、白茅藉レ甑底、布レ松脂於上、炊以レ桑薪、候レ松脂盡入レ釜中、乃出レ之投レ於冷水、既凝又蒸、白如レ玉、然後入レ用と、【一一】三彭　彭質と彭踦と彭居と、人の身中に在りて、狀は小兒の如く、須髯ある、人が已に死すれば、此の物鬼と爲る、【一二】丹田　臍より一寸下の所、「黃庭經」に、丹田之中精氣微と、

【題義】松を種ゑて仙法を想ひ、現實の如くに歌はんと、故に戲作と題せるのである、

【詩意】我昔し少年の日、稚松を種ゑて東岡に滿たしめた、初めは一寸の根を移し、瑣細にして宛かも揷秧の如くであつた、二年を經て黃茅の下に達し、一一麥芒を攢むる如く、三年を超せば蓬艾を出づるの大と爲る、滿山に牛羊を散游させるの好きに達す、而して爾後見ざるもの十餘年、想ふに龍蛇の長影を爲し、夜風には謖謖と波浪が碎け、朝露には晶晶と珠璣の香を發すと、然らば我は其の膏を取り食うて、生を養はんと欲し、已に製造の準備に百本の桑を伐る、何ぞ料らん人事は多く乖迕する、神藥を製造すること竟に渺茫と爲る、曾てより此の齊安の野に來りて見れば、雨路を夾んで須髯蒼たり、會ま龜蛇窟を開きて、惜まず斤斧の爲め松が創を受くるを、縱ひ未だ茯苓を得ざるとするも、且當に流肪を拾ひ取ることが出來る、之を製して神藥と爲す法は釜甑を用ひて百回も出入する、其の結果皓然として飛霜を散ずる白色の物が出來る、槁死せる三彭の仇となり、人間五穀の腸を澡換する、青骨が綠髓を凝らして、丹田には幽光を發するに至る、白髮も何ぞ道ふに足らん、後日必ず仙道を成就して、雙瞳をして方形ならしめ、今より後五百年、鶴に騎りて故鄉に還るの自由を得ん、

【餘論】仙家の事を說くを以て解すべく、解すべからざるものあり、紀曰く、緣二是松詩一、故不レ嫌二於章呪氣一、若作二道家詩一、用二此種字句一便可レ厭、雙結完法と、

萬松亭

萬松亭

麻城縣令張毅。植二萬松於道周一。以芘二行者一。且以名二其亭一。去未二十年一而松之存者十不レ及二三四一。傷二來者之不レ嗣一。其意也。故作二是詩一。

【訓讀】麻城縣令張毅、萬松を道周に植ゑ、以て行者を芘ひ、且以て其の亭に名く、去りて未だ十年ならずして、松の存するもの、十が三四に及ばず、來者の其の意を嗣がざるを傷むなり、故に是の詩を作る、

十年栽種百年規。　十年栽種す百年の規、
好德無人助二我儀一。　好德人の我が儀を助くる無し、
縣令若同二倉庾氏一。　縣令若し倉庾氏に同じからば、
亭松應レ長二子孫枝一。　亭松も應に子孫の枝を長ずべし、
天公不レ敕斧斤厄。　天公は敕はず斧斤の厄を、
野火解レ憐氷雪姿。　野火憐むを解す氷雪の姿を、
爲問幾株能合抱。　爲めに問ふ幾株能く合抱、
殷勤記取角弓詩。　殷勤に記取せよ角弓の詩、

【自注】古語云。一年之計。樹レ之以レ穀。十年之計。樹レ之以レ木。百年之計。樹レ之以レ德。

【字解】〔一〕好德　公の自注、一年之計、樹レ之以レ穀、十年之計、樹レ之以レ木、百年之計、樹レ之以レ德と、〔二〕助我儀　「詩」に、我儀圖レ之、愛莫レ助レ之と、〔三〕倉庾氏　「前漢書」に、孝文時、國家無事、爲レ吏者、長二子孫一、居レ官者、以爲レ姓、注倉氏庾氏是也と、〔四〕角弓詩　「左傳昭公二年」に、晉韓宣子來聘、公享レ之、韓子賦二角弓一、既享二享於季氏一、有二嘉樹一焉、宣子譽レ之、武子曰、宿敢不レ封二殖此樹一、以無レ忘二角弓一と、杜子美の詩、更尋嘉樹傳、

不レ忘二角弓詩一と、

【題義】黄州より東北一百七十里の地に麻城縣がある、縣令が萬松を道旁に植ゑて、以て往來人の夏日炎を防ぐに供せるに、十年も經ざるに亭は存するも、松の存するもの少し、乃ち傷んで是の詩を賦されしものである、

【詩意】松を樹ゑしは十年百年と永遠を思へばである、德を好んで多くの人が我が儀を助くる者がない、縣令が若し倉庾氏に同じければ、亭松も應に子孫の枝を長ずるならんと思ふ、然るに天公は救はない斧斤の災厄を蒙るを、野火は唯憐む氷雪の姿を焚くを、爲めに問ふ幾株か能く合抱の木が殘り居るやと、殷勤に記取し玉へ昔し角弓の詩あるを、

【餘論】紀曰く腐氣太甚と、余謂ふ趣旨が首尾貫通して、難解人を惱ます詩に勝ること萬萬、七律の正法として推すべく、後生の學ぶべきものである、

張先生

張先生

先生不レ知二其名一。黄州故縣人。本姓盧。爲二張氏所一レ養。陽狂垢汚。寒暑不レ能侵。常獨行市中。夜或不レ知二其所一レ止。往來者欲レ見レ之。多不レ能レ致。余試使人召レ之。欣然而來。既至立而不レ言。與レ之言不レ應。使二之坐一不レ可。但俯仰熟視傳舍堂中。久之而去。夫執非二傳舍一者。是中竟何有乎。然余以有二思維一心追躡其意。蓋未レ得也。

【訓讀】先生は其の名を知らず、黄州故縣の人、本姓は盧、張氏の養ふ所と爲る、陽狂垢汚、寒暑侵すこと能はず、常に市中に獨行し、夜或は其の止まる所を知らず、往來する者、之を見んと欲するも、多く致すこと能はず、余試みに人をして之を召さしむ、欣然として來る、既に至るも立ちて言はず、之と言ふも應へず、之をして坐せしむるも可かず、但俯仰して傳舍堂中を熟視し、久之して去る、夫れ執か傳舍にあらざるもの、是の中竟に何か有らんや、然して余以て心を維ぎ其の意を追躡するに思ひあるも、蓋し未だ得ざるなり、

熟視空堂竟不レ言。
故應知我未二天全一。
肯來二傳舍一人皆說。
能致二先生一子亦賢。
脫屣不レ妨眠二糞屋一。
流澌爭見浴二冰川一。

空堂を熟視して竟に言はず、「ざるを、
故に應に知るべし我は未だ天全ならー
肯て傳舍に來ると人皆說く、
能く先生を致す子も亦賢なり、
脫屣妨げず糞屋に眠るを、
流澌爭ひ見る冰川に浴するを、

【字解】〔一〕天全　「莊子達生篇」に、全二其性一、養二其氣一、合二其德一、以通二乎物之所一造、若レ是者、其天守全、其神無レ郤と、〔二〕傳舍　「史記」に、沛公至二高陽傳舍一と、宿屋を言ふ、〔三〕能致　「揚子」に、叔孫通、欲レ制二君臣之儀一、徵二先生於齊魯一、所レ不レ能レ致者二人と、〔四〕糞屋　王註堯舜曰、本朝

士廉豈識桃椎妙。　士廉豈識らん桃椎の妙、
妄意稱量未必然。　妄意に稱量する未だ必ずしも然らず、

流ろる騃、「楚辭」に流澌紛分將來下と、「說苑」に、郭忠恕、大寒擊冰而浴と、【六】桃椎　「唐書」に、朱桃椎、益州人、被裘曳索、人莫測其所爲、高士廉爲長吏、備禮以請、降階與之語、不答視而出、士廉拜曰、祭酒其使我以無事治蜀耶、乃簡條目、薄賦斂、州大治と、【七】稱量　「楚辭」に苦稱量之不平兮、

【詩意】先生を招致し來るも空堂の上下を熟視するのみにて何事も言はない、言はない所を考ふれば我が未だ天全を體得せざる人であるを知つて居るのであらう、但し先生が肯て傳舍に來るは不思議であると人が說く、が容易に來らざる先生を招致したる子も亦賢人である、先生は古の偉人の如く世事を脫屣して糞屋中に眠る人である、又流澌を看て冰川に浴する高士である、我は今日の士廉とすれば先生は古の桃椎である、士廉が桃椎の妙を識らんと欲するは、畢竟妄意に稱量するのみ未だ必ずしも然らざるのである、

【餘論】紀曰く五六太俗と、俗の中に味がある、

初到黃州

自笑平生爲口忙。　自から笑ふ平生口の爲めに忙がしきを、
老來事業轉荒唐。　老來事業轉た荒唐、

【字解】【一】事業　王註次公曰、李台瑕、謂韓昭一曰、韓八座事業、如拆護線、無一條長者と、【二】

新信者、得道之異人也、常污塗作狂、盡脫屨而行、夜眠糞屋中、人莫測之、【五】澌澌　冰が解け流ろる皃、

長江繞郭知魚美。　長江郭を繞りて魚の美を知り、
好竹連山覺筍香。　好竹山に連りて筍の香を覺ゆ、
逐客不妨員外置。　逐客は妨げず員外置を、
詩人例作水曹郎。　詩人は例水曹郎と作る、
只慙無補絲毫事。　只慙づ絲毫の事を補ふ無きを、
尙費官家壓酒囊。　尙ほ官家を費して酒囊を壓す、

【自注】檢校官例、折支多得退酒袋。

袋と、他物を以て錢に代ふるを折支と謂ひ、又退酒袋と謂ふ、

【題義】元豐三年二月に年四十五を以て初めて黃州に團練副使と爲りて到る時の作である、

【詩意】自から笑ふ平生生活の爲めに多忙なるを、老來事業の轉た荒唐なるを覺ゆ、黃州の地は長江が一郭を繞りて魚の美なるを知る、好竹は連山に多く筍の香ばしきを覺ゆる、然らば逐客と爲つて員外置たるも妨げる所はない、古より詩人は多く水曹郎と作る、只慙づらくは國家に對し絲毫の事の補ひも無く、徒らに官家の俸錢を費して酒囊を壓することを、

【餘論】起句に爲レ口忙と用ひ、而して魚美、筍香、酒囊、皆口に入るもの、句法として尋常ではあるが、後生は是の句法を知らざるものもある、此等の詩を熟讀するが可い、紀曰く和平と、事の二字あ

員外置　李渤の詩、唯餘員外置、不レ應二列星文一と、左遷せられし者は、皆員外の官に働はるのみ、【三】水曹郎　白樂天の詩、題レ詩寄二與水曹郎一と、杜子美の詩、能詩何水曹、水部郎である、水澤を掌理する官、梁の何遜、唐の張籍、孟賓子皆水部郎である、【四】官家　白樂天の詩、況無二治道術一、坐受二官家祿一と、公の自注に檢校官例、折支多得二退酒の自注に檢校官例、折支多得二退酒

るは例の病である、

陳季常所蓄朱陳邨嫁娶圖二首

陳季常が蓄ふるところの朱陳邨嫁娶の圖　二首

何年顧陸丹青手。
畫作朱陳嫁娶圖。
聞道一邨惟兩姓。
不將門戸買崔盧。

【字解】〔一〕顧陸　晉の顧愷之字は長康、義熙中、畫協を師とし、丹青妙を極む、畫絕、癡絕、才絕を以て三絕の稱がある、宋の陸探微は常に明帝の左右に在りて筆を揮ひ、人物及び山水、獨步と稱せらる、

何の年か顧陸丹青の手、
畫き作す朱陳嫁娶の圖、
聞道く一邨惟兩姓と、
門戸を將て崔盧を買はず、

【注】〔一〕顧陸　晉の顧愷之字は長康、義熙中、畫協を師とし、丹青妙を極む、畫絕、癡絕、才絕を以て三絕の稱がある、宋の陸探微は常に明帝の左右に在りて筆を揮ひ、人物及び山水、獨步と稱せらる、〔二〕朱陳　朱陳邨は徐州豐縣の山中に在り、朱と陳との兩姓のみ、世婚姻を爲して、他姓を交へない、〔三〕買崔盧　「唐書高士廉傳」に、太宗詔士廉等に、刊正姓氏に、撰爲氏族志、太宗曰、我與山東崔盧李鄭、舊既無婚、爲其世代衰微、全無冠蓋、猶自云士大夫、婚姻之間、則多邀錢幣、才識凡下、偃仰自高、販鬻松漬、依託富貴、我不解人間何爲重之、祇緣關東崔盧、唯據河北、梁陳衛、在江南、至今猶以崔盧王謝爲重、又「文中子」に、任蘇王劉崔盧之昏非古也、何以觀譜、唐高士廉傳、太宗以山東士人、尙門閥、嫁娶必多取財、故人謂之賣昏、由是詔士廉、爲氏族志、帝曰、我於崔盧李鄭無婚、今謀士勞臣、何容納貨舊門、向解背賞、買昏爲榮耶、太上立德、其次立功、其次立言、其次有爵、爲公卿大夫、世世不絕、謂之門戸、今皆反之、豈不惑耶と、

【題義】陳季常は自から方山子と號す、陳公弼の子、是の人の蓄藏する朱陳邨嫁娶圖に題せるもの、

【詩意】何れの年にか顧か陸かが丹青の手を揮ひしものぞ、畫き作す朱陳嫁娶の圖を、我は舊くから聞いて居る此の邨は朱と陳との兩姓のみにて、門戸を高めんと金權ある崔盧を買はないと、

〔一〕

我是朱陳舊使君。
【自注】朱陳邨在徐州豐縣。
勸農曾入杏花邨。
而今風物那堪畫。
縣吏催錢夜打門。

【字解】〔一〕舊使君　公曾て徐州の知と爲る、〔二〕杏花邨　朱陳邨の邨邨である、〔三〕催錢　韓退之の詩、門外唯有吏、日來徵租吏索錢と、

我は是朱陳の舊使君、
勸農曾て入る杏花邨、
而今風物那ぞ畫くに堪へん、
縣吏錢を催して夜門を打く、

【詩意】我は朱陳邨の州の舊使君である、農事を勸說して曾て杏花邨まで往いた、而るに只今の風物は那ぞ畫圖と爲すに堪へんや、縣吏が錢租を催促して夜中に門を打くの狀を、

【餘論】公が山邨の詩、無象太平還有象、孤煙起處是人家、而今風物那堪畫、縣吏催錢夜打門、共に是奸黨の詩案と爲るもの、公の苦しめらるるも是が爲め、公の貴きも亦是が爲である、紀曰く、二首皆淺直と、淺直を知りつつ公は作れるものである、杜荀鶴の再經胡城縣一の詩、去歲曾經此縣城、縣民無口不冤聲、今來縣宰加朱紱、便是生靈血染成、公に較ぶれば更に淺直である、

少年時嘗過一邨院。見壁上有詩云。夜涼疑有雨。院靜似無僧。不知何人詩也。宿黃州禪智寺。寺僧皆不在。夜半雨作。偶記此詩。故作一絕。

少年の時嘗て一邨院を過ぐ、壁上を見れば、詩あり云ふ、夜涼しうして雨あるかと疑ひ、院靜かにして僧無きに似たり、何人の詩なるを知らざるなり、黃州の禪智寺に宿す、寺僧皆不在、夜半雨作る、偶ま此の詩を記す、故に一絕を作る、

佛燈漸暗饑鼠出。
山雨忽來修竹鳴。
知是何人舊詩句。
已應知我此時情。

佛燈漸く暗くして饑鼠出で、
山雨忽ち來りて修竹鳴く、
知る是何人の舊詩句、
已に應に我が此の時の情を知るなるべし、

【詩意】佛前の燈火が暗からんとする時飢鼠が出で來る、山雨が來るは修竹の鳴くので判る、曾て讀みし詩句は、何人の作なるかを知らないが、我が今夜此の古寺に宿する情を知つて作りしものかと思はる、

定惠院寓居。月夜偶出　定惠院寓居、月夜偶ま出づ

幽人無事不出門。
偶逐東風轉良夜。
參差玉宇飛木末。
繚繞香煙來月下。
江雲有態清自媚。
竹露無聲浩如瀉。
已驚弱柳萬絲垂。
尚有殘梅一枝亞。
清詩獨吟還自和。
白酒已盡誰能借。
不惜青春忽忽過。
但恐歡意年年謝。
自知醉耳愛松風。

幽人無事門を出でず、
偶ま逐ふ東風の轉た良夜を、
參差として玉宇木末に飛び、
繚繞たる香煙月下に來る、
江雲態あり清くして自から媚び、
竹露聲無く浩として瀉ぐが如し、
已に驚く弱柳の萬絲垂るるを、
尚ほ殘梅一枝の亞ぐあり、
清詩獨吟して還た自から和し、
白酒已に盡きて誰か能く借さん、
惜しまず青春の忽忽過ぐるを、
但恐る歡意年年謝するを、
自から知る醉耳の松風を愛するを、

【字解】【一】良夜　古注に良宵とあり、【二】參差　不齊貌、【三】玉宇　「拾遺記」に瓊樓玉宇と、玉にて飾る屋宇、【四】木末　杜子美の詩、我僑寄木末と、木杪と同じ、【五】繚繞　「張平子南都賦」に、修袖繚繞而滿庭と、【六】弱柳　初春に柳の芽を出したるを言ふ、李太白の詩、河堤弱柳垂金枝と、【七】亞　次ぐと同じ、【八】忽忽　「賈誼惜誓篇」に、歲忽忽而不反と、劉向の「九歎」に、年忽忽而日度と、倏忽である、又ウツカリと日の過ぎ去るを言ふ、【九】愛松風　「南史」に、陶宏景、特愛松風、庭院皆植松、每聞其響、欣然爲樂と、【一〇】浮浮　「毛詩」に、蒸之浮浮と、【一一】炊玉　杜子美の詩、玉粒足炊飯と、【一二】淫淫　李鍾遠

會揀霜林結茅舍。　會ま霜林を揀んで茅舍を結ぶ、
浮浮大甑長炊玉。　浮浮大甑長く玉を炊ぎ、
溜溜小槽如壓蔗。　溜溜小槽蔗を壓するが如し、
飲中眞味老更濃。　飲中の眞味老いて更に濃か、
醉裏狂言醒可怕。　醉裏の狂言醒めて怕るべし、
閉門謝客對妻子。　門を閉ぢ客を謝して妻子に對す、
倒冠落佩從嘲罵。　冠を倒し佩を落して嘲罵に從す、

【題義】黄州の定慧院に寓居中、明月の夜に乘じて出游して作るもの、

【詩意】幽人無事にして寺門を出づることが無い、偶ま東風の轉た良夜を逐うて出づ、參差として玉宇は木末に飛ぶの狀を爲し、繚繞する香煙は月下に散じ來る、江雲は種種變態して清うして且自から媚ぶる如くである、竹露は聲無く浩として瀉ぐが如くである、已に驚く弱柳の條條萬絲垂るるに、其の間に尙ほ殘梅の一枝が開き亞ぐあるを、清詩を獨吟して還た自から之を和す、白酒は已に飲み盡くるも誰か更に一杯を借すものぞ、惜まない青春の忽忽と過ぎ去ることを、但恐る歡意の年年に衰謝することを、自から知る醉耳の松風を愛聽するを、會ま霜林を揀んで茅舍を結ぶは松風の爲めである、大甑の詩、映襯潤澤乖と、水のシブキ、

【二】如壓蔗　「智藏經」に、譬如甘蔗既被壓、已淨無餘味と、

【三】閉門　「史記申公傳」に、公歸魯、終身不出門、復謝絕賓客と、

に浮浮たる氣あるは玉粒を炊ぐのである、小槽に溜溜たるは蔗を壓する爲めである、飲中の眞味は老いて更に濃かなるを喜ぶも、醉裏の狂言は醒後大に怕るるものがある、門を閉ぢて客を謝し但妻子に對するのみなれば怕るる筈がない、冠を倒にし佩を落して妻子等の嘲罵に從すのである、

【餘論】紀曰く第三句參差玉宇飛木末、突出無根、若非題目分明、則上二句、似是舊句矣と、又曰く句句對仗、於後世爲別調、然却是齊梁唐人之舊格と、案ずるに昔年枕山先生が湖山と不忍池に會合して、各の此の詩に次して作り、當時文壇の盛事でありしことを聞く、詩は枕山詩鈔初篇中に在り、

次韻前篇

前篇に次韻す

去年花落在徐州。　去年花落ちて徐州に在り、
對月酣歌美清夜。　月に對して酣歌清夜を美む、
【自注】去年徐州花下對月、與張師厚王子立兄弟飲酒、作蘇字韻詩。
今年黃州見花發。　今年黃州花の發くを見る、
小院閉門風露下。　小院門を閉ぢて風露下る、
萬事如花不可期。　萬事花の如く期すべからず、

【字解】〔一〕徐州　公の自注に去年徐州花下對月、與張師厚、王子立兄弟飲酒、作蘇字韻詩と、
〔二〕清夜　陶淵明の詩、佳人美清夜、連膝曙酣且歌と、〔三〕花發　杜子美の詩、獨樹花發自分明と、
〔四〕巴峽　湖北巴東縣の西二十里に在る、江が巫山より巴東に入るを巴峽と爲す、〔五〕奚口　公自注に

餘年似酒那禁瀉。　餘年酒に似て那ぞ瀉ぐに禁へん、
憶昔扁舟泝巴峽。　憶ふ昔し扁舟巴峽に泝り、
落帆樊口高桅亞。　落帆樊口高桅亞ぐ、
【自注】樊口在黄州南岸。

長江袞袞空自流。　長江袞袞空しく自から流る、
白髮紛紛寧少借。　白髮紛紛寧ろ少くも借さん、
竟無五畝繼沮溺。　竟に五畝の沮溺に繼ぐなし、
空有千篇凌鮑謝。　空しく千篇の鮑謝を凌ぐあり、
至今歸計負雲山。　今に至りて歸計雲山に負く、
未免孤衾眠客舍。　未だ免れず孤衾客舍に眠るを、
少年辛苦眞食蔘。　少年辛苦眞に蔘を食ひ、
老境安閒如啖蔗。　老境安閒蔗を啖ふが如し、
饑寒未至且安居。　饑寒未だ至らず且安居す、
憂患已空猶夢怕。　憂患已に空し猶ほ夢に怕る、

在黄州南岸」と、【六】高桅　韓退之の詩、大帆夜劃窮高桅と、桅は船竿、カヂ、【七】空自流　李太白の詩、日暮長江空自流と、【八】沮溺　長沮と桀溺、【九】鮑謝　鮑照と謝朓、【一〇】食蔘　白樂天の詩、何異食蔘爲、不知苦是苦と、【一一】啖蔗　韓退之の詩、初味猶啖蔗と、【一二】官長罵　杜子美の詩、醉則騎馬歸、頗遭官長罵」と、

穿花踏月飲邨酒。　花を穿ち月を踏み邨酒を飲み、
免醉歸遭官長罵。　醉歸して官長の罵るに遭ふを免る、

【詩意】去年花落ちるの春晩には徐州に在住して、月に對して酣歌して清夜を賞美した、今年は黄州に在住して春初に花の發くのを見る、小院門を閉ぢて風露が自然と下る、萬事花の如く期を定むることが出來ない、我が餘年は酒に似て那ぞ瀉ぐに禁へんや、記憶する昔日扁舟に乘じて巴峽に泝りしことを、帆を樊口に落して高桅が亞ぐ、長江は日夜に袞袞として流れるも、白髮も亦刻刻に紛紛と增して天は人の爲め少しも假借しない、而かも歸らんと思ふに五畝の田を畊せる沮溺程の地を有しない、唯飢を救はざる千篇が鮑謝を凌ぐの概あるのみ、是の故に今に至るまで歸計は雲山に負きつつある、まだ免れぬ旅寓に於て孤眠するを、少年の辛苦は眞に蔘を食ふの苦を嘗める、老境の安閒なることは蔗を啖ふ如く甘い、幸に飢寒が未だ身に至らず且安居する、憂患は已に空と爲るも猶ほ夢に怕るることがある、花を穿ち月を踏んで邨酒を飲み、醉歸するも官長の罵りに遭ふことを免れるを喜ぶ、

【餘論】査初白云ふ、兩篇曲折清眞、自成二風格一、與二定慧院、海棠詩一、各極二其妙一と、紀曰く、清峭不レ減二前篇一と、

安國寺浴

老來百事嬾。身垢猶念浴。　老來百事嬾し、身垢けば猶ほ浴を念ふ、

安國寺に浴す

衰髮不レ到レ耳。尚煩月一沐。
山城足二薪炭一。煙霧蒙二湯谷一。
塵垢能幾何。翛然脫二羈梏一。
披レ衣坐二小閣一。散レ髮臨二修竹一。
心困萬緣空。身安一牀足。
豈惟忘二淨穢一。兼以洗二榮辱一。
默歸毋多談。此理觀要熟。

【字解】〔一〕湯谷 「山海經」に、黑齒國有二湯谷一と、〔二〕塵垢 「莊子達生篇」に、彷彿乎塵垢之外と、〔三〕翛然 「莊子大宗師篇」に、翛然而往、翛然而來と、飛ぶ狀の疾きを言ふ、〔四〕羈梏 束縛する意ではなく、儀裝を解にせざるを言ふ、〔五〕散髮 晉叔夜の詩、采二蘭山阿一、散二髮巖岫一と、〔六〕萬緣空 白樂天の詩、無絲一緣空と、〔七〕一牀足 盧全の詩、四時安理一蒲牀と、〔八〕毋多談 漢楊惲の書、願勉レ毋二多談一と、

【題義】黃州の安國寺に在りて入浴せる詩である、

【詩意】老來百事皆懶い、然れども身に垢が著けば入浴することは念ふ、衰髮が耳の邊までは垂れないが、月一度は之を沐することをする、水を變じて湯と爲す原料は山城に薪炭が十分に在る、乃ち湯を沸かす爲め煙霧の氣が湯谷に蒙蒙とあがる、浴して以て洗ひ去る塵垢は幾何かは知らないが、一洗後は翛然として羈梏を脫するの思ひがある、浴後は衣を披いて小閣に坐し、散髮のままにて修竹に對すれば、心困萬緣一切空と爲る、安身は一牀にて足る、豈惟淨も穢も忘るるのみでない、榮も辱も總て以て忘却する、默歸して多談してはいかぬ、此の一默の理は觀察の要心熟すれば判る、

【餘論】公の作として可も無く不可も無きものに屬す、

安國寺尋春

臥聞百舌呼春風。
起尋花柳郁郁同。
城南古寺修竹合。
小房曲檻敧深紅。
看レ花歎老憶二年少一。
對レ酒思レ家愁老翁。
病眼不レ羞雲母亂。
鬢絲强理茶煙中。

安國寺に春を尋ぬ

臥して聞く百舌の春風に呼ぶを、
起つて花柳を尋ぬれば郁郁同じ、
城南の古寺修竹合し、
小房曲檻敧深紅。
花を看て老を歎じ年少を憶ふ、
酒に對し家を思ひ老翁を愁ふ、
病眼羞ぢず雲母の亂るるに、
鬢絲强理す茶煙の中、

【字解】〔一〕百舌 百舌は一名伯勞、モズ、杜子美の詩、赤葉楓林百舌鳴と、〔二〕花柳 杜子美の詩、步屧隨二春風一、郁郁自花柳と、麴熙の詩、春風太多情、郁郁花柳好と、〔三〕歎老 顧況の詩、拭レ淚看レ花奈二老何一と、歐陽公の詩、種レ花不レ種見女花、老大安能逐二年少一と、〔四〕愁老翁 杜子美の詩、偏動二旅愁一魂二年少一、飲炊二香飯一慰二老翁一と、〔五〕雲母 キララ、本草に雲母片、有二絕大而瑩澈者一、今人或以飾二燈

遙知二月王城外。
玉仙洪福花如海。
薄羅匀霧蓋新妝。
快馬爭風鳴雜珮。
玉川先生眞可憐。
一生耽酒終無錢。
病過春風九十日。
獨抱添丁看花發。

遙かに知る二月王城の外、
玉仙洪福花海の如し、
薄羅匀霧蓋し新妝、
快馬風を爭ひ雜珮鳴る、
玉川先生眞に憐む可し、
一生酒に耽りて終に錢無し、
病過春風九十日、
獨り添丁を抱きて花の發くを看る、

【詩意】臥し乍ら百舌の春風に呼び囀ぐのを聞き、起つて花や柳を尋ぬれば邨邨が皆同じく春を裝うて居る、城南の安國古寺は特に修竹が合圍して、小房も曲檻も修竹の間に花が深紅を敲いてある、是の花を看て忽ち老を歎じ年少の好きを憶ふ、酒に對すれば忽ち家を思ふ念が起りて老翁を愁ふるに至る、病眼は雲母が紛亂すと認めても羞とはしない、鬢絲は强ひて茶煙の中に處理する、是に於て遙かに想ひ知る二月王城の外を、玉仙觀も洪福寺も花が海の如く盛開であらう、之を看んとする兒女等は薄羅が匀しく霧の如く見ゆる新妝を凝らすであらう、又子弟等は快馬を馳せて雜珮を鳴らすの賑やかであらう、玉川先生は獨り唯眞に憐むべく、一生酒に耽りて終に錢無きに至る、病過して春風九十日、獨り添丁を伴ひ抱きて花の發くを淋しく看るのである、

【餘論】紀は臥聞以下の四句を評して起有神致と、又以後半文意推之、題下當有寄某人、或懷某人字と、盧仝を出して結尾を收むる所に據つて案ずれば、紀の言は眞に當る、

寓居定惠院之東。雜花滿山。有海棠一株。土人不知貴也

寓居定惠院の東、雜花山に滿つ、海棠一株あり、土人貴きを知らざるなり

江城地瘴蕃草木。
只有名花苦幽獨。
嫣然一笑竹籬間。
桃李漫山總麤俗。
也知造物有深意。

江城地瘴なるも草木蕃す、
只名花の幽獨に苦むあり、
嫣然一笑す竹籬の間、
桃李漫山總て麤俗、
也知る造物の深意あるを、

古今體詩　寓居定惠院之東雜花滿山有海棠一株土人不知貴也

【字解】【一】蕃草木　「易」に天地變化草木蕃と、【二】幽獨　「楚辭」に、吾生之無樂兮、幽獨處乎山中と、【三】嫣然　「宋玉好色賦」に、東家之子、嫣然一笑と、【四】麤俗　王虛詢の詩、桃李排門是俗材と、【五】佳人　杜子美の詩

故遣佳人在空谷。
自然富貴出天姿。
不待金盤薦華屋。
朱脣得酒暈生臉。
翠袖卷紗紅映肉。
林深霧暗曉光遲。
日暖風輕春睡足。
雨中有淚亦悽愴。
月下無人更清淑。
先生食飽無一事。
散歩逍遙自捫腹。
不問人家與僧舍。
拄杖敲門看修竹。
忽逢絶艷照衰朽。
歎息無言措病目。
陋邦何處得此花。
無乃好事移西蜀。
寸根千里不易致。
銜子飛來定鴻鵠。
天涯流落俱可念。
爲飲一樽歌此曲。
明朝酒醒還獨來。
雪落紛紛那忍觸。

故に佳人をして空谷に在ら遣む、
自然の富貴天姿に出づ、
金盤華屋に薦むるを待たず、
朱脣酒を得て暈臉に生ず、
翠袖紗を卷きて紅肉に映ず、
林深く霧暗くして曉光遲し、
日暖かに風輕くして春睡足る、
雨中涙あり亦悽愴、
月下人無く更に清淑、
先生食飽きて一事無く、
散歩逍遙して自から腹を捫づ、
問はず人家と僧舍とを、
拄杖門を敲き修竹を看る、
忽ち逢ふ絶艷の衰朽を照らすを、
歎息無言病目を措ふ、
陋邦何れの處にか此の花を得る、
乃ち好事の西蜀より移す無からんや、
寸根千里致し易からず、
子を銜んで飛來定んで鴻鵠、
天涯流落俱に念ふ可し、
爲めに一樽を飲んで此の曲を歌ふ、
明朝酒醒め還た獨來せば、
雪落ち紛紛那ぞ觸るるに忍びん、

【題義】寓居せる定惠院の東に種種の花が山に滿ち、中に海棠が一株あるも、其の土地の人は其の貴重なるを知らない、是に於て此の詩を賦して其の貴重なる花なるを知らしむ、

【詩意】江城の地は瘴霧多きも草木は蕃殖する、凡草以外に名花一株が幽獨に苦しむ、而かも嬋然として竹籬の間に一笑する、桃花や李花は滿山なるも總て麤俗極まる、也知る造物者は深意のあることを、是の故に佳人をして此の空谷に在らしめたのである、空谷に居りながら自然の富貴は其の天姿に

絶代有佳人、幽居在空谷」と、【六】富貴　杜子美の詩、一種是春景富貴と、【七】天姿　潘正叔の詩、佳美天姿茂と、【八】朱脣　鮑照の歌、朱脣動、素袖擡、洛陽少童郎邪女と、【九】紅映肉　杜子美の詩、紅顏白面花映肉と、【一〇】春睡足　「明皇雜錄」に、上皇嘗登沈香亭、召妃子、妃子時卯酒未醒、高力士、從侍兒、扶掖而至、上皇笑曰、豈是妃子醉耶、海棠睡未足耳と、【一一】捫腹　「孫眞人養生訣」に、食了行百步、數以手摩肚と、【一二】看修竹　「南史眞桑傳」に、家居負郭、每杖策逍遙、嘗其得意、悠然忘返、郡南一家、頗有竹石、桑率爾步往、亦不通主人、直造竹所、嘯咏自得と、【一三】措　措磨、措擦、目をぬぐふ、【一四】銜子　「施注」に、海棠性便柔弱、蜀之濯錦江爲多者、蓋以鳥雀啄吞其子、隨糞拋墮、往往叢生、節不見之傳記、姑存之以俟知者と、【一五】天涯　白樂天の詩、同是天涯淪落人と、

備へ出してある、金盤に盛りて華屋に薦むるを待つて居ない、朱脣は酒を得て暈が臉に生ずるを見る、又見る翠袖が紗を卷いて紅肉に映ずるを、林深く霧暗くして曉光は遲い、日暖かに風輕うして春睡足るが如くである、雨中に淚あるは悽愴の氣を覺える、月下に人無ければ更に清淑である、先生食飽けば其の餘に一事も無い、山中を散歩逍遙して自から腹を捫でるのみ、行く先は普通の人家も僧寺も擇ばない、拄杖して門を敲き修竹を看る、今忽ち名花の絶艶が我が衰朽の身を照らすに逢うて、歎息して無言病目を揩うて見る、邊陲の邦何れの處にか此の花を得たるや、是は好事の者が西蜀より移したものでなからうか、寸根なるも千里は容易に致すことが出來ない、思ふに子を銜んで飛び來る鴻鵠の致す所であらう、然らば我も鄉里は君と同じければ、天涯流落の感は君の爲めには念はざるを得ない、之が爲めに一樽を飲んで此の歌曲を歌ふ、明朝に達して酒醒めて還た獨來すれば、花が雪の如く散落して紛紛たらんか那ぞ之に觸るるに忍びんや、

【餘論】　此の篇は公が集中の傑作に屬するものにて古今讚評頗る多い、紀は曰く純以二海棠一、自寫二風姿高秀一、興象深微、後半尤煙波跌宕、此種眞非二東坡一不レ能、非二一時興到一亦不レ能と、查初白云ふ、讀二前半一、竟似二海棠曲一矣、妙在二先生食飽一轉、此種詩境、從二少陵樂游園歌一得來、寓二其神理一而化二其畦畛一、故爲二絶唱一と、魏淳甫の「詩人玉屑」に、坡海棠詩、辭格超逸、不二復踏二襲前人一、平生喜爲レ人寫、蓋人間刊レ石者、自有二五六本一云、軾生平得意詩也と、

次韻樂著作野步

老來幾不レ辨二西東一。　老來幾んど西東を辨せず、
秋後霜林且强紅。　秋後の霜林且强紅、
眼暈見レ花眞是病。　眼暈して花を見る眞に是れ病ひ、
耳虛聞レ蟻定非聰。　耳虛にして蟻を聞く定んで聰にあらず
酒醒不レ覺春强半。　酒醒めて覺えず春强半なるを、
睡起常驚日過中。　睡起常に驚く日中を過ぐ、
植レ杖偶逢爲レ黍客。　杖を植てて偶ま逢ふ黍を爲るの客、
披レ衣閒咏舞雩風。　衣を披きて閒に咏ず舞雩の風、
仰看落蘂收二松粉一。　仰ぎ看る落蘂松粉を收むるを、
俯見新芽摘二杞叢一。　俯して見る新芽杞叢を摘むを、
楚雨還昏雲夢澤。　楚雨還た昏し雲夢澤、
吳潮不レ到武昌宮。　吳潮到らず武昌宮、

【自注】黃州對岸武昌縣有二孫權故宮一。

【字解】【一】西東　韓退之の詩、畧不レ知二東西一と、【二】强紅　白樂天の詩、醉顏如二霜葉一、雖レ紅不二是春一と、【三】眼暈　「圓覺經」に、病眼認二空華一と、皮日休の詩、眼暈見二雲母一、耳虛聞二海濤一と、【四】强半　白樂天の詩、百年强半時と、【五】植杖　「論語微子篇」に、丈人植二其杖一而芸、子路拱而立、止二子路一宿、殺レ雞爲レ黍而食レ之と、【六】披衣　「論語先進篇」に、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴二于沂一、風二于舞雩一、詠而歸と、【七】武昌宮　公の自注に、黃州對岸、武昌縣有二孫權宮一と、【八】粗通　粗の字平上の二聲ある、今は上聲にして畧の字の意味に見よ、【九】解紐　印綬を解くこと、

廢興古郡詩無數。　廢興古郡詩無數、
寂寞閒窗易粗通。　寂寞閒窗易粗ぼ通ず、
解組歸來成二老。　組を解きて歸來二老と成り、
風流他日與君同。　風流他日君と同じからん、

【題義】 樂京が著作郎の官の時、野歩の詩を示さる、之に次韻して作るもの、

【詩意】 老來幾んど路の西東を辨せられざるに至る、而かも野に出て見れば秋後の霜林は且強紅なるを覺ゆ、眼が眩暈して花も無きに花と見るは眞に是れ眼病なればである、耳は虚なるに蟻の音がすると聞くは耳が聰でない故である、酒醒めて覺えず春は已に強半であるを、睡より起きて常に驚く日が已に午中を過ぎて居るに、郊に向つて杖を植てて偶ま蓁を爲る者に逢ひ、又衣を披きて閒に詠する舞雩の風に、仰ぎて落葉を看れば松粉は已に收まる、俯して新芽を見て杞叢を摘む、楚雨霏霏として昏きは雲夢澤である、吳潮は湃湃たるも武昌宮に到らない、或は廢或は興の古郡は詩無數である、寂寞たる閒窗に在つては易理に粗ぼ通じて居る、組を解いて歸來せば二老と成りて、風流の游他日君と同じきを期したい、

【餘論】 七言の長律は公が得意にあらざることは集中に其の數の少きにても分る、而かも此の篇の如き、後世作家の亦及ぶべからざるを知る、楚雨吳潮の二句は余は少年時から愛誦せる句である、

二月二十六日。雨中熟睡。至晩強起出門。還作。

此詩意思殊昏昏也。

二月二十六日雨中熟睡し、晩に至りて強ひて起つて門を出で、還た此の詩を作る、意思殊に昏昏なり

卯酒困三杯。午餐便一肉。　卯酒三杯に困み、午餐便ち一肉、
雨聲來不斷。睡味清且熟。　雨聲來りて不斷、睡味清うして且熟す、
昏昏覺還臥。展轉無由足。　昏昏覺めて還た臥し、展轉足るに由なし、
強起出門行。孤夢猶可續。　強ひて起つて門を出でて行く、孤夢猶ほ續ぐ可し、
泥深竹雞語。郁暗鳩婦哭。　泥深くして竹雞語る、郁暗くして鳩婦哭し、
明朝看此詩。睡語應難讀。　明朝此の詩を看れば、睡語應に讀み難かるべし、

【字解】 〔一〕卯酒　白樂天の詩、空腹三杯卯後酒と、朝飲む酒を言ふ、〔二〕午餐　白樂天の詩、午餐何所有、魚肉一兩味と、〔三〕展轉　「毛詩」に展轉反側と、〔四〕竹雞　「洞冥記」に、竹雞似鵠鳩と、ウバシヂと稱する鳥、「遯齋閒覽」に、白蟻聞竹雞之聲、變化爲水、今在處山林多有之、其聲自呼爲泥滑滑者是也と、〔五〕鳩婦哭　歐陽修の詩、鳴鳩逐鳩鳴中林、鳩婦怒啼無好音と、

【詩意】 卯酒は三杯飲んで困迷する、午餐は便ち一菜にて止む、雨聲來りて不斷、睡味は清うして且酣熟する、昏昏として覺めて還た臥す、展轉反側して滿足して眠るに由がない、强ひて起床して門を

出て行くも、孤夢猶は繼續するかと覺ゆ、泥は深く竹雞は鳴いて語るが如く、郁晴くして鳩婦は鳴いて哭する如くである、明朝に及んで此の詩を看れば、睡語なれば恐らくは讀み難いであらう、

雨晴後。步至四望亭下魚池上。遂自乾明寺前東岡上歸。二首

雨晴れて後、步して四望亭下の魚池の上に至り、遂に乾明寺前の東岡上より歸る　二首

雨過浮萍合。蛙聲滿四鄰。
海棠眞一夢。梅子欲嘗新。
拄杖閒挑菜。鞦韆不見人。
殷勤木芍藥。獨自殿餘春。

雨過ぎて浮萍合し、蛙聲四鄰に滿つ、
海棠眞に一夢、梅子新を嘗めんと欲す、
杖を拄いて閒に挑菜、鞦韆人を見ず、
殷勤なるは木芍藥、獨り自から餘春に殿す、

【字解】〔一〕鞦韆　秋千とも書く、俗にブランコと稱する游戲、「古今藝術圖」に鞦韆北方山戎之戲とあれば、戎人より始まりしものである、富豪の庭院には必ず之を設けてある、〔二〕木芍藥　牡丹を唐代稱して言ふ、〔三〕殿餘春　「論語注」に、在軍前一日啓、在後日殿と。

【題義】雨後に四望亭址の下の魚池の上に至り、それより乾明寺前の東岡上に路を取りて歸り、此の間の所見を賦したのである、

【詩意】雨過ぎて後池中の浮萍が一所に合する、而して蛙聲は閙閙と四鄰に滿ちて居る、海棠も已に飛散して一夢と爲る、梅子は漸く熟して嘗めんとする節と爲る、杖を拄いて閒に菜花を挑弄する、鞦韆を認め得たるも人の游戲する者はない、詩人に對して殷勤なるは唯木芍藥である、羣花散ずる後獨り自から餘春を飾りて居る、

〔二〕

高亭廢已久。下有種魚塘。
暮色千山入。春風百草香。
市橋人寂寂。古寺竹蒼蒼。
鶴鶴來何處。號鳴滿夕陽。

〔二〕

高亭廢すること已に久し、下に種魚塘あり、
暮色千山に入り、春風百草香し、
市橋人寂寂、古寺竹蒼蒼、
鶴鶴何れの處より來る、號鳴夕陽に滿つ、

【字解】〔一〕人寂寂　李義山の詩、改成人寂寂と、

【詩意】高亭は廢後已に久しい、廢せずして存するものは亭下の種魚塘である、此の處に到るころは暮色が千山に入るころである、が猶ほ春風は百草の香を吹いて居る、市橋の方を見れば人は寂寂である、古寺を認め得たるも是も竹の蒼蒼たるを見るのみ、時に鶴鶴は何れの處より飛來するやを知らざるが、號鳴する聲が夕陽に滿ちて居る、

【餘論】紀曰く、格在二唐宋之間一、寓二意遲暮一と、第二首を評して此首純乎杜意、結尤似と、木芍藥と

鶴鶴を以て自から況する所、公が高きを見るべく、亦以て尊大なるも知らる、

雨中看牡丹三首

雨中牡丹を看る　三首

(一)
霧雨不成點。映空疑有無。
時於花上見。的皪走明珠。

霧雨點を成さず、空に映じて有無を疑ふ、
時に花上に於て見る、的皪として明珠を走らす、

秀色洗紅粉。暗香生雪膚。
黃昏更蕭瑟。頭重欲相扶。

秀色紅粉を洗ひ、暗香雪膚に生ず、
黃昏更に蕭瑟、頭重くして相扶けんと欲す、

【字解】(一) 霧雨　「古列女傳」陶答子妻云、約謹如霧雨、(二) 映空　杜子美の詩、鳴雨既過漸細微、映空搖颺如絲飛と、(三) 暗香　白樂天の詩、風簾飄暗香と、(四) 頭重　杜牧之の詩、醉頭扶不起、三丈日還高と、

【詩意】絲より細かなる雨は地に點ずることが無い、空に映するも其の影有るや無やを疑ふ程である、時に牡丹花上に於て見れば、花が的皪として明珠を走らす如きを認む、秀色は紅粉を洗ふ如くである、而かも暗香は雪の如き白膚より生ずるを知る、黃昏に到りて更に花容が蕭瑟たるを覺ゆ、頭重くして低るるを相扶けたいと思ふ、

(二)
明日雨當止。晨光在松枝。

明日雨當に止むべし、晨光松枝に在り、

清寒入花骨。肅肅初自持。
午景發濃艶。一笑當及時。
依然暮還斂。亦自惜幽姿。

清寒花骨に入り、肅肅初めて自から持す、
午景濃艶發き、一笑當に時に及ぶべし、
依然暮に還た斂む、亦自から幽姿を惜む、

【字解】(一) 花骨　李賀の詩、天遣裁詩作花骨と、(二) 當及時　古詩に、成歡當及時と、(三) 惜幽姿　謝靈運の詩、惜蚓蚓幽姿と、

【詩意】明日は雨當に止むべしと思ふ、晨光は已に松枝に在るを知る、一味の清寒は花骨に逗入して、肅肅として人の扶けを待たず初めて自から持す、午景に及ぶ頃は愈よ濃艶を發して、嫣然として一笑其の時を得意とするであらう、而かも依然たるは暮に到り還た姿を斂め、亦自から其の幽姿を惜む如くである、

(三)
幽姿不可惜。後日東風起。
酒醒何所見。金粉抱青子。

幽姿惜しむ可からず、後日東風起らん、
酒醒めて何の見る所ぞ、金粉青子を抱く、

千花與百草。共盡無妍鄙。
未忍汚泥沙。牛酥煎落蘂。

千花と百草と、共に盡きて妍鄙無し、
未だ忍びず泥沙に汚さるるに、牛酥落蘂を煎る、

【字解】〔一〕金粉　温庭筠牡丹の詩、曉來金粉覆ニ庭蕚一と、李白の詩、輕如ニ松花落ニ金粉一と、花蕚の粉を言ふ、〔二〕牛酥「馮注」に、王蜀李昊、每ニ牡丹花開一、分ニ遺親友一、以ニ金鳳箋一、成ニ歌詩一以致レ之、文以ニ興平酥一同贈、花謝時煎食レ之と、

【詩意】幽姿は自から惜むは不可、後日には東風が必ず起らん、酒醒めて後何の見る所がある、金粉が已に青子を抱きて居る、意ふに千花も百草も、盛りを過ぎ更に散盡の後は蚨も鄙も共に無い、が其の落片でも泥沙に汚すには忍びない、牛酥を以て其の落蕚を煎じて食はんと思ふ、

【餘論】紀曰く、三首一氣相生、走字似ニ荷葉一、作ニ落又綴一卽得、暗香生、不レ似ニ雨中一、頭重欲ニ相扶一、景眞而語不レ雅と、要するに公として上乘の詩ではない、

次韻樂著作送酒　樂著作が酒を送るに次韻す

少年多病怯杯觴。　少年多病にして杯觴を怯る、
老去方知此味長。　老い去りて方に知る此の味の長きを、
萬斛羈愁都似雪。　萬斛の羈愁都て雪に似たり、
一壺春酒若爲湯。　一壺の春酒は若爲なる湯ぞ、

【字解】〔一〕萬斛「庾開府愁賦」に、唯將ニ一寸心一、貯ニ此萬斛愁一と、〔二〕若爲湯「漢書張宗傳」に、以ニ張將軍之衆一、當ニ百萬之師一、猶ニ以ニ小雪一投ニ沸湯一と、

【詩意】少年の時は多病にて杯觴を見るだにも怯れたが、老境に及んで方に知る此の味の長きことを、縱ひ萬斛の羈愁あるも都て雪の如くに消滅する、ハテ一壺の春酒は若爲なる靈湯であるぞや、

【餘論】紀曰く、太凡鄙と、公の詩は一一來歷ありて、一として空腹より出でしものはない、其の來歷を尊重すれば、凡鄙として排斥することは出來ないのである、

次韻樂著作天慶觀醮　樂著作が天慶觀に醮するに次韻す、

濁世紛紛肯下臨。　濁世紛紛たるに肯て下臨せんや、
夢尋飛步五雲深。　夢に飛步を尋ぬれば五雲深し、
無因上到通明殿。　因無し通明殿に上到するに、
只許微聞玉佩音。　只微しく玉佩の音を聞か許む、

【字解】〔一〕飛步　郭璞の詩、飛步登ニ玉闕一と、〔二〕五雲　五色の雲、「周禮」に、保章氏以ニ五雲之物一、辨ニ吉凶水旱降豐荒之祲象一と、今の句は天仙五雲の坐を言ふ、〔三〕通明殿　王欽若の「胡翠保德傳」に、建隆之初、鳳翔張守眞、游ニ終南山一、聞ニ空中有レ召レ之者一、解衣清徹、守眞悚聽、數里語云、汝若先行、吾卽在レ後、守眞莫レ測、既還レ家、又聞ニ於室中一曰、吾是玉帝輔神、受レ命衛レ時、乘レ龍降レ世、一日守眞、朝禮ニ玉皇大殿一、觀ニ其額一、曰ニ通明殿一、不レ曉ニ其旨一、因焚レ香告曰、通明之設、寓所レ未レ曉、敢祈ニ眞教一、眞君曰、上帝在ニ無上天一、爲ニ諸天之尊一、萬象羣仙、無ニ不レ臣者一、常升ニ金殿一、殿之光明、照ニ於帝身一、身之光明、照ニ於金殿一、光明通徹、無レ所レ不レ照、故曰ニ通明殿一、諸天朝謁、仰觀ニ其殿一、見レ在ニ光明中一と、

【題義】樂著作が天慶觀に謁して壇を設けて醮禳せる詩に次韻して作る、

【詩意】濁世紛紛として清澄ならざるに天帝は何ぞ下界に降臨せんや、夢に天帝の飛步を尋ぬれば唯五雲が深く鎖して居る、乃ち凡人は通明殿に上到するに術の因るべきものが無い、只微しく殿閣の玉珮の音を聞かしむるのみである、

王齊萬秀才寓居武昌縣劉郎洑正與伍洲相對伍子胥奔吳所從渡江也

王齊萬秀才、武昌縣劉郎洑に寓居す、正に伍洲と相對す、伍子胥吳に奔り、從つて江を渡る所なり

君家稻田冠西蜀。
君が家の稻田西蜀に冠たり、

搗玉揚珠三萬斛。
玉を搗き珠を揚ぐ三萬斛、

塞江流柿起書樓。
塞江流柿に書樓を起て、

碧瓦朱欄照山谷。
碧瓦朱欄山谷を照らす、

傾家取樂不論命。
傾家樂を取り命を論せず、

散盡黃金如轉燭。
黃金を散盡すること轉燭の如し、

唯餘舊書一百車。
唯餘す舊書一百車、

方舟載入荆江曲。
方舟載せて荆江の曲に入る、

江上青山亦何有。
江上の青山亦何か有る、

伍洲遙望劉郎藪。
伍洲遙かに望む劉郎藪、

【字解】【一】搗玉「蘇融海賦」に、搗レ琢起レ玉と、【二】流柿「晉王濬傳」に、武帝謀レ伐レ吳、濬造レ船於蜀、木柿蔽レ江而下と、【三】碧瓦「梁元帝纂要者の詩、鳴鐘浮碧瓦、灣日度朱欄」と、【四】傾家「陶淵明の詩、傾家持作レ樂、竟此歲月駛と、【五】散盡「李白の詩、黃金散盡還復來と、【六】轉燭「杜子美の詩、萬事如轉燭」と、【七】方舟「莊子山木篇」に、方舟而濟於河」と、【八】壓私酒「壓は壓搾にて、オサヘシボルのである、太白の詩、吳姬壓レ酒喚客嘗と、【九】飲酒「杜子美の詩、何時一尊酒、重與細論文と、【一〇】仲謀「吳主孫權字は仲謀、【一一】公瑾「周瑾字は公瑾、【一二】一酹「酹は酒を地に沃ぎて神を祭る、【一三】英烈君「公の自注、杭州伍子胥廟、封英烈王」と、

明朝寒食當過君。
明朝寒食當に君に過ぐべし、

請殺耕牛壓私酒。
請ふ耕牛を殺して私酒を壓し、

與君飲酒細論文。
君と飲酒細かに文を論じ、

酒酣訪古江之濆。
酒酣にして古を訪はん江の濆、

仲謀公瑾不須弔。
仲謀公瑾弔するを須ひず、

一酹波神英烈君。
一に波神英烈君に酹せん、

【自注】杭州伍子胥廟封英烈王。

【題義】王齊萬字は文甫、嘉州の人、今は武昌縣の劉郎洑に寓居する、其の劉郎洑は孫權が劉玄德を迎へし地、其の地は春秋の伍子胥が吳に奔らんと欲して、此に來り漁父の爲め船底に隱されて渡りし所である、

【詩意】君が家は稻田を多く所有して西蜀第一であつた、乃ち玉を搗き珠を揚げる三萬斛の巨富である、其の富力を以て江を塞ぐほど木柿を流して以て書樓を起つ、樓の碧瓦朱欄は山谷を照らすの勢である、此の如く一家を傾けて樂を取り命なぞを論せない、黃金を散盡すること輕輕轉燭の如く思ふ、唯餘す所は其の舊藏書が一百車程ある、是の書物を方舟に載せて荆江の曲に入り來る、荆江の上の青山は亦何か有るぞや、伍洲より遙かに望むは是れ劉郎藪である、幸に明日は恰も寒食の節に當りて君

が家を訪ふべしと思ふ、請ふ耕牛を殺して家造の酒を壓搾し玉へ、君と酒を飲みながら細かに文を論せんと思ふ、而して酒が丁度よい時分に江濆に古蹟を訪はん、仲謀や公瑾の靈は弔する必要は無い、唯一に波神である英烈君を酹する、

【餘論】紀曰く、不レ論レ命三字太重、殺二耕牛一語屢見、究非二情事一、結句寄慨、徒取二忠而見レ謗耳、其實無レ味と、公は佛教の慈悲を能く知る人、而かも往往に殺牛の語を見る、紀の非二情事一と評するは洵に然るもの、但首尾中間と次第順序整然として意味一貫せるは取る可きである、

杜沂游武昌以酴醾花菩薩泉見餉二首

杜沂、武昌に游び、酴醾花菩薩泉を以て餉らる　二首

酴醾不レ爭レ春。寂寞開最晚。　酴醾春を爭はず、寂寞として開くこと最も晚し、
青蛟走二玉骨一。羽蓋蒙二珠幰一。　青蛟玉骨を走らし、羽蓋珠幰を蒙る、
不レ妝艷已絕。無レ風香自遠。　妝はざるも艷已に絕、風無きも香自から遠し、
淒涼吳宮闕。【自注】武昌有二孫權故宮苑一。　淒涼たり吳の宮闕、
紅粉埋二故苑一。　紅粉故苑を埋む、
至レ今微月夜。笙簫來二翠巘一。　今に至るまで微月の夜、笙簫翠巘より來る、
餘妍入二此花一。千載尙淸婉。　餘妍此の花に入り、千載尙ほ淸婉、
怪君呼不レ歸。定爲二花所挽一。　怪しむ君が呼べども歸らず、定んで花の挽く所と爲らん、
昨宵雷雨惡。花盡君應レ返。　昨宵雷雨惡し、花盡くれば君應に返るべし、

【字解】【一】酴醾　酒葉灌木、蔓生にして高さ四五尺、夏初花開く、色酴醾酒に似たるを以て名づく、【二】羽蓋「蟲平子東京賦」に、羽蓋蔚蔚と、【三】不妝　唐太宗の詩、不レ妝空散レ粉と、【四】無風　杜子美の詩、無レ風雲出レ塞と、【五】淒涼　公の自注に、武昌有二孫權故宮苑一と、【六】翠巘「閑見後錄」に、層巒翠巘、效二奇於前一と、翠色の奇巘を言ふ、【七】淸婉「毛詩」に、有二美一人一、淸揚婉兮と、

【題義】杜沂が武昌に游び、武昌にて得たる酴醾花と菩薩泉の水を餉られたるに對し謝詩を作れるもの、

【詩意】酴醾花は多くの花と春を爭はない、是の故に開くこと最も晚い、其の樹の蔓は青蛟の如く長く且玉骨を走らす狀である、而して羽蓋は珠幰を蒙るが如くである、特に妝はざるも艷は已に絕世である、別に風は無くとも香は自から遠くへ達する、淒涼たるは吳の宮闕の址である、三千の紅粉も故苑に埋めてある、今に至るまで微月の夜は、笙や簫を吹く音が翠巘より來るを聞く、其の紅粉の餘妍が此の花に入る故に、千載尙ほ淸婉なるのである、怪しむ杜君の呼べども歸らざるは、定んで此の花の爲め袖を挽かるる爲めであらう、昨宵は雷雨が惡かつた、花が飛び盡くるは必定、然らば君は返るであらう、

〔一〕

君言西山頂。自古流白泉。
上爲千牛乳。下有萬石鉛。
不愧惠山味。但無陸子賢。
願君揚其名。庶託文字傳。
寒泉比吉士。清濁在其源。
不食我心惻。於泉非所患。
嗟我本何用。虛名空自纏。
不見子柳子。餘愚谿山。

〔二〕

君は言ふ西山の頂、古より白泉流るると、
上は千牛乳爲り、下には萬石鉛あり、
惠山の味に愧ぢざるも、但陸子の賢無し、
願はくは君其の名を揚げ、庶ふ文字に託して傳へよ、
寒泉は吉士に比す、清濁其の源に在り、
食はざれば我が心惻む、泉に於て患ふる所にあらず、
嗟我本と何の用ぞ、虛名空しく自から纏ふ、
見ずや子柳子、餘愚谿山を汚すを、

【字解】〔一〕西山「名勝志」に、西山卽樊山、在武昌西三里、孫權嘗取此山、見一姥曰、我樊噲母也、魏將伐吳、嘗助一臂、後果有赤壁之捷、因立廟祀之、以名其山、と、〔二〕陸子賢「陸羽傳」に、天下水味、以惠山泉爲第二、と、〔三〕寒泉「毛詩」に、爰有寒泉、在浚之下、と、〔四〕不食「周易井卦」に、井渫不食、爲我心惻、と、〔五〕子柳子　柳子厚なるや、別人なるや分明でない、施德初の注に、柳子厚、愚溪詩序、山水之奇、以余故、咸以愚辱焉、愚溪對溪之神、夜見夢曰、子幸擇而居乎、而辱以無實之名、柳子對曰、汝胡不呼、今之聰明皎厲、掉天子有司之柄者、使一經於汝、而惟我獨處、是則汝之實也、神曰、子之愚、何如而可以及、我、柳子曰、汝欲窮我之愚說耶、雖汝之所欲往、不足以申吾喙、溺汝之所欲浸、不足以潤吾翰、願以是汚汝可乎、溪神嘆曰、嘻有餘矣、是及我也、と、余柳子厚の愚溪序を讀む、施德初擧ぐるものと全く異なる、姑らく記して一說に備ふるのみ、

【詩意】君は言ふ西山の頂上は、古來より白泉流るると、上は千牛の乳色と爲つて、下は萬石の鉛ありと、泉の味は惠山の泉味に愧ぢざるも、但人は陸子の賢無きを如何せんや、願はくは杜君よ君は其の名を揚げて、白泉を賦する文字に託して名を後世に傳へ玉へ、寒泉を以て吉士に比して言へば、清も濁も皆其の源に在る、食はざるときは我が心惻む、寒泉に於ては何等別に患ふる所は無い、嗟我は本と何の用を爲す者である、虛空のみ空しく自から纏うて居るのみ、君も見ずや彼の子柳子の言を、我が餘愚は畢竟谿山を汚すに過ぎない、

【餘論】紀曰く、移空作、有二東坡慣法一、至今十字可レ刪、餘姸以下を評して趁レ手生レ情、借作二綰結一、用筆靈便之至と、又曰く、一首以二幻語一生レ波、一首以二議論一見レ意、章法不レ苟と、今案ずるに至今の十字餘韻あるが如くにして、又聊か蛇足の感もある、紀評の如く刪去して更に佳なるを覺ゆ、

陳季常自岐亭見訪郡中及舊州諸豪爭欲邀致之戲作陳孟公詩一首

陳季常、岐亭より訪はる、郡中及び舊州の諸豪、爭うて之を邀致せんと欲す、
戲れに陳孟公の詩を作る　一首

孟公好飲寧論斗。　孟公飲を好み寧ろ斗を論せんや、

〔一〕孟公　漢陳遵、字

醉後關門防客走。
不妨閒過左阿君。
百謫終爲賢太守。
老居閭里自浮沈。
笑問伯松何苦心。
忽然載酒從陋巷。
爲愛揚雄作酒箴。
長安富兒求一過。
千金壽君君笑唾。
汝家安得客孟公。
從來只識陳驚坐。

醉後關門客の走るを防ぐ、
妨げず閒過す左阿君、
百謫終に賢太守と爲る、
閭里に老居して自から浮沈、
笑つて問ふ伯松何の苦心ぞ、
忽然酒を載せて陋巷に從ふ、
爲に愛す揚雄が酒箴を作るを、
長安の富兒一過を求む、
千金君を壽するも君笑唾、
汝が家安んぞ得ん孟公を客とするを、
從來只識る陳驚坐、

而我放意自恣、浮沈俗間、官僭功名、不減於子、而差獨樂、顧不優邪、練曰、人各有性、長短自裁、子欲爲我亦不能、吾而效之、亦敗矣、雖然學我者易、持、效子者難矣、【四】揚雄　王梅谿曰、揚雄作酒箴、以諷諫成帝、事具在選傳、其中云、酒何過乎、遂大喜、謂張練曰、吾與爾輩是矣、【五】千金　「曹植樂府」に、王孫千金壽と、【六】笑唾　劉叉の詩、玉石共笑唾、【七】孟公、性好客、每會飲、取客車轄投井中、雖有急不得去、【八】左阿君　「前漢書」陳遵爲河南太守、弟級爲荊州牧、當之官、俱過長安富人故淮陽王外家左氏、飲食作樂、司直陳崇、劾奏陳遵過京師左君、置酒歌謠、起舞跳梁、顧仆坐上、免歸、【九】百謫　「前漢書」京帝末、遵入公府、日出醉歸、曹事數廢、西曹以故事、遵之侍曹、輒詣寺舍、白遵曰、陳卿今日以其事、遵曰、滿百乃相聞故事、有百適者斥、滿百、西曹請斥、大司徒馬宮重遵、謂西曹、此人大度士、奈何以小文責之、遵少與張練伯松、相親友、嘗謂練曰、足下諷誦經書、苦身自約、不敢恣跌、【十】浮沈　「漢書」に、遵少與陳驚坐、遵所到衣冠懷之、唯恐在後、時列侯有與遵同姓字者、每至人門曰、陳孟公、坐中莫不震動、既至而非、因號其人曰陳驚坐、と、

【題義】陳季常が岐亭より來りて訪はる、季常が此の郡中に至ると聞き傳へて、我れ我れもと之を招飲せんと爲たは、宛かも漢の陳孟公の事に似たるを以て、戲れに季常を以て今日の孟公と見做して此の詩を作りしものである、

【詩意】孟公は自から酒を飲み亦人にも飲まして升斗など論じない、而かも客の歸り去るを嫌うて之が車轄を投ずるに至る、又酒を飲ます家なら寡婦でも人の細君の家でも關はない、官吏の紀律に背くからとて百謫せらるるも終に賢太守の名を墜さない、老いて閭里に居るも自から浮沈の理を知つて居る、反對にクヨクヨして居る者に問ふ何の爲め苦心するぞと、時あり忽然と酒を攜へて陋巷に從ひ、爲めに愛する揚雄が酒箴を作りて長上を戒むるを、長安の富兒が君の來駕を求めて一過するも、千金の高禮も受けずに君は笑唾する、汝が家は安んぞ孟公を客とすることを得よう、孟公以外の陳驚坐でも招けばそれでよい、

【餘論】紀曰く、太涉輕薄、便非詩品、と、學力博大なるが故に、牛溲馬勃、敗鼓之皮、一として詩に入れざるものはない、是の故に動もすれば輕薄に涉り、詩品を損ずること公の常、公が詩を讀む者は細心に注意すべき所である、

遊武昌寒溪西山寺

連山蟠武昌。翠木蔚樊口。
我來已百日。欲濟空搔首。
坐看鷗鳥沒。夢逐麞麞走。
今朝横江來。一葦寄衰朽。
高談破巨浪。飛屨輕重阜。
去人曾幾何。絶壁寒溪吼。
風泉兩部樂。松竹三益友。
徐行欣有得。芝朮在蓬莠。
西上九曲亭。衆山皆培塿。
却看江北路。雲水渺何有。
離離見吳宮。莽莽眞楚藪。
空傳孫郎石。無復陶公柳。
爾來風流人。唯有漫浪叟。
買田吾已決。乳水況宜酒。
所須修竹林。深處安井臼。
相將踏勝絶。更裹三日糗。

武昌寒溪の西山寺に遊ぶ

連山武昌に蟠し、翠木樊口に蔚たり、
我來りて已に百日、濟らんと欲して空しく首を搔く、
坐して看る鷗鳥の沒するを、夢は麞麞を逐うて走る
今朝横江來、一葦衰朽を寄す、
高談巨浪を破り、飛屨重阜を輕んず、
去人曾て幾何ぞ、絶壁寒溪吼ゆ、
風泉兩部樂、松竹三益友、
徐行して得るあるを欣ぶ、芝朮蓬莠に在り、
西九曲亭に上れば、衆山皆培塿、
却つて江北の路を看れば、雲水渺として何か有る、
離離として吳宮を見る、莽莽として眞に楚藪、
空しく傳ふ孫郎が石、復た陶公の柳無し、
爾來風流の人、唯漫浪の叟あり、
買田吾已に決す、乳水況んや酒に宜しきをや、
所須の修竹林、深處に井臼を安んず、
相將に勝絶を踏み、更に三日の糗を裹まん、

【字解】〔一〕連山　杜子美の詩、連山抱ニ西南一と、〔二〕樊口　前に辨ず、〔三〕搔首　「詩」に、愛而不レ見、搔レ首踟躕と、氣が落ちつかざる時、又愁がある場合、〔四〕鷗鳥沒　杜牧之の詩、坐愛群鳥沒と、〔五〕麞麞　クジカ、性臆病、己が影水に映ずるを見て走ると云ふ、〔六〕一葦　「詩」に、誰謂ニ河廣一、一葦杭レ之と、〔七〕兩部　「南史」に、孔珪、字德璋、不レ樂ニ世務一、門庭之内、草萊不レ翦、中有ニ蛙鳴一、或問レ之曰、欲レ爲ニ陳蕃一乎、珪笑答曰、我以レ此當ニ兩部鼓吹一、何必效レ蕃、王晏嘗ニ鼓吹一候レ之、聞ニ蛙鳴一曰、殊聒ニ人耳一、珪曰、我聽ニ鼓吹一、殆不レ及レ此、晏有ニ慚色一と、〔八〕三益友　「論語季子篇」に、益者三友、損者三友、友レ直、友レ諒、友ニ多聞一益矣と、白樂天の北窗三友詩、三友者爲レ誰、琴韻飄颻レ外、酒興氤氳レ中、詩聯相引、復遷無ニ已時一と、松竹梅を歲寒三友と稱す、公別に梅竹石を三友と稱せる畫贊がある、〔九〕有得　柳子厚の詩、始至若レ有レ得と、〔一〇〕芝朮　靈芝と蒼朮、〔一一〕蓬莠　蓬蒿と藜莠、〔一二〕九曲亭　子由が「九曲亭記」に、子瞻遷ニ於齊安一、齊安無ニ名山一、兩江之南、武柏之間、平陽九曲、而獲ニ少平一、有ニ廢亭一焉、其遺址甚狹、不レ足ニ以席ニ衆客一、子瞻與レ客入レ山、相與營レ之、亭成而西山之勝始具と、〔一三〕培塿　杜子美の詩、高山之外皆培塿と、小阜を培塿と謂ふ、〔一四〕吳宮　「名勝志」に、吳王避暑宮、在ニ寒溪上一、今圓通閣是也と、〔一五〕莽莽　「離騷」に、孟夏兮草木莽莽と、〔一六〕孫郎石　「三國志孫策傳」に、袁術嘗嘆曰、使ニ術有レ子如ニ孫郎一、死復何恨と、〔一七〕陶公柳　「晉書陶侃傳」に、侃鎮ニ武昌一、性纎密好レ問、顧類ニ趙廣漢一、嘗課ニ諸營一種レ柳、都尉夏施、盜ニ官柳一植ニ之於己門一、侃後見、駐レ車問曰、此是武昌西門前柳、何因盜來此種、施慙怖謝レ罪と、〔一八〕風流人　「北史」に、王昕母崔氏、生ニ九子一、皆風流醞藉と、〔一九〕浸浪叟　「唐元結傳」に、自稱ニ浪士一と、〔二〇〕乳水　乳泉なり、〔二一〕糗　「尚書」に、糗乃糗糧と、唐韻に乾飯屑と、イリゴメ、

【題義】武昌縣の寒溪に在る西山寺に游び其の風景を敍して作る、

【詩意】連山が高低武昌に至りて蟠屈する、翠木は樊口に當りて蔚薈する、我は此の樊口に來りて已に百日、濟らんと欲して濟らず空しく首を搔く、何の爲す所もなく鷗鳥の沒するを看るのみ、今朝始めて江を横ぎり來りて、一葦の小舟に此の衰朽の身を寄託する、偶ま豪氣を發して高談巨浪を破り、又飛樓層重の高阜を輕んずる、此の處を去りし人は曾て幾何かありしぞ、絶壁の下寒溪が吼ゆる如きを聞く、それは風泉兩部樂である、松竹も亦益友である、徐徐として行き心に何物か得る有るを欣ぶ、芝朮の如き芳艸が蓬蒡の如き臭艸の中に交りてある、西の方九曲亭に上りて看れば、衆山皆培塿の看がある、却つて來時の江北の路を俯看すれば、雲水渺渺中に何か有るぞ、離離として吳の宮址を見る、莽莽たるものは眞に楚藪である、終古に空しく傳ふるは孫郎石なるも、千秋復た陶公柳は無い、爾來風流人は少く、今日一人漫浪たる此の詩叟あるのみ、田を買うて棲隱の計吾は已に決して居る、乳泉況んや酒に宜しきをや、而して經營せんとする所は修竹林を處理して、其の深處に井臼を置安することである、同調人と相將に此の勝絶の地を踏破するに、更に三日を支へる糗糧を裹まんと思ふ、

【餘論】紀曰く、平敍而自然清脫、又結末を評して宕週一層作レ結、便不二板滯一と、後世山水を記する者、宜しく法と爲すべきである、

西山戲題武昌王居士

西山戲れに武昌の王居士に題す

子往在武昌西山九曲亭上有題一句云元鴻横號黃槲峴九曲亭卽吳王峴山一山皆槲葉其旁卽元結陂湖也荷花極盛因爲對云皆鶴下浴紅荷湖座客皆笑同請賦此詩

【調讀】予往きに武昌の西山九曲亭上に在り、一句を題するあり、云ふ、元鴻横號す黃槲峴、九曲亭は卽ち吳王の峴山、一山皆槲葉、其の旁は卽ち元結陂湖なり、荷花極めて盛ん、因つて對を爲りて云ふ、皆鶴下りて浴す紅荷湖と、座客皆笑ふ、同じく此の詩を賦せんと請ふ、

江干高居堅關扃。
犍耕躬稼角挂經。
篙竿繫舸菰茭隔。
笳鼓過軍雞狗驚。
解襟顧景各箕踞。
擊劍賡歌幾舉觥。
荆笄供膾愧攪聒。
乾鍋更戛甘瓜羹。

江干の高居堅く扃を關す、
犍耕躬稼角に經を挂く、
篙竿舸を繫ぎ菰茭隔り、
笳鼓軍を過ぎ雞狗驚く、
襟を解き景を顧みて各の箕踞し、
劍を擊つて賡歌幾たびか觥を舉ぐ、
荆笄供膾愧攪聒を愧づるも、
乾鍋更戛瓜羹を甘しとす、

【字解】〔一〕江干　水涯と同じ、江畔を言ふ、〔二〕角挂經　「虞兒寬傳」に、帶レ經而鋤と、〔三〕菰茭　菰はマコモ、茭はウマセリ、〔四〕雞狗驚　杜子美の詩、殺雞到二雞狗一と、〔五〕箕踞　「史記刺客傳」に、倚レ柱而笑、箕踞以罵と、兩足を出して坐る形が箕に似てゐる、〔六〕擊劍　司馬相如傳の語、〔七〕賡歌　書經の語、〔八〕荆笄　荆叙と同じ、愚妻である、〔九〕攪聒　攪攪聒聒、やかまし、

【題義】西山に於て武昌の王居士に戲れて題して作れるもの、戯に作れる句に元、卽ち黒と黄とがあり、後に荷花を見て、皓と紅との皆色に關する字を用ひしより、座客が皆笑うたのである、

【詩意】江干に臨んで建てる高居は堅く扃扉を關してある、察するに雙牛を引いて耕し躬から稼して牛角に挂經するのであらう、江中を看れば鎖竿に舸を繫いで菰茭を隔つてある、笳鼓の聲は軍が定んで過ぎたのであらう雞狗が皆驚く、煩襟を解いて景を顧みつつ各の箕踞して休息する、又劍を擊つて互に庶歌しつつ幾たびか酒觥を擧ぐる、荆笄が馳走する爲め腩を料理するは攪聒を愧ぢざるを得ない、乾鍋が更憂として出來揚がりしものは瓜蕎の疎末のもの之を甘しとする、

【餘論】紀曰く、此種不レ宜レ入レ集、不レ得レ以二王融一藉口、王融詩、先不レ應レ入レ集也、皮陸紛紛、更屬二雅人所レ弗レ道と、「漫叟詩話」に、東坡作二吃語詩一、山谷亦有二戲題詩一、二老亦作二詩戲一耶と、吃はドモリ、「韓非傳」に、爲レ人口吃、不レ能二道說一とありて、要するに次第順序が整然とせず、言ふ所何事たるを解せざるに至る、所謂此等の詩を吃語體と稱するもの、紀曉嵐が雅人所レ弗レ道と評したるは當る、此の詩の如き扃も經も九青なれば八庚に通用することは出來ない、公の集より除き去るべきものである、

武昌銅劍歌

武昌銅劍の歌

供奉官鄭文、嘗レ官レ於武昌。江岸裂出二古銅劍一。文得レ之以遺余。冶鑄精巧。非二鍛冶所レ成者一。

【訓讀】供奉官鄭文、嘗て武昌に官す、江岸裂けて古銅劍を出す、文、之を得て以て余に遺る、冶鑄精巧、鍛冶の成す所のものにあらず、

雨餘江清風卷レ沙。
雷公蹠雲捕二黃蛇一。
蛇行二空中一如二枉矢一。
電光煜煜燒二蛇尾一。
或投以塊鏗有レ聲。
雷飛上レ天蛇入レ水。
水上青山如削鐵。
神物欲レ出山自裂。
細看兩脅生二碧花一。
猶是西江老蛟血。

雨餘江清うして風沙を卷く、
雷公雲を蹠んで黃蛇を捕ふ、
蛇は空中を行く枉矢の如く、
電光煜煜蛇尾を燒く、
或は投ずるに塊を以てすれば鏗として聲あり、
雷飛んで天に上り蛇は水に入る、
水上の青山鐵を削るが如し、
神物出でんと欲して山自から裂く、
兩脅を細看すれば碧花を生ず、
猶ほ是れ西江老蛟の血、

【字解】〔一〕雷公　王梅溪曰く、唐開元末、太原武勝之、爲二宣州司士知二靜江軍事一、忽然獲中見レ雷公擲二微雲一、逐二小黃蛇一、盤旋網海上、靜江之夫、戲以レ石投レ之、中レ蛇鏗然作二金聲一、雷公飛去、使二人往視一之、得二一銅劍一、有レ文、曰二許旌陽斬蛟第三劍一云と、〔二〕枉矢　枉は枉屈、まがる、〔三〕蛟蛇尾　「封氏聞見記」に、士人登第、必展二歡宴一、謂二之燒尾一、於レ說有レ三、其一云、魚躍二龍門一、時、則有二雷電一、爲燒二其尾一而化と、〔四〕碧花　李賀の詩、漆灰骨末丹水沙、凄凄古血生二銅花一と、〔五〕銅綠　銅は管の類、繩に塗るを得、綠は劍首を謂ふ、

蘇子得之何所爲。　蘇子之を得て何の爲す所ぞ、
蒯緱彈鋏咏新詩。　蒯緱鋏を彈じて新詩を咏ず、
君不見凌煙功臣　君見ずや凌煙の功臣長九尺、
長九尺。
腰間玉貝高拄頤。　腰間の玉貝高く頤を拄ふるを、

【詩意】雨餘の江色は清うして風が沙を卷く、此の時や雷公が雲を蹈んで黃蛇を捕へたのである、蛇は空中を行くこと宛かも枉矢の如き形である、電光は煜煜として蛇の尾を燒く、人が之に塊を以て投げて見たれば鏗として聲がある、雷は飛んで天に上り去り蛇は水に入り去る、水上と青山との間削鐵の如き音響が發する、神物が出現するときは山が自から裂ける、自分の兩脅を細看すれば碧花が生する、猶ほ是れ西江の老蛟の血である、今蘇子は之を得て何の爲す所ぞや、或は蒯緱し或は彈鋏して新詩を咏ずるのみ、君見玉はざるや凌煙閣の功臣の像は身長九尺である、其の腰間の寶劍は高く頤を拄ふるのを、

【餘論】紀曰く、此與二薛道士石詩一、同一運意、皆討巧省力之法、彼只成二游戲小品一、而此能不レ失二詩格一者、賴レ有二一結一耳と、王漁洋は「古詩平仄論」中に此の詩を出して曰く、右換韻多寡不レ一、雖二是古法一、不レ可レ爲レ常也と、王覃溪は直是先生（漁洋）當日對二門弟子一匆匆語、門人刻レ舟膠レ柱者幾何矣と、要するに紀評の如く一結を以て餘韻あるを覺ゆるのである、

【八】玉貝　劍を稱して謂ふ、「東觀記」に、玉貝劍拄レ頤と、

【九】蒯緱　「戰國策」に、彈レ鋏歌曰、長鋏歸來乎と、【七】凌煙　唐の太宗、貞觀十七年に、國家の功臣、杜如晦、房玄齡、二十四人を凌煙閣に畫かしむ、

定惠院顒師爲余竹下開嘯軒

定惠院顒師、余が爲めに竹下に嘯軒を開く

啼鳩催天明。喧喧相詆譙。　啼鳩天明を催す、喧喧として相詆譙す、
暗蛩泣夜永。唧唧自相弔。　暗蛩夜の永きに泣き、唧唧として自から相弔ふ、
飲風蟬至潔。長吟不改調。　風を飲む蟬は至潔、長吟して調を改めず、
食土蚓無腸。亦自終夕叫。　土を食ふの蚓は腸無きも、亦自から終夕叫ぶ、
鳶貪聲最鄙。鵲喜意可料。　鳶貪るの聲最も鄙し、鵲喜ぶの意料るべし、
皆緣不平鳴。慟哭等嬉笑。　皆不平に緣つて鳴く、慟哭嬉笑に等し、
阮生已蠹率。孫子亦未妙。　阮生は已に蠹率、孫子も亦未だ妙ならず、
道人開此軒。清坐默自照。　道人此の軒を開き、清坐默して自照す、
衝風振河海。不能號無竅。　衝風河海に振ふも、無竅を號ばす能はず、
累盡吾何言。風來竹自嘯。　累盡きて吾何をか言はん、風來れば竹自から嘯く、

【字解】【一】嘀鵡　鵡は鵡即ちフクロフの類、嘀鵡は杜鵑の異名、今の嘀鵡は鶺鴒である、【二】詆譏　詆訶譏譴で、他人をそしりとがめる、【三】嗜蚤　蚤は多様ある、イナゴ、コホロギ、キリギリス、「詩機蟲魚疏」に幽州人謂之趨織、ハタオリと、【四】唧唧　羽音を言ふ、「古樂府木蘭詩」に唧唧復唧唧と、七月鳴を中心とする、【五】飲風蟬　「月令」に仲夏之月蟬始鳴、季夏之月寒蟬鳴と、【六】長吟　曹子建蟬賦に竭恰樂而長吟と、【七】食土蚓　「荀子」に、蚓土食ニ埃土一、下飲ニ黄泉一、用心一也と、【八】鳶　トンビ、銅馬錫の飛鳶操に、高飛杳杳青雲裏、鳶鳴蕭蕭風四起と、鵲、フクロフの類として鄙しむ、【九】鵲喜　鵲はカササギ、「禽經」に靈鵲光レ喜と、「西京雜記」に、乾鵲噪而行人至と、【一〇】不平鳴　韓退之の文に、大凡物不レ得ニ其平一則鳴と、【一一】慟哭　「戰國策」に、長歌之哀、過ニ於慟哭一、縞笑之怒、甚ニ於裂眦一と、【一二】阮生　晉の阮籍、【一三】孫子　阮籍の友人孫登、「晉書」に、嘯聞於蘇門山一、遇ニ孫登一、與商ニ畧終古一、及ニ栖神道氣之術一、登皆不レ應、籍因長嘯而退、至ニ半嶺一、聞レ有レ聲若ニ鸞鳳之音一、響ニ乎巖谷一、乃登嘯也と、【一四】自照　長嘯する如き奇術を爲さず、自己の心性を觀照する、【一五】衝風振河海　「莊子齊物論篇」に風振レ海而不レ能レ驚と、【一六】不能號　「莊子齊物論篇」に大塊噫氣、其名爲レ風、是惟無レ作、作則萬竅怒號と、【一七】自囁　「說文」に竹得レ風其聲天屈、如ニ人之笑一と、

【題義】定惠院主の顧師が、公が爲めに竹下に嘯軒を開築せられ其の喜びを歌うたものである、

【詩意】啼鵡は正に天明を催す時である、喧喧として相詆譏する如きである、暗蚤は夜の永きを泣き通して、唧唧として自から相弔する如きである、又風を飲むの蟬は惡食せざるが故に至潔である、長吟して其の調子を改むることはない、土を食うて生を保つ蚯蚓は腸なきも、亦自から終夕叫ぶのを聞く、鳶の貪る聲は最も是れ鄙である、鵲の喜ぶは其の意料るべきである、慟哭するも嬉笑するも世俗の外に出ない、阮生なぞも已に蠢率の人間である、孫子なぞも亦未だ妙と爲すには足らない、今顧遺人は此の嘯軒を開築して、是に於て濟坐して冥默自から觀照する、彼の輩が衝風の威を以て河海を振ふとも、無竅を號ばしむることは不能である、俗累が盡きたる吾は亦何をか言はん、風が吹き來れば竹が自から嘯く、

【餘論】紀曰く、奇恣超妙、一掃恒蹊、阮生二句亦可レ省と、査初白曰く、一片悟境と、案ずるに玉梅溪本には阮生の二句無し、紀は無きを以て勝れりと爲すのである、孫子亦未レ妙の五字の如き小兒以上の拙、要するに此の十字は刪除すべきである、然らば瓦を去つて玉を存するもの、

石芝　石芝

元豐三年五月十一日癸酉。夜夢遊何人家。開堂西門。有ニ小園古井。井上皆蒼石。石上生紫藤。如ニ龍蛇一。枝葉如ニ赤箭一。主人言。此石芝也。余率爾折食ニ一枝一。衆皆驚笑。其味如ニ雞蘇一而甘。明日作ニ此詩一。

【訓讀】元豐三年五月十一日癸酉、夜夢む何人の家に遊び、堂の西門を開けば、小園古井あり、井上皆蒼石、石上紫藤を生じ、龍蛇の如し、枝葉赤箭の如し、主人言ふ、此れ石芝なりと、余率爾に折つて一枝を食ふ、衆皆驚き笑ふ、其の味雞蘇の如くにして甘し、明日此の詩を作る、

空堂明月清且新。　空堂の明月清く且新たなり、

〈【字解】【一】了然　明白に理解

幽人睡息來初勻。
了然非夢亦非覺。
有人夜呼祁孔賓。
披衣相從到何許。
朱欄碧井開瓊戸。
忽驚石上堆龍蛇。
玉芝紫筍生無數。
鏘然敲折青珊瑚。
味如蜜藕和雞蘇。
主人相顧一撫掌。
滿堂坐客皆盧胡。
亦知洞府嘲輕脫。
終勝嵇康羨王烈。
神山一合五百年。

幽人睡息來り初めて勻ふ、
了然夢にあらず亦覺むるにあらず、
人あり夜呼ぶ祁孔賓、
衣を披いて相從ひ何許に到る、
朱欄碧井瓊戸を開く、
忽ち驚く石上龍蛇堆きに、
玉芝紫筍生することの無數、
鏘然敲折す青珊瑚、
味は蜜藕の雞蘇に和するが如し、
主人相顧みて一に掌を撫す、
滿堂の坐客皆盧胡す、
亦知る洞府の輕脫を嘲るを、
終に勝る嵇康が王烈を羨むに、
神山一合五百年、

する由云ふ、【二】祁孔賓　「晉書祁嘉傳」に、嘉字孔賓、好學、年二十餘、夜忽窗中有聲、呼曰、祁孔賓祁孔賓、隱去來隱去來、修飾人世、甚苦、不可言、所得未毛銖、所寶如山岳、且而逃去と、【三】何許　何處と同じ、【四】瓊戸　宋之問の詩、靈臺瓊戸特相宜と、【五】瓊珊　「晉書石崇傳」に、武帝助王愷、嘗以珊瑚樹賜之、高一尺許、枝柯扶疎、世所罕比、愷以示崇、崇便以鐵如意擊之、應手而碎と、杜子美の詩、腰下寶玦青瑣朝と、陸龜蒙の詩、玉芝敲折琤然墮と、【六】蜜藕　蓮根を言ふ、【七】雞蘇　「本草」に、水蘇味辛、一名雞蘇、可以李に雞故名、多生水旁と、「石門題跋」に、雞蘇本龍鬚菁荷也、東吳林下人、夏月多以飲客、而俗人不知、私謂東坡誤以用雞蘇爲紫蘇、可發一笑と、【八】盧胡　笑聲が咽喉の間にある義、「後漢蔡勳傳」に、【九】洞府　仙人宮府を言ふ、李昉等

風吹石髓堅如鐵。

風は石髓を吹いて堅きこと鐵の如し、

昔鄭人以乾鼠爲璞、鬻之於周、宋愚夫亦寶燕石、緘縢十重、觀之者、掩口盧胡而笑と、【一〇】羨王烈　「神仙傳」に、王烈字長休、邯鄲人、常服黃精及餌、皆叔夜、其歌愛之、共入山、遊觀採藥、後烈獨之太行、見山破石裂數百丈、兩崖皆是青石、石中有一穴、青泥流出如膏、烈取泥試丸之、隱手堅凝、氣如饗米飯、嚼之、因攜少許、與叔夜、叔夜取而觀之、已成青石、擊之琤琤如銅聲、叔夜即興烈往視之、斷山已復如故と、【一一】神山　「神仙經」に、神山五百年輒開、其中石髓出、得而服之、壽與天相畢と、

【題義】夢に何人の家とも知らずして、門に入りて見れば、古井の上に蒼色の石がある、其の上に紫藤が龍蛇の如く蟠まるを看る、主人の言ふ此れは石芝であると、率爾に折つて之を食へば味は雞蘇の如きの味を爲したのであるが、旁の人は皆之を笑うた、乃ち明日此の詩を作りしものである、

【詩意】空堂を照すの明月は清且新なるを見る、幽人は睡息より出で來りて心氣初めて勻ふ、而して夢でもなく亦覺めても居らぬことは了然である、誰人とも知らず蘇東坡蘇東坡と呼ぶ者あるを、乃ち衣を披服して何許に到ると聞かず唯隨從して行く、行いて見れば朱欄碧井瓊戸が開きてある、忽ちに驚く石上に龍蛇が堆蟠するを、龍蛇と思ひしは玉芝紫筍にして無數に生じてある、折つて見れば鏘然と響ありて皆青珊瑚である、食うて見れば味は蜜藕の雞蘇に和するに似て居る、主人と互に相顧みて一に掌を撫づ、滿堂の坐客は一齊に盧胡して笑ふ、亦知る洞府の神仙が凡夫の輕脫なるを嘲けるを、

而かも自からは嵇康が王烈を羨むの事よりは勝るるを知る、神山が一合すれば五百年開かない、然るときは風は石髓を吹くも堅きこと鐵の如く奈何ともすることが出來ない、

【餘論】紀曰く、亦顏賴に此一結と、此の詩を論じて賴一結と輕輕に斷じ去るは如何なるものであらうか、前前の意義より來りて此の一結と爲る、紀評は輕脫と嘲けらざるを得ない、作法としては四換韻の正體である、

今年正月十四日、與子由別於陳州、五月子由復至齊安、以詩迎之

今年正月十四日、子由と陳州に別れ、五月、子由復た齊安に至る、詩を以て之を迎ふ

驚塵急雪滿貂裘。　驚塵急雪貂裘に滿つ、
淚灑東風別宛邱。　淚は東風に灑ぎて宛邱に別る、
又向邯鄲枕中見。　又邯鄲枕中に向うて見、
却來雲夢澤南州。　却來す雲夢澤南の州、
睽離動作三年計。　睽離動もすれば三年の計を作す、

【字解】【一】急雪　杜子美の詩、急雪舞迴風と、【二】貂裘　貂は獸の名、其の皮を以て裘に作る、尾は冠の飾りとす、【三】宛邱　陳の名、陳州に屬す、【四】邯鄲枕　「太平廣記」に、開元中、道人呂翁、常往來邯鄲、有書生、姓盧、與翁同止逆旅、主人方蒸黃粱、共待其熟、盧生不覺長嘆、翁問之、具言生世困厄、翁開囊中枕、以授盧生、曰、枕此當如願、生俛首、但記身入枕中、遂至其家、未幾、登高第、歷臺閣、出入將相、五十年、怨欠歷歷、主人蒸黃粱、未熟、盧生夢覺、謝曰、先生以寄吾欲耳、自此不復求仕矣と、【五】却來　「唐詩」に强半春寒去却來と、【六】睽離　睽は離れて、【七】三年計　子由と睽離して、三年を計する、【八】牽挽　力一杯に引くこと、【九】黃髮　公の自注に、柳子厚別劉夢得詩云、皇恩若許歸田去、黃髮相看萬事休と、王梅溪曰く、柳子厚の詩、皇恩若許歸田去、晚歲當爲鄰舍翁、劉夢得云、耦耕若便遺身世、黃髮相看萬事休、先生自注、謂合二詩爲一也と、

牽挽當爲十日留。　牽挽當に十日の留を爲すべし、
早晚青山映黃髮。　早晚か青山黃髮に映じ、
相看萬事一時休。　相看て萬事一時に休せん、

【自注】柳子厚別劉夢得詩云、皇恩若許歸田去、黃髮相看萬事休。

身而庶、黃粱猶未熟也、謝曰、先生以寄吾欲耳、自此不復求仕矣と、【一】三年計　子由と睽離して、三年を計する、【二】牽挽　力一杯に引くこと、【三】黃髮　公の自注に、柳子厚別劉夢得詩云、皇恩若許歸田去、黃髮相看萬事休と、王梅溪曰く、柳子厚の詩、皇恩若許歸田去、晚歲當爲鄰舍翁、劉夢得云、耦耕若便遺身世、黃髮相看萬事休、先生自注、謂合二詩爲一也と、

【題義】今年卽ち元豐三年の正月十四日に子由と陳州にて別れ、五月に子由は復た齊安に至る、此の詩を賦して之を迎へたのである、

【詩意】驚塵や急雪が貂裘に滿ち、淚は東風に灑ぎて宛邱に於て嘗て離別した、其の後は邯鄲一夢の中に於て見たが、身はアベコベに雲夢澤南の州に來たのである、睽離して後の動止動作は早や三年を計算する、偶ま過うたのである、極力に十日間は滯留することを勸む、早晚か青山が黃髮に映じて、二人相看て浮世の萬事が一時に休むときぞや、

【餘論】紀曰く、見字不レ對二州字一と、紀評當る、

遷居臨皐亭

我生天地間。一蟻寄大磨。
區區欲右行。不捄風輪左。
雖云走仁義。未免違寒餓。
劍米有危炊。鍼氈無穩坐。
豈無佳山水。借眼風雨過。
歸田不待老。勇決凡幾箇。
幸茲廢棄餘。疲馬解鞍馱。
全家占江驛。絶境天爲破。
饑貧相乘除。未見可弔賀。
澹然無憂樂。苦語不成些。

臨皐亭に遷居す

我天地の間に生れ、一蟻大磨に寄す、
區區右行せんと欲すれば、不捄に風輪は左す、
仁義に走ると云ふと雖も、未だ寒餓に違ふを免れず、
劍米危炊あり、鍼氈穩坐なし、
豈佳山水なからんや、借眼風雨過ぐ、
歸田老を待たず、勇決凡そ幾箇ぞ、
幸に茲に廢棄の餘、疲馬鞍馱を解く、
全家江驛を占め、絶境天爲に破る、
饑貧相乘除す、未だ弔賀すべきを見ず、
澹然憂樂無し、苦語些を成さず、

【字解】〔一〕大磨「晉書天文志」に、周髀家云、天旁轉如推磨而左行、日月右行、隨天左轉、故日月實東行、而天牽之以西沒、譬ヘ之於蟻行磨石之上、磨左旋而蟻右去、磨疾而蟻遲、故不得不隨磨以左迴焉と、〔二〕風輪「倶舎論」に、先於最下、依止虚空、有風輪生、廣無數、厚十六億踰繕那と、〔三〕仁義「孟子」に由仁義行と、〔四〕劍米「晉顧愷之傳」に、桓元在殷仲堪坐上、共作危語、元曰、予頭浙米劍頭炊、仲堪曰、百歲老翁爍枯枝、有一參軍云、盲人騎瞎馬、夜半臨深池、仲堪酌曰、驚曰、此太遇人と、〔五〕鍼氈「晉書愍懷太子傳」に、會人杜錫每盡忠、規過於太子、修慙迹善、遂於鑊湯、太子怒、使人以鍼著錫常所坐氈中、而刺之流血と、〔六〕借眼「寸時の間、眼に借すの意、〔七〕歸田「韓退之の詩、有路即歸田と、〔八〕勇決「杜子美の詩、西方服勇決と、〔九〕疲馬「孟郊の詩、疲馬思解鞍と、〔一〇〕乘除「韓退之の詩、無善名以聞、無惡聲以揚、名聲相乘除、得少失有餘と、〔一一〕弔賀「劉向說苑」に、董仲舒曰、弔者在門、賀者在閭、言憂則恐懼、恐懼則福至、賀者在門、弔者在閭、言受福驕奢、驕奢則禍至と、〔一二〕澹然「莊子列禦寇篇」に、澹然無極、而衆美從之と、〔一三〕不成些「些字「說文」に、語詞也と、意義を含まざる字、

【題義】定慧院より臨皐亭に遷居して感慨を敍せる詩である、

【詩意】我は天地の間に生れたるも、一蟻が身を大磨に寄せたると同樣である、區區として右行せんと欲すれば、聊かも止捄せずして風輪は左旋する、自身は仁義の爲めに奔走すると云ふが、寒と餓との苦に逢ふことは免れない、米を劍頭で炊ぐの危險もある、氈下に鍼があつて穩坐することも出來ない、海內に佳山水無しとは言はず、而かも借眼風雨過ぐるの速覽のみ、老境に及ぶを待たずして歸田する者は凡そ幾人かある、勇決する人は稀である、我は幸に廢棄の餘である、是の故に疲馬が鞍馱を解くことが出來た、全家が江驛を占領して、其の絶境の地は天の開破したのである、是に於て飢貧と乘除するを得た、然らば弔すべきも賀すべきも共に無い、澹然たる我が身は憂も樂もない、又屈原の如き苦語も成さない、

【餘論】紀曰く、有二兀傲之氣一、

曉至巴河口迎子由

去年御史府、舉動觸四壁。
幽幽百尺井、仰天無一席。
隔牆聞歌呼、自恨計之失。
留詩不忍寫、苦淚漬紙筆。
餘生復何幸、樂事有今日。
江流鏡面淨、煙雨輕冪冪。
孤舟如鳧鷖、點破千頃碧。
聞君在磁湖、欲見隔咫尺。
朝來好風色、旗脚西北擲。
行當中流見、笑眼清光溢。
此邦疑可老、修竹帶泉石。
欲買柯氏林、茲謀待君必。

【字解】〔一〕御史府　前に辨あり、〔二〕四壁　「漢王莽傳」に、定安公第、置門衛使者、監領、數阿乳母、不得與語、常在四壁中、と、〔三〕幽幽　「詩小雅」に、幽幽南山と、深遠なる貌、〔四〕仰天　「莊子齊物論篇」に、南郭子綦、隱几而坐、仰天而噓と、〔五〕隔牆　韓退之の詩、隔牆聞謔呼、と、〔六〕留詩　獄中に在りて、子由に寄せたる七律二首を言ふ、〔七〕苦淚　孟東野の詩、苦淚滿眼黑と、〔八〕餘生　謝靈運の詩、餘生不歸雄、何以竟暮歸と、〔九〕冪冪　煙の覆うて低れたる貌、李華の文に、鬼神森兮雲冪冪と、〔一〇〕孤舟　李白の詩、小舟若鳧鷖と、〔一一〕磁湖　「子由詩中」に、舟次磁湖、以風浪留二日と、大冶縣磁山の麓に在る、〔一二〕柯氏林　「名勝志」に、柯山在赤壁高寒亭之東二、と、「圖經」に、柯山四望、南直高邱、と。施德初云、欲買柯氏林、卽此地と、

【題義】黄州を距ること二十里に巴河口がある、曉旦に此の地に子由を迎へて作りしものである、

【詩意】去年は御史府に罪の人と爲りて、一舉一動が總て四壁に觸れる獄室に居りしものである、宛かも幽幽たる百尺の井底に在つて、天を仰げば一席も無きが如くである、牆を隔てて歌呼を聞く事がある、自から恨む計の失なるを、其の時や詩を留むるも寫すに忍びず、苦淚を流して紙筆を漬したのである、已に死は覺悟して居りしが餘生を得たるは何の幸福である、樂事が今日に有るを見る、巴河の水流は鏡面淸淨にして、煙雨の煙冪冪たるは眞に佳景である、而して孤舟は水に泛ぶ鳧鷖の如く、千頃の水碧を點破して行く、聞く君は磁湖に在任して、見んと欲するも咫尺を隔るを如何せんや、今日幸に朝來より好風色にて、旗脚が西北方に擲つて居る、孤舟にて行き中流に當りて見れば、笑眼に淸光溢れてある、此の邦にて老を送るかと疑ふ、修竹好き上に猶ほ泉石を帶びて居る、僕は柯氏林を買ひ取らんと思ふ、茲に君と謀議して君が是非買へと言ふことを待つ、

【餘論】紀曰く、語皆眞至と、慟天哭地の境界を經過し來ることを敍するのであるから、眞至は當然

である、此等の詩中に諧謔の語なぞを用ふれば、決して大宗師では無い、

與子由同游寒溪西山

子由と同じく寒溪西山に游ぶ

散人出入無町畦。
朝游湖北暮淮西。
高安酒官雖未上。
兩脚垂欲穿塵泥。
與君聚散若雲雨。
共惜此日相提攜。
千搖萬兀到樊口。
一箭放溜先鳧鷖。
層層草木暗西嶺。
瀏瀏霜雪鳴寒溪。
空山古寺亦何有。
歸路萬頃青玻璃。
我今漂泊等鴻雁。
江南江北無常棲。
幅巾不擬過城市。
欲踏徑路開新蹊。
却憂別後不忍到。
見子行迹空餘悽。
吾儕流落豈天意。
自坐迂闊非人擠。
行逢山水輒羞歎。
此去未免勤鹽虀。
何當一遇李八百。

【自注】路有直入寒溪不過武昌者。

【自注】李八百宅、在筠州○○、相傳能拄杖日八百里。

【字解】【一】散人　自から棄て世ざる人、「莊子人間世篇」に、幾死之散人と、唐陸龜蒙、自號江湖散人と、【二】無町畦　「莊子人間世篇」に、彼且爲無町畦、亦與之爲無町畦と、心に隔て無く、行くに界無きを言ふ、【三】高安　縣名、筠州に屬す、公は罪を得て筠州の鹽酒稅官と爲る、【四】兩脚　杜子美の詩、出門復入門、兩脚但如舊、所向泥活活、思君令人瘦と、【五】雲雨　劉禹錫の詩、故人雲雨散と、【六】共惜　韓退之の詩、此日足可惜、此酒不可賒、捨酒去相謔、共分一日光と、【七】放溜　皇甫冉の詩、放溜出江口と、溜は流と同じ、【八】瀏瀏　謝惠連の詩、李亭映江月、瀏瀏出谷隈と、風の疾き貌、【九】不擬　杜子美の詩、不擬哭途窮と、【一〇】欲踏　袁物白云、詩、行道兌矣、傳、兌成蹊也、疏、蹊者先無行迹、初爲徑路之名と、「名勝志」に、萬松山、在樊山北、臨江松陰夾路、特爲幽邃、有路直入寒溪山下之捷徑也と、【一一】天意　杜子美の詩、汝病豈天意と、【一二】迂闊　「漢書王吉傳」に、上以其言迂闊、不甚寵異也と、【一三】非人擠　擠は擠陷又は排擠、韓退之の文に反擠之又下石焉と、【一四】鹽虀　鹽類や薬類の稅を徵收する官、【一五】李八百　王梅溪曰く李八百名貶、蜀人也と、歐陽守道碧落堂記云、高安郡于江西、稱道院、相傳爲上古仙人李八百修煉之所と、【一六】刀圭　藥匙、藥

相哀白髮分刀圭。

白髮を相哀んで刀圭を分つべき、

【詩意】散人の出入は紀律なぞ無いから又町畦も無い、朝には湖北に游び暮に淮西、高安の税務官に任せられたるも未だ上途はしない、官吏として威嚴を保つ必要がないから、兩脚垂れて塵泥を穿たんとする狀態である、君と聚散定めなく宛かも雲雨の如きである、一遇したるときは此の日を惜んで相提攜して游ばん、千搖萬兀して樊口に到る、是に於て一箭放溜鳧鷖より先と爲る、層層たる草木は西嶺に暗鬱する、瀏瀏たる霜雪は其の音が寒溪に鳴る、空山の古寺に於て見る所亦何か有るぞや、歸路に當りて萬頃水の青玻瓈色を呈するを見る、我今漂泊鴻雁と身蹤を等しうする、江南も江北も常棲は無い、幅巾して城市を過ぎるは望みでない、唯徑路を踏んで新蹊を開かんと欲するのみ、而かも退却して考へ憂ふ君と別後は獨り到るに忍びないと、子が行迹を見て空しく餘懐がある、吾儕が南北と流落するも天意ではない、自から迂闊の致す所にて人の擠陷したのではない、行いて山水に逢へば輒ち羞慙せざるを得ない、今日の游止めば又鹽虀を監督する勤務がある、何か一度は神仙の李八百に遇うて、共に白髮を哀んで刀圭を分配せんと、

【餘論】紀曰く、語語圓健、用筆每透過一層、最爲沈著、東坡難レ得二此和平之旨一と、詩は八齊一韻なれば、○●（○○○又は●●（○○○蘇家の正法眼藏として、明明白白である、

次韻。答子由。

次韻、子由に答ふ

平生弱羽寄衝風。
平生弱羽衝風に寄す、

此去歸飛識所從。
此を去つて歸飛從ふ所を識る、

好語似珠穿一一。
好語は珠に似て穿つ一一、

妄心如膜退重重。
妄心膜の如く退いて重重、

山僧有味寧知子。
山僧味あり寧ろ子を知らん、

瀧吏無言只笑儂。
瀧吏言無く只儂を笑ふ、

尙有讀書清淨業。
尙ほ讀書清淨の業あり、

未容春睡敵千鍾。
未だ容れず春睡の千鍾に敵するを、

【詩意】平生餘りに壯健ならざる身を以て衝風に寄せて居る、此を去つて歸飛するも我は其の從ふ所を識る、君が作る詩は好語にして珠を一一穿ちたるに似て居る、僕は妄心が膜の如く退きて重重な

【字解】【一】衝風「史記韓安國傳」に、衝風之末、力不レ能レ漂二鴻毛一と、【二】似珠　元微之の詩、一一貫珠隨二咳唾一と、【三】妄心　佛典に、眞心妄心の語あり、妄心とは煩惱心を言ふ、【四】如膜　膜は眼膜、耳膜、眼の薄皮、耳の薄皮、【五】有味　杜牧の老僧詩に、家住二城南杜曲旁一、兩枝仙桂一時芳、山僧尙未レ知二名姓一、始喫空門氣味長と、【六】瀧吏　韓退之の詩、往問瀧頭吏、潮州尙幾里、行當二何時到一、土風復何似、瀧吏垂レ手笑、官何問之愚、譬如レ官二京邑一、何由知二東吳一、潮州底處所、有レ罪乃窟流、僕幸無レ負レ犯、何由到而知と、樂昌瀧を守るの公吏を言ふ、【七】清淨業　「華嚴經」に、自行清淨業と、「觀無量壽經」に、佛日敎二我觀一於清淨業處一と、【八】千鍾　「家語」に、季孫謂二我千鍾一也、而交益親と、

るを覺ゆる、山僧が僧として味あるは子の如き大詩人を知らざる所に在る、又瀧吏は俗吏であるから無言にして只儂を見て笑ふのみ、尙ほ讀書する淸淨の業務が忙がし、未だ容許しない春睡の價は千鍾に敵することを、

【餘論】紀曰く、三四宋格と、案ずるに膜の字「涅槃經」に、圓伊金錍、以扶三四眼無明之膜一とありて、病眼者に就いて言ふ、今之を妄心の上に用ふるは、妥當ならざるを覺ゆ、紀の所謂宋人の詩格は往往之を見る、獨り公のみではない、有二字は例の病である、

武昌酌菩薩泉。送王子立　武昌に菩薩泉を酌み、王子立を送る

送行無酒亦無錢。　行を送るに酒無し亦錢も無し、
勸爾一杯菩薩泉。　爾に勸む一杯の菩薩泉、
何處低頭不見我。　何れの處に低頭するや我を見ず、
四方同此水中天。　四方同じく此の水中の天、

【字解】〔一〕菩薩泉　菩薩の意義は、自身なも救ひ、他人なも救ふと云ふに在れば、泉に名づけて自他を救濟するのである、〔二〕水中天　「初發經」に、有佛出世、名爲水天、教化諸菩薩、修習水觀、入三摩地、

【詩意】君が行を餞別せんと思ふも酒も無く亦錢も無い、已むを得ずして一杯の菩薩泉の水を呈贈する、僕が微意に對して君は低頭するも一向に我を見ることが出來ない、四方同じく此の水中一樣の天に居るからである、

【餘論】紀曰く、竟是偈頌と、題目の菩薩泉より詩想を湧出せしのみ、一時責を塞ぐか、又游戲なるのみ、

和何長官六言。次韻五首　何長官の六言に和す、次韻五首

作邑君眞伯厚。　邑君と作る眞に伯厚、
去官我豈曼容。　官を去る我豈曼容ならん、
一廛願託仁政。　一廛願はくは仁政に託せん、
六字難賡變風。　六字變風を賡し難し、

【字解】〔一〕伯厚　「後漢陳蕃傳」に、朱穆字伯厚、爲州從事、奏濟陰太守單匡贓罪、幷連匡兄中常侍超、三府諺曰、車如雞棲、馬如狗疾、惡如風朱伯厚と、〔二〕曼容　「漢書兩龔傳」に、瑛邪龔舍、兄子曼容、樂志自修、爲官不肖過六百石、輒自劾去と、〔三〕一廛　「孟子公孫丑章句」に、廛無夫里之布、則天下之民、皆悅而願爲之氓矣と、〔四〕仁政　「孟子梁惠王章句」に、君行仁政と、〔五〕六字　六義と同じ、〔六〕變風　「子夏詩序」に、至於王道衰、而變風變雅作矣、故變風發乎情、止乎禮義と、

【題義】何長官が示されたる六言詩に和して次韻せられたものである、

【詩意】邑君の邑君たる資格あるは伯厚である、官を去るの我は曼容に倣ふのではない、一市廛の願ふ所は仁政の人に託するのである、六字の詩は變風なれば賡酬し難いのである、

〔一〕

五噫已出東洛。
三復願比南容。
學道未逢潘岳。

【自注】南海謂狂爲潘岳、近世得道者也。

草書猶似楊風。

【自注】楊凝式也。

〔二〕

石渠何須反顧。
水驛幸足相容。

〔三〕

長江大欲見庇。
探支八月涼風。

此亦餞言之矣と、皮日休の詩、鶴料符來每探支と、

【詩意】昔の石渠閣は何ぞ反顧するを須ひんや、今の水驛は幸に此の身を容託するに足る、長江は大に主人を庇護するが如くなるを知る、是の故に探支する八月の涼風を、

〔四〕

清風初號地籟。
明月自寫天容。
貧家何以娛客。
但知抹月批風。

〔五〕

【詩意】清風は初め地籟號ぶを聞く、明月は自から天容を水に寫して居る、貧家は何を以て來客を娛ましむるぞや、但知れ抹月批風自然の樂みを、

〔五〕

【字解】〔一〕五噫　後漢梁鴻、五噫歌を作る、〔二〕東洛　後漢の都、〔三〕三復　「論語先進篇」に、南容三復白圭と、〔四〕潘岳　公の自注に、南海謂レ狂爲潘岳、近世得レ道者也と、査初白云ふ、潘岳名晃、水集趙先生舍利記云、南海有潘晃者、陽狂不レ測、人謂之潘岳、蓋與京師、言法華偈頌、往來言云、岳日光佛

公の自注に、楊凝式也と、「法書苑」に、楊凝式、善行草、西洛寺觀三百餘處、題寫幾編、號楊風と、尹師魯曰く、楊凝式書、雖自肆、蓋得於己意、剩之則其似レ可レ疑、其得意不レ可レ盡と、

【詩意】五噫の歌は已に東洛より出て居る、三復して丁寧に南容に比するを願ふのである、學道は未だ潘岳の如き術師に逢はないが、草書の自肆放散なるは楊風に似て居る、

【字解】〔一〕石渠　漢の石渠閣、秘書を藏する所、又講論する所、〔二〕反顧　「離騷」に、忽反顧以游目兮、

舊に往觀に乎四荒と、〔三〕水驛　隋皐亭を指すか、〔四〕探支　王梅溪曰く、探支字是官物官錢、有此名、

【字解】〔一〕地籟　「莊子齊物論篇」に、厲風濟、則衆竅爲虛、地籟則衆竅是已と、〔二〕天容　韓退之の詩、天容與水色、此處皆綠淨と、〔三〕抹月批風　王梅溪曰く、餉食者、有批有抹、抹月批風、又戲言之と、施德初曰く、禪宗有薄批明月、細抹清風之語と、

青山自是絶色。　青山自から是れ絶色、
無人誰與爲容。　人無し誰と與に容を爲ん、
說向市朝公子。　說いて市朝の公子に向ふも、
何殊馬耳東風。　何ぞ馬耳東風に殊ならん、

【詩意】青山は自から是れ絶世の景色である、伴ふ人も無きに誰の爲めに其の姿容を呈するぞや、此の事を說いて市朝の公子に向ふも、彼等には何も通ずる能はず馬耳東風である、

【餘論】紀曰く、六言最難、工卽工、亦非正體と、我邦の金龍道人は「六言詩選」一卷を選集せるが、要するに一種の見戲のみ、

觀張師正所蓄辰砂

張師正が蓄ふる所の辰砂を觀る

將軍結髮戰蠻溪。　將軍結髮して蠻溪に戰ふ、
篋有殊珍勝象犀。　篋に殊珍あり象犀に勝る、
漫說玉牀收箭鏃。　漫に說く玉牀箭鏃を收むと、
何曾金鼎識刀圭。　何ぞ曾て金鼎刀圭を識らん、

【字解】〔一〕將軍　漢の李廣、將軍と爲り、結髮して征戰、七十餘戰と云ふ、〔二〕玉牀　「圖經」に、辰州出丹砂、其苗乃白石耳、土人謂之砂牀、箭鏃蓬牀者、色若鐵而瑩澈と、〔三〕金鼎　仙家の用、〔四〕刀圭　醫家の用、〔五〕丹穴　「史記貨殖傳」に、巴蜀寡婦淸、其先得丹穴、而擅其利、數世と、〔六〕裹蹏　「漢書」、武帝太始二年、詔曰、往者駿郊見上帝、西登崆峒、獲白麟、以饋宗廟、渥洼水、出天馬、泰山見黃金、宜改元故名、今更黃金、爲麟趾褭蹏、以協瑞焉と、裹蹏は要するに黃金の名である、〔七〕吐虹蜺　「大洞煉眞寶經」に、上品光明沙者、受太陽、洞通澄明、正眞之正氣、降結紅光、曜如日色、中品白馬牙沙者、受太陽、平和柔順氣、結白光、燦燦如雲母色、下品紫雲沙者、受太陽山澤之靈、結紅紫色と、

近聞猛士收丹穴。　近ごろ聞く猛士が丹穴を收むと、
欲助君王鑄裹蹏。　君王を助けて裹蹏を鑄んと欲す、
多少空巖人不見。　多少空巖人見えず、
自隨初日吐虹蜺。　自から初日に隨つて虹蜺を吐く、

【題義】張師正が家に蓄藏する辰州より出でし玉砂を觀て此の詩を作れるもの、

【詩意】將軍は結髮して以來七十餘度も蠻溪に戰爭をしたのである、分捕品として篋中には殊珍の象犀に勝る者がある、而して漫に說く玉牀には箭鏃を收むと、此れ以上に金鼎と刀圭の貴重品あることを識らない、近來聞く勇猛の武士が丹穴を手に收め、乃ち君王を助けて裹蹏を鑄んと欲すと、多少の空巖は人を見ることが出來ない、辰砂は自から初日に隨つて虹蜺の光彩を吐きつつある、

【餘論】紀曰く、意境開拓、不嫌小題大做、魏叔子謂、小題大做、俗人得意之筆、自是洞見肺腑語、亦有不可一概論者、此類是也と、佛家謂ふ、破一微塵、出大千經卷と、小題大做、必ずしも俗人の事ではない、小題大做の力を有する者は已に俗人ではない、魏叔子が俗人の弊を謂ふとならば可なるも、紀評の如く一概に論ずるは愚である、但此の第三句一本に分箭鏃に作る、收の字では

收丹穴と故障を生ずる、紀が此の事を言はざるは疎である、

五禽言五首　五禽言　五首

梅聖俞嘗作四禽言。余謫黄州寓居定惠院。遶舍皆茂林修竹。荒池蒲葦。春夏之交。鳴鳥百族。土人多以其聲之似者名之。遂用聖俞體作五禽言。

【調讀】梅聖俞嘗て四禽言を作る、余黄州に謫せられ、定惠院に寓居す、舍を遶りて皆茂林修竹、荒地蒲葦、春夏の交、鳴鳥百族、土人多く其の聲の似たるを以て之に名づく、遂に聖俞が體を用ひ、五禽言を作る、

(一) 使君向(二)蘄州。
　　使君蘄州に向ふ、
更唱蘄州鬼。(三)
　　更に唱ふ蘄州鬼、
我不識使君。
　　我使君を識らず、
寧知使君死。
　　寧ぞ使君の死を知らん、
人生作(四)鬼會不免。
　　人生鬼と作る會ず免れず、

【字解】【一】使君　漢代、太守を稱して府君と曰ひ、刺史を使君と曰ふ、凡そ來使の官、亦使君を以て之を稱す、公も使君なれども、今は前の使君、王禹偁を指す、【二】蘄州　湖北黄州府に屬す、今日の蘄州縣、【三】蘄州鬼　公の自注に、王元之、自黄移蘄州、聞啼鳥、問其名、或對曰、此名蘄州鬼、元之大惡之、果卒於蘄、と、【四】作鬼　生は陽

使君已老知何晩。
　　使君已に老ゆ知ること何ぞ晩き、

【自注】王元之、自黄移蘄州、聞啼鳥、問其名、或對曰、此名蘄州鬼、元之大惡之、果卒於蘄。

なれば人と曰ひ、死は陰なれば鬼と曰ふ、

【題義】梅聖俞が嘗て四禽言の詩を作る、公黄州に遷謫せられて定惠院に寓居せらる、其の院舍を遶りて茂林や修竹や荒池や蒲葦がある、春夏の際には、種種なる鳴鳥が羣集する、土人は其の鳥の名を其の聲に依つて名けて居る、遂に聖俞の詩を憶起して五禽言を作れるものである、

【詩意】曾て王禹偁は使君の官を以て蘄州に向はる、而して蘄州鬼の詩を唱へ出さる、我は使君とは知己でない、知己でないから使君の死んだことも知らない、が人生鬼と作ることは誰も會ず免かれざる所である、使君が蘄州に來りし時は年は相當に老いしならん、此の鳥聲を聞いて始めて死を知るは、其の知ること何ぞ晩いのでないか、

(一)
昨夜南山雨。
　　昨夜南山雨ふる、
西溪不可渡。
　　西溪渡る可からず、
溪邊布穀兒。(一)
　　溪邊の布穀兒、

【字解】【一】布穀兒　鳲鳩の異名、「爾雅」に、鳲鳩鴶鳩也、注云、今之布穀也とある、【二】脫破袴　公の自注に、土人謂布穀、爲脫却破袴、

(二)
昨夜南山雨。
　　昨夜南山雨ふる、
西溪渡る可からず、
　　西溪渡る可からず、
溪邊の布穀兒、
　　溪邊の布穀兒、

勸レ我脱(一)破袴。　我に勸む破袴を脱せよと、
不レ辭脱レ袴溪水寒。　辭せずして袴を脱すれば溪水寒し、
水中照見催租瘢(三)。　水中照し見る催租瘢、

【自注】土人謂二布敝一爲二脱却破袴一。

【詩意】昨夜は南山に雨が降る、西溪水漲るが故に渡ることを得ない、西溪邊の布穀兒は、渡らんと欲する我に破袴を脱げよと勸むるが如き語を爲す、我は勸告に應じて袴を脱いで渡れば如何にも溪水は寒い、水中に照して見る催租の瘢が袴にあることを、

〔三〕

去年麥不レ熟。　去年麥熟せず、
挾(一)彈規(二)我肉。　彈を挾んで我肉を規す、
今年麥上(三)場。　今年麥場に上る、
處處有二殘粟一。　處處殘粟あり、
豐年無象(四)何處尋。　豐年無象何れの處にか尋ねん、

【字解】【一】挾彈規我肉　此の義明白でない、施德初は漢書東方朔傳の其實畝一金、今規以爲レ蔽を引いて注するが要領を得ず、海鹿橙は太元經の明珠彈肉費不レ當也を引いて注するも尚ほ明白でない、要するに麥も熟せざるに田獵なぞするは我が肉を損ずる如きものであるとの意と思ふ、【二】上場　唐の王建の詩、麥收上レ場絹在レ軸と、【三】無象「舊唐書」に、牛僧孺奏曰、太平無象、今歲未レ及二至理一、亦謂二小康一、若別求二太平一、非二区區所レ及と、【四】快活吟　公の自注に、此鳥聲云二麥飯熟即快活一。

【詩意】去年は麥が熟しない、農人が心配するに關せず田獵なぞをして役人は享樂する、今年は豐年にして麥が市場に上るのみならず處處に殘粟あるの始末、其の豐年の無象なれば何れの處に其の象を尋ぬるぞ、それには聽取するがよい鳥が林間に快活吟を爲すを、

聽取林間快活吟。(四)　聽取す林間快活の吟、

【自注】此鳥聲云二麥飯熟即快活一。

〔四〕

力(一)作力作。　力作力作、
蠶(二)絲一百箔。　蠶絲一百箔、
壠上麥(三)頭昂。　壠上麥頭昂く、
林間桑子落。　林間桑子落つ、
願儂一箔千兩絲。　願ふ儂が一箔千兩絲、
繅絲得(四)蛹飼爾雛。　繅絲蛹を得て爾が雛を飼はんことを、

【自注】此鳥聲、云二蠶絲一百箔一。

【字解】【一】力作　王梅溪曰く、「列女傳」に、秋胡妻曰、采桑力作、不レ顧二人之金一と、【二】蠶絲　公の自注に、此鳥聲、云二蠶絲一百箔一と、【三】麥頭昂　「王元景談藪」に、元景嘗大醉、楊遵彥謂レ之曰、何大傾昂、元景曰、黍熟頭低、麥熟頭昂、黍麥俱有レ所二以低昂一と、【四】得蛹　「荀子蠶篇」に、蛹以爲レ母、蛾以爲レ父と、蠶が化して蛹と爲り、

蛾が化して蝶と爲る、

【詩意】力作なるか力作なるか、蠶絲一百箔である、壠上には麥頭が昂く見える、林間には桑子が落ちてある、願はくは儂が一箔千兩絲、繰絲より蛹を得て爾が雛を飼はんことを、

〔五〕

姑惡姑惡。
姑不ㇾ惡。妾命薄。
君不ㇾ見東海孝婦
死作ㇾ三年乾。
不ㇾ如廣漢龐姑去
却還。【自注】姑惡水鳥也、俗云、婦以ㇾ姑虐ㇾ死、故其聲云。

〔五〕

姑惡姑惡、
姑惡ならず、妾が命薄し、
君見ずや東海の孝婦死して三年の乾を作す、
如かず廣漢の龐姑去りて却還するに、

【字解】〔一〕姑惡　公の自注に、姑惡水鳥也、俗云、婦以ㇾ姑虐ㇾ死、故其聲云と、〔二〕妾命薄　「漢許后傳」に、妾薄命遇ㇾ竟寒前」と、〔三〕東海孝婦　「漢子定國傳」に、東海有ㇾ孝婦、少寡亡ㇾ子、養ㇾ姑甚謹、其後姑自經死、姑女告ㇾ吏、婦殺ㇾ我母、具ㇾ獄上ㇾ府、于公以爲、此婦養ㇾ姑、以ㇾ孝聞、必不ㇾ殺也、太守不ㇾ聽、

竟論殺ㇾ孝婦、郡中枯旱三年と、〔四〕龐姑　「後漢列女傳」に、廣漢姜詩妻者、同郡龐盛之女也、詩事ㇾ母至孝、妻奉順尤篤、母好ㇾ飲ㇾ江水、水去ㇾ舍六七里、妻常汲ㇾ流而返、後值ㇾ風不ㇾ時得ㇾ還、母渴、詩責而遣ㇾ之、妻乃寄ㇾ止鄰舍、妻夜紡績、市ㇾ珍羞、使ㇾ鄰母以ㇾ意自遺ㇾ其姑、如ㇾ是者久之、姑怪問ㇾ鄰母、鄰母具對、姑感慚呼還、恩愛愈篤と、

【詩意】姑惡か姑惡か、姑が惡しきのではない妾が命の薄き故である、君も見玉へ、東海の孝婦死して三年枯旱を見る、それらの所爲は如かず廣漢の龐姑が婦を去らしめて復た呼び還したるに、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、此種題目、初作猶是樂府、變體歌謠遺意、再作則陳陳相因、轉入ㇾ窠臼ㇾ矣、何效ㇾ之者至ㇾ今不ㇾ已也と、

次韻子由病酒肺疾發

子由酒を病み肺疾發するに次韻す

憶子少年時。肺病疲坐臥。
喊呀或終日。勢若風雨過。
虛陽作浮漲。客冷仍下墮。
妻孥恐悵望。膾炙不ㇾ登ㇾ坐。
終年禁晚食。半夜發清餓。
胃强鬲苦滿。肺斂腹輒破。
三彭恣啖嚙。二豎肯逋播。
寸田可ㇾ治ㇾ生。誰勸耕黃稷。
【自注】新法方田、謂黃稷爲土膏。
探ㇾ懷得眞藥。不待君臣佐。

憶ふ子が少年の時、肺病坐臥に疲れしことを、
喊呀或は終日、勢は風雨の過ぐるが若し、
虛陽浮漲を作し、客冷仍下墮す、
妻孥恐れて悵望、膾炙坐に登らず、
終年晚食を禁じ、半夜に清餓發す、
胃强くして鬲苦滿つ、肺斂まりて腹輒ち破る、
三彭啖嚙を恣にし、二豎肯て逋播す、
寸田生を治す可し、誰か勸めて黃稷を耕す、
懷を探りて眞藥を得たり、君臣佐を待たず、

初如雪花積。漸作櫻珠大。
隔牆聞三嚥。隱隱如轉磨。
自茲失故疾。陽唱陰輒和。
神仙多歷試。中路或坎坷。
平生不盡器。痛飲知無那。
舊人眼看盡。老伴餘幾箇。
殘年一斗粟。待子同舂簸。
云何不自珍。醉病又一挫。
眞源結梨棗。世味等糠莝。
耕耘當待穫。願子勤自課。
相將賦遠游。仙語不用些。

【字解】〔一〕 喊呀　大に口を張る貌、〔二〕 風雨過　岑參の詩、潤上風雨過と、〔三〕 虛陽作浮漚　陰氣實ちて陽氣虛なるを謂ふ、〔四〕 客冷仍下墮　元氣下に墮つるを謂ふ、〔五〕 膾炙不登坐　妻兒と團欒して同膳せざるを謂ふ、〔六〕 萬　萬は腸、心と脾の間即ち胃腸である、〔七〕 三彭　三尸を謂ふ、道家に心中の神を謂ふ、一は腦に居り、二は明堂に居り、三は腹胃に居り、人に害を加ふ、〔八〕 二豎　病魔と言ふと同じ、「左傳成公十年」に、公夢疾爲二豎子一、曰、彼良醫也、懼傷レ我、焉逃レ之、其一曰、居二肓之上、膏之下一、攻之不可、達レ之不及、藥不レ至焉と、〔九〕 遺播　「書經」に、予惟以二爾庶邦一、于伐二殷逋播臣一と、遺は逃亡、播は遷移である、〔一〇〕 君臣佐　一君、二臣、三佐、藥名である、施德初曰く、養レ命之藥多君、養性之藥多臣、治レ病之藥則多佐と、〔一一〕 櫻珠大　「老子節解」に曰く、嗽者溢爲二醴泉一、聚爲二玉漿一、流爲二華池一、散爲二津液一、降爲二甘露一、漱以明レ之、飲藏潤レ身、以流二百脈一、化二養精神一、支飾毛髮、堅固長春と、〔一二〕 隱隱三嚥　嚥は咽と同じ、「孟子滕文公章句下」に、井上有レ李、螬食實者過レ半矣、匍匐往將レ食レ之、三咽然後、耳有レ聞、目有レ見と、〔一三〕 隱隱　不分明なる形容、又憂戚の形容、又盛なる形容、今は盛なる貌、張衡の賦に隱隱轔轔と、〔一四〕 陽唱　「詩序」に、昏朝之道缺、陽唱而陰不レ和、男行而女不レ隨と、〔一五〕 膾炙　「世說」に、桓二公飲酒一、熱二讀離騷一、便可レ稱二名士一と、其だしく酒を飲む、〔一六〕 舊人　「尙書」に、亦惟圖任二舊人一共政と、〔一七〕 坎坷　不遇なる貌、〔一八〕 不盡器　唐の何諷が夢湯賦に、飲不レ盡レ食而死、民歌レ之曰、一尺布尙可レ縫、一斗粟尙可レ舂、兄弟二人不二相容一と、〔一九〕 舊人眼看盡　「後漢書崔寔傳」に、寔歷二顯任一、其妻不レ免二親事一、舂簸之餘、手足胼胝、時人稱焉、と、〔二〇〕 老伴　白樂天の詩、老伴如レ君少、歡情向レ我偏と、〔二一〕 一斗粟　「漢淮南厲王傳」に、廢處二蜀嚴道邛郲一、不レ食而死、民歌レ之曰、一尺布尙可レ縫、一斗粟尙可レ舂、兄弟二人不二相容一と、〔二二〕 舂簸　「後漢書崔寔傳」に、寔歷二顯任一、其妻不レ免二親事一、舂簸之餘、手足胼胝、時人稱焉、と、〔二三〕 梨棗　「眞誥」に右英王夫人、授二許長史一、曰、火棗交梨、此樹一單生、と、梨はナシ、棗はナツメ、藥用である、〔二四〕 等糠莝　糠はヌカ、莝は斫藁、細かに切りしワラ、馬糧である、「史記」に范雎が須賈に菉豆を食はしめたとある、〔二五〕 不用些　些の字、平去二聲を帶ぶ、平聲の場合は純少、スコシの意味、去聲の場合は無意味の助字、兮の字と同用、楚人の聲、今は去聲である、

【題義】 子由が酒の爲めに肺疾を發したるを憂ふる詩に次韻して作れるもの、

【詩意】 記憶する子が少年の時、肺を病んで坐臥共に疲勞を感せしことを、喊呀すること或は終日、而かも病勢は風雨の若くに速かに過ぎて、元氣は虛なるも外見かるはずみを作すが、客冷は仍ほ下墮する、妻孥は心配して悵望する、冷膾熱炙も團欒して食ふことが出來ない、終年の間晩食を禁ず、其

の結果半夜に清饑を訴ふるに至る、胃が強ければ食することは出來るが食すれば腐部が苦惱である、肺が斂まれば腹が輒ち容易に破れる、三彭の邪神が徒らに啖嚙を恣にするのみにて我が身體の摯養にはならない、而かも病魔が肯て遁攝するのでもない、其の寸田を如何して生を治すべきである、誰か黄稷を耕すことを勸むる、懐中を探りて眞藥を得、此の眞藥あれば別に君臣佐を待たない、初めは雪花を積むが如き狀も、次第に櫻珠の大なる如き形を作す、牆を隔てて三咽を聞く、其の聲は隱隱として磨を轉ずる如くである、茲よりして慢性たる故疾は失するを得、陽唱陰和の調子が取れる、神方や仙方を多く歴試したるに、中路に於て或は坎坷する、平生其の容器の量を盡くさず、痛飲奈ともする無きを知る、舊知人は眼看盡して、老伴は今幾箇も餘すことがない、殘年一斗の粟、子を待つて春簸を同じうせんと思ふのみ、云何ぞ自愛自珍せず、自から求めて醉病平生の志一挫する、清める眞源は黎甕を結ぶも、濁れる世味は糠覈を食ふに等し、耕耘して當に收穫を待たんと思ふ、願ふ子の自課を勤むることを、相將に元氣に復して遠游を賦せんと思ふ、仙語は些を用ひない、

【餘論】此の篇は仙書と醫書に精通する者にあらざれば、眞意を解する能はず、吾が解する所、誤れるものあらん、達人の叱正を乞ふのみ、紀曉嵐曰く、末句未レ免二強押一と、公別に苦語不成些の語がある、今、仙語不用些と、共に強押妥ならざる感がある、

鐵拄杖

鐵拄杖

柳眞齡字安期。閩人也。家寶一鐵拄杖。如柳栗木。牙節宛轉天成。中空。有レ簧。行輒微響。柳云。得二之浙中一。相傳王審知。以遺錢鏐。以賜一僧。柳偶得レ之以遺余。作二此詩一謝之。

【訓讀】柳眞齡字は安期、閩人なり、家に一鐵拄杖を寶とす、柳栗木の如く、牙節宛轉天成、中空にして簧あり、行けば輒ち微響す、柳云ふ、之を浙中に得と、相傳ふ王審知、以て錢鏐に遺る、以て一僧に賜ふ、柳偶ま之を得、以て余に遺る、此の詩を作り之を謝す、

柳公手中黑蛇滑。
千年老根生乳節。
忽聞鏗然爪甲聲。
四坐驚顧知是鐵。
含簧腹中細泉語。
迸火石上飛星裂。

柳公手中黑蛇滑か、
千年の老根乳節を生ず、
忽ち聞く鏗然爪甲の聲、
四坐驚顧是れ鐵なるを知る、
含簧腹中細泉語る、
迸火石上飛星裂く、

【字解】〔一〕爪甲聲　杜子美の桃竹杖詩に、憐二我老病一贈二兩枝一、出入爪甲鏗有レ聲と、〔二〕四坐驚　杜子美の詩、落雁四座驚と、〔三〕迸火　呂洞賓の詩、似二石中迸火一と、〔四〕閻王　王審知を言ふ、王は唐末に威武節度使と爲り、後梁之を閩王に封す、福建の地に據る、凡そ六主五十四年、南唐の爲め滅ぼさる、

公言此物老有神。
自昔閩王餉吳越。
不知流落幾人手。
坐看變滅如春雪。
忽然贈我意安在。
兩脚未許甘衰歇。
便尋轍迹訪崆峒。
徑渡洞庭探禹穴。
披榛覓藥採芝菌。
刺虎鏦蛟擲蛇蝎。
會教化作兩錢錐。
歸來見公未華髮。
問我鐵君無恙否。
取出摩挲向公說。

公は言ふ此の物老いて神ありと、
昔し閩王呉越に餉りしより、
知らず流落幾人の手、
坐して看る變滅春雪の如し、
忽然我に贈る意安くに在る、
兩脚未だ許さず衰歇を甘んずるを、
便ち轍迹を尋ねて崆峒を訪ふ、
徑ちに洞庭を渡りて禹穴を探り、
榛を披き藥を覓めて芝菌を採らん、
虎を刺し蛟を鏦き蛇蝎を擲し、
會ず化して兩錢錐と作らしめん、
歸來公を見る未だ華髮ならず、
我に問ふ鐵君恙なきや否や、
取出して摩挲公に向つて說かん、

【題義】柳眞齡字は安期は閩人である、家寶として一の鐵拄杖を所持する、柳栗木の如くにして、牙節宛轉天成である、中空にして簧がある、行くに徹しく響を爲す、嘗て之を浙中より得と、相傳ふ王審知が呉越王の錢鏐に遺り、錢鏐は之を一僧に賜ひ、柳偶ま之を得て以て余に還らる、故に此の詩を作りて謝を表すと、

【詩意】柳公の手中に黑蛇滑かである、千年の老根に乳節を生ずるやと疑ふ、忽ちに聞く鏗然として爪甲に聲あるを、四坐の人皆驚き顧みて是は鐵であることを知る、含簧の腹中は細聲語るが如く、石上に卓するときは火迸しり飛星裂く、柳公は言ふ此の物老いて益す神ありと、昔し閩王が呉越王に餉りし以來、甲と乙と幾人の手に流落せしことを知らず、坐して變滅を看ること春雪の如く、忽然と我に贈れる公の意は安くに在るぞや、兩脚未だ許さない衰歇を甘んじ家に在るを、便ち轍迹を尋ねて崆峒を訪はんと思ふ、徑ちに洞庭を渡りて禹穴を探り、荆薪を披き藥を覓め芝菌を採收し、又險路を行くには虎を刺し蛟を鏦し蛇蝎を擲すことあらん、會ず此の鐵杖を化して兩錢の錐と爲すべきである、而して歸り來りて公に見えんも未だ華髮にはならない、我に問はば鐵君恙無きや否やと、乃ち取出して摩挲して此の如く依然たる狀を公に向つて說かん、

【餘論】紀曉嵐曰く、少し揮洒自如之致一と、世に傳唱する詩ではあるが、坡公の至れるものではない、

【四】衰歇　太白の詩、琉璃恐衰歇と、【六】轍迹「老子」に、善行無轍迹と、【七】崆峒「莊子在宥篇」に、黃帝立爲天子十九年、令行天下、聞廣成子、在崆峒之上、故往見之と、【八】禹穴「史記」に、禹巡狩至會稽而崩、因葬焉、有禹穴、民間云、禹入此穴と、【九】鏦蛟　蛟は龍の一種、ミヅチ、鏦は小さき矛、【一〇】擲　獸類や魚類を刺して掃ふる器具、【一一】兩錐　「說苑」に、干將莫耶、拂鍾不鄒、試物不知、揚刃靡金、斬羽契鐵、斧斤以斷、此至利也、然以之補履、曾不如兩錢之錐一と、【一二】華髮　白髮、【一三】無恙否　施德初云、「桂苑叢談」李德裕贈僧方竹杖詩、及再見問杖無恙否、曰已規而漆之矣、公嗟愴久之と、【一四】摩挲　摩擦と同じ、劉禹錫の詩、船頭大浪鏗、

與潘三失解後飲酒

潘三失解後飲酒するに與ふ

千金敝帚人誰買。　千金の敝帚人誰か買ふ、
半額蛾眉世所妍。　半額の蛾眉世に妍とする所、
顧我自爲都眊矂。　我を顧みるに自から都眊矂たり、
憐君欲鬬小嬋娟。　憐む君が小嬋娟を鬬はさんと欲す、
青雲豈易量他日。　青雲豈他日を量り易からんや、
黃菊猶應似去年。　黃菊猶ほ應に去年に似たるべし、
醉裏未知誰得喪。　醉裏未だ知らず誰か得喪、
滿江風月不論錢。　滿江の風月錢を論せず、

【字解】〔一〕失解　即ち不調の事である。〔二〕千金「魏文帝典論」に、家有敝帚、享之千金、此不自見之患也と、〔三〕半額「後漢馬廖傳」に、上疏長樂宮曰、長安諺曰、城中好高髻、四方高一尺、城中好廣眉、四方且半額、城中好大袖、四方全匹帛と、〔四〕都眊矂五代の王定保が著はせる「摭言」に、我唐進士不捷謂之打眊矂と、又「封龍子」に、古之謂知道者、曰先生、何也、猶言先醒也、不醉也と、目の明かならざる貌を言ふ、〔五〕小嬋娟　次公曰く、柳嬋娟、竹嬋娟、月嬋娟、謂之三嬋娟、今言小嬋娟、似指人言之矣と、〔六〕青雲「史記范雎傳」に、須賈曰、不意君能自致青雲之上と、〔七〕風月　太白の詩、清風明月、不用一錢買と、

【題義】潘三が失解後に飲酒するを聞き賦して與へたものである、

【詩意】敝帚を千金に買ふ類の鈍漢は無い、けれど半額の蛾眉は妍なるものではないが時様を逐ふの者は之を妍と爲る、顧みるに我は自から都て人を見るに眊矂である、又憐む君が時流と小嬋娟を鬬はさんとするの情を、青雲は握れるか握れないか他日の事は今判らない、が黃菊は今年も依然として去年と同様である、而かも醉裏誰も得喪の理は知ることは出來ない、滿江の風月は錢を論じないから之に對して飲酒するもよい、

【餘論】紀曉嵐曰く、三句太凡鄙と、

309
65

終